

なれぬ娘にはかくす内證

月待に傍輩衆のうちそろひ

菟 沾

孝雄 當時月待はどうなつてゐたかはつきりしませんが、大體の例で推すと、廿六夜待などと同じやうに、月が出るのを待つて愈月が出るとお祭をするのをいひます。その待つてゐる間に友達や親類達が集つていろいろ歌を詠んだり詩をつくつたりすることがあつたやうです。「傍輩衆」とは友達の意味、「うち揃ひ」は集るのです。一句としては相當にぎやかな感じがする。然し前句とはどう附くのでせう。「内證」を私はよくないことにとつてゐましたが、内輪の事を娘に隠すのだとしても、どう附けたらいいか私にはよくわからない。月待の家に嫁が来てまだ慣れない意味ではありませんでせう。此二句の附き方は前句と打越との關係がわからない以上に私にはわからない。かりに生活で共通するとしてもどんな生活が共通してゐるのでせう。ここで月待に友達がやつて来るのは豊かな感じがあるとしても、前句には必ずしも豊かな感じを表はしてゐません。どうもわからない附合ですな。皆さんの御意見を伺ひませう。

次郎 僕は小牧がさつきいつたごたごたしてゐる感じをここに認めてもいいと思ひます。

孝雄 月待は表向きだけで内輪には傍輩衆が這入つてこないといふのですか。

次郎 といふより若い侍達が打集つてゐるところにさういふごたごたした感じがあるのです。

豊隆 山田さん、「月待」は女ばかりですのだから、「傍輩衆」といふのも特に女の方に用ゐるとか、何かさういふ様な事はありませんでせうか。

孝雄 「月待」は普通男ばかりがするやうです。「傍輩衆」も友達のことだけです。

次郎 男女打交つてぢやありませんか。

典嗣 阿部君の武士といふ説はどこから出るのだ。

次郎 それは「朋輩衆」といふ言葉にどうしても武士の臭がするからさ。西鶴のものならば『男色大鑑』とか『武道傳來記』にありさうなところだ。

孝雄 私はむしろ町人らしい感じをえます。どうも武士とは思はれない。

豊隆 『俚諺集覽』を見たら、『採蘭雜誌』に「九爲陽數古人以二十九日爲上九初九日爲中九十九日爲下九毎月下九置酒爲婦女之歡名曰陽會蓋女子陰也陽以成故女子於此夜爲藏鉤諸戲以待月明至有忌寐達曙者」と出てゐる、『中山傳信錄』に「八月家家拜月明」とか『夏子陽使錄』に「俗有得月之願凡月初三十人廿三夜皆修吉菓拜待」とか出てゐると、書いてありました。

孝雄 黒川道祐の『日次紀事』に典據的な記事があり、『東都歳時記』などには繪がある位です。

「月待」は廿六夜に限らないで、三日、十三日、廿三日、廿六日と行ひ、毎月したらしいのもあるやうです。「傍輩」といふ語が國文中に最も古く用ゐられてゐるのは恐らく『保元物語』でせう。同書卷二に山田小三郎伊行が「夜明けて後に傍輩の、八郎のいで矢目見んといはんには、何とかその時答ふべき」といつてゐる。それではじめは武士仲間に使つたのでせう。然し此句からは私は武士の感じをうけません。角帯が前垂をとつてゐる様子を想像します。

豊隆 私は婆さんか何かの愚連隊を考へました。

次郎 僕のは衆道の匂ひがする若侍たちだ。

孝雄 芭蕉風の附味として此附句がどう説かれるのか私は聞きたいですな。

次郎 月待に傍輩衆の打揃つてゐるところには、ごたごたしたまを考へてはいけませんかね、上邊は賑かだが時時しらけた氣持が風のやうに吹きぬけるといふやうな。

典嗣 僕はにぎやかさを感じえない、前句を豊かなものとしてみるからだ。

孝雄 次郎 それは賛成しないよ。

義惠 月待は家家でやつたものですか。

孝雄 え、古くは公卿がやつて息災を祈つたものらしいのです。

次郎 僕の子供の頃もあつた。夜遅くまでうすくらい縁などで話し込んでゐると、山の端から弦月が出て来る。それが具合によつて三尊佛が舟に乗つてゐるやうに見えるのを年寄が難有がつて拜んでゐた事を想ひ出す。

義惠 ただの月見とは大分ちがふのらしいですね。

豊隆 え、月待、日待の待は祭から出たのだといふ説もある位なんだから。——岡崎君は此附方をどう思ひますか。

義惠 私はあまりよく思ひません。生活行事の味としていくらか感じがあつてゐるやうに思ふだけですが。まあ生活の味が油濃く出てゐる、世話の味が主だと思ひます。もつといい句がありさう

だ。

豊隆 小牧はどうだ。

健夫 附け方は僕もよくわからない。

義惠 これは雅客の集りとちがつて妙に落著かないごたごたしたものですな。

豊隆 僕からいふと、婆さんが自然と出てくる位に小穢ない所もある。

健夫 婆さんでなければ小宮君の考では附かないのか。

豊隆 まあそんなもので附けたんだらうといふ氣がするのだ。もつとも、さうだとしたところで、實につまらない。

典嗣 連歌の立場からは附きますかね。

孝雄 一寸むづかしいですな。家で共通してゐると見るより外に方法がないと思ひます。

次郎 僕は上邊が賑やかで中はじつくりしないところで附くのだ。つまり西鶴ものの世界だ。此「月待」はおそい月を待つことで、月しろが見える位のところへ生意氣ざかりの若侍が集つてゐるのだ。

豊隆 どうして見ても此句は面白くはならないよ。

孝雄 しかも鈴木本では作者が芭蕉になつてゐますね。

次郎 作者の問題は鈴木本より『續猿』に従ふことに、僕は一般的にきめてゐる。その理由は前にいつたと思ふ。

〇

月待に傍輩衆のうちそろひ

籬の菊の名乗さま〜

里 寛

孝雄 庭に菊をつくつてゐるのでせう。名乗さまさまとあるから、つまらん菊ではなく夫夫いはれのある名がつけてあるのでせう。句面はそれだけです。季は前句とともに秋です。前句との關係はきはめて平凡で連歌ではよくあります。即ち籬の菊のしやれた庭に月待の人人がゐるところなのです。それ以外に氣分でも附けるとしたら、友達がごたごたしてゐると、「名乗さまさま」で附けるのかもしれない。然しそれでは果して附くかどうか私には疑問です。それで私は連歌的に見ますが、さうすると附き過ぎてゐる位附いてゐます。

次郎 すると場所で附くのですね。

孝雄 ええ。しかもよく附いてゐます。

次郎 私は場所で連想し、大勢の友達で連想し、ごく浅いうけ方をしてゐると思ひます。

孝雄 すると連歌風のものですね。

次郎 然も「名乗さま〜」で景色を隠してしまつたので猶面白くない。何となく名前に特別な

興味をもつたことになりすからね。

豊隆 然し作者はさういふつもりではあるまい。その上この句で局面が一轉する。まあそこを買つてやるんだな。

孝雄 それは前句から秋が始つてゐるからでせう。

豊隆 今迄は人事の味が續いてゐたのが、ここで自然の味が大分濃く出て來た。買つてやるとすれば、さういふところを買つてやるべきだ。

孝雄 兎に角ここは人が出てゐませんね。

豊隆 一體この邊は面白くないですね。

○

籬の菊の名乗さま

むれて來て栗も榎もむくの聲

沾里

孝雄 椋鳥が群をなして、どこか木の澤山ある庭にやつて來て、その庭の栗や榎にむらむらとまつてゐる、といふのでせう。この句はそれだけの景色を描いてゐるが、前句とはいささか趣が變つてゐます。前句は眼を主としてゐるのに、此句は勿論眼にも見えるけれど、もう木にとまつてしまへば、聲を主として聞くでせう。そこに相違があります。附けた世界でいふと、場所が共通してゐます。前句は庭の平らかなところで家や畠からさして遠くもなく、家に坐つてゐても見られるやうなところです。その栗や榎に椋鳥ががやがや群れるのです。又季節を秋として、それでも附きます。奇抜な句とはいへないけれど、大體よく附いてゐるといへませう。

豊隆 随分いい句ぢやありませんか。いかにも芭蕉の句らしい味さへある。

次郎 うん、いい句だね。但し鈴木本の初案「うそ火たき中にもさゝき四十から 沾」は御免蒙りたい。うそ、ひたきは綺麗な鳥だね、さゝき、四十からは地味な鳥だ。句意はうそやひたきの中にさゝきや四十からなどが交つてゐるといふのだらうが、面白くない。

義惠 「さゝき」ではなく「さとき」でせう。

次郎 さうですかね。なるほど李東のうつしでなく眞蹟といふもののコロタイプを見るとさうも讀めるか。——どうもさう讀んだ方がいいやうだ。

孝雄 さうですね。「さとき」がいいでせう。

豊隆 四十雀は前にも話が出たが、事實は渡鳥でなくても、發句の方では渡鳥にして秋の季のものとして取り扱つてゐる。此鈴木本の初案の句は四十雀の句で、さうしてその四十雀で秋の句になるのでせう。

孝雄 ええ。此「むれて来て」の句は非難がありませんね。いかにも芭蕉が直したやうに思はれる。

豊隆 此句が附くと前句が餘程生きて來ますね。

孝雄 作者は鈴木本も『續猿』もともに沾圃になつてゐますね。

次郎 直したのはみな芭蕉でせう。

豊隆 此句は僕の非常に好きな句だ。

次郎 久しぶりで小宮のスウペラチヴな讃辭を聞くな。

一同 (笑)

孝雄 ええ、いいとは思ひます。非常にいいかどうかはわかりません。

豊隆 さうですか。僕はこの句を読んでシュウングを感じます。耳の底でびんびん鳴るものがある。

山田さん、渡鳥をかういふ形で表現するのは随分えらいぢやありませんか。

孝雄 ええ、表現法の巧拙は別として、私の方ではかういふ現象はよく見うけますから珍らしくありません。

豊隆 ええ、かういふ現象が珍らしいといふのではありません。然しそれをかういふ風に捉まへたところが珍らしいといふのです。うまい表現ぢやありませんか。一句立としても、附味からいつても、非常にうまいと思ふ。

孝雄 さあ、非常にうまいといふのはどうですかね。

豊隆 するとかう思ふのは僕だけかな。

次郎 さうでもないさ、僕もその意見に半分位は同感だよ。

豊隆 僕は此句を読むと秋が高鳴りしてゐるやうに感じる。

孝雄 私はまた始終かういふ景色を見てゐるので案外感じが鈍くなつてゐるのかもしれない。

當り前としか思へませんよ。

義惠 最上のねうちを此句に與へることは躊躇します。然し表現はうまい。いかにもその境を衝いてゐるやうに感じられます。一句立として特によく味ははれ、前句と附けるといいとは思取れ

ません。

健夫 え、一句としては非常にいい。然し附方は僕は好まないな。小宮君は前句とどう附けるのか。

豊隆 「名乗さま／＼」の菊が咲き盛つてゐる感じと此句の感じとに共通してゐるものがある。義惠 おめでたい前句に對して、此句はあまり響が高すぎるやうです。それにもし油繪のやうに二句を合はせてひとつの景色にでもしようものなら随分いやなものになります。

次郎 この句が出てきたため前句は大分助かりますね。山田さんの説は別に二句を一枚の繪にしてゐるわけではありませんな。

孝雄 え。

豊隆 咲き盛つた、然も名のある菊の花が幾つも列んでゐる所を眺めてゐると出て来る筈の感じと此句の世界の感じは重大な點で共通してゐるやうだ。

次郎 それはさうだ。然し此句のために前句そのものの價值が高まるわけでもない。あれでは菊を描いたとは云へないからね。

豊隆 ただ、恐らくは前句の作者が意識してゐなかつた美しさが、此句の爲に掘り出され且つ活かされる。

次郎 それならいい。前句自體はまづいが、引つぱり出すとこんなものもそこから出るといつて見せた形だね。

豊隆 さうだ。前句に隠されてゐたものが此句で引つぱり出されたのだ。その意味で此句は附句としてもうまいといふのだ。

○

むれて来て栗も榎もむくの聲

伴僧はしる駕のわき

沾 蕉

孝雄 「伴僧」とは古代の修法にいつた伴僧ではありませんまい、和尚の伴して歩き、いろいろその指圖をうけて細細した用を足す「伴僧」でせう。「はしる駕のわき」といふのは、まづ「駕」が問題になる。これは通例駕籠といふのにやや近い乗物で、然し丁寧に造つたもので、普通は武

士や身分のある人が乗つて歩いたものらしいのです。まづこれに乗れるのは、大名以上はいふまでもありません、武家・醫者・一寺の住職以上の僧侶達でせう。女ならばかういふ人人の夫人か姉妹です。此「駕」に乗つてゐるのは和尚で、然るべき格式のある寺の住持か何かで、どれほどの行列かは知りませんが、何處か法事にでも行く途中でせう。その脇についておくれまいと伴僧が足を早めてゐる光景だと思ひます。一句の解釋はこんなものですが、前句とはどう附くのでせう。私にはよくわからないが、今迄此研究會でやつて來た話を基礎として考へると、前句では「栗」や「榎」はものしづかな感じのするもの、そこへ椋鳥が飛んでくるので四邊の靜寂が破られる。此句では此「駕」に乗つてゐる人は、格式がある、まあ相當に威儀をつくらひ、物しづかな感じのする人でせう、その脇を伴僧が走るので、此靜がいくらか動いてくる。その情趣が二句で互に相應じて附くともいつたらしいのでせうか。私の見る立場はどうも連歌風が脱けないのですが、連歌ではもつとあつさり二句の情景として附けます。

健夫 さうすると「伴僧はしる」といふのは伴僧だけが急いでゆくのですか。

孝雄 一寸走るやうにしてせかせか歩かなければならないのではなうか。駕脇といつて和尚の傍には祕書役のやうなものがついてゐます。それが小走りにちよこちよこ歩くのではないか

と思ひます。

典嗣 それよりはむしろ「駕」が急ぐのではないでせうか。それでせはしない氣分になるのです。

豊隆 さうだ、僕もさうとつた。

健夫 さうだね。僕もさう思つてゐた。

次郎 しかし必ずしもさうばかりとはいへないだらう。元來「駕」のテムボは可也早い。それと並んでゆく「伴僧」は可也急がしい。まあ精景氣がいい程度のものにして解釋することも出来るよ。僕はせかせかしくなくてもいいのだ。「伴僧」が走つてさへゐればいいのだよ。

典嗣 兎に角「駕」は早いのだらう。せかせかしてゐるにしろ景氣がいいにしろ兎に角これには緊張した感じはあるのだらう。

孝雄 それはたしかにありますね。

豊隆 「駕」は急ぐ必要があるね。それでないと、前句がダルになつてしまふ。

典嗣 一句としても急いでゐるのだよ。

次郎 ぢや判官切腹の早打か。何もそんなにせかせかせないでも「駕」昇がいい氣持になつて勇みさへすればいいのだ。芝居は御免だね。

孝雄 さうです。そんなに小宮さんや村岡さんのやうに、すたすた走らせなくてもいいと思ひます。急いで走るとすると何だか非常な事件があるやうにうけとられはしないでせうか。

豊隆 いや、そんな判官切腹の様な、非常なことを想像する必要はないのです。唯何か特別な用事があつて急いでゐる。それだけで可いのです。

次郎 用事は捨ててしまつたらどうだ。

豊隆 捨ててもいい。然し「駕」は急いでゐなければいけない。

典嗣 僕の方では急いでゐることが明らかになりさへすればいいのだ。

義惠 「駕」は一つ「伴僧」は一人でもいいと思ひますが。

豊隆 えゝ。但し「伴僧」の数はきめなくてもいいと思ひます。

典嗣 さうだ、それに此「伴僧」はとも僧ではなく、番僧といつてもいいのだらう。

孝雄 昔の伴僧といふ名目と名目は似てゐるが、事實は違つて、この頃のはお伴役をしてゐる僧のことです。さうして読み方はやはり昔のままにバンソウといつたものでせう。それで番僧と書いてもあるわけです。

豊隆 要するに「駕」が急ぐか否かで解釋が別れる。

義惠 兎に角ゆつくり練つてゆくのでない事は確かです。

典嗣 山田さんの説かれた前句との關係はどうなのだ。

豊隆 「駕」に乗つてゐる人がゆつたりしてゐるとは僕は思はない。二句は呼吸で附いてゐる。

次郎 勿論呼吸でつく。しかし同時に位でも附けていいと思ふ。小宮のやうに抽象せずともいいよ。

豊隆 なにこれが附くと前の世界がまた一呼吸になるのだ。

次郎 僕は君の「呼吸」を別に否定はしないよ。「駕のわき」といつてゐるのだから同時に位を附けてゐるのではないかと思ふ。——それから鈴木本には初案が載つてゐる。それが問題になるとどうもわからない。「小僧を伴に衣かひとる 蕉」とあるが「かひとる」は買ひとるのか、それともかひどりのかひとるかどうもはつきりしないね。前句の初案が「うそ火たき中にもさとき四十から 沾」だから、それに附けた此句はどうも女だね。すると女がかひどり姿で小僧を伴につれてゆくのだと思ふがどうだらう。

豊隆 かひどり姿はをかしいよ。

義惠 それはむづかしいやうです。

孝雄 意味はちつともわからないですな。

典嗣 わからないよ。

孝雄 此頃「衣」といつたのは大抵「僧衣」のことですから、さう解釋したらどうでせう。といつて別にこれといふ説もありませんが。

豊隆 「うそひたき」の句がよくわからないからどうも仕方がない。

孝雄 え、初案をこれで受けたのだから何かなければならないと思ふけれど、どうもわかりませんな。

豊隆 此句だけだと、貧乏な田舎の坊主が小僧をつれて衣を買ひに行つた所とすればいいが、然しさうとして、前句とどう附くのかは、よくわからないですね。

孝雄 え、私は此初案をあまり問題にしてゐなかつたので、結局わからないといふより外ありませんね。

義惠 坊主が衣を買ふのは一寸面白いぢやありませんか。

豊隆 え、一寸面白いですね。

孝雄 私にはどうも何としてもわからない。

豊隆 岡崎君はどうとりますか。

義惠 衣を買ふ事になると、季節の感じや、幾分の飄軽味や、景氣が好いやうで、實は寒素な味などで前句へ附くと思ひます。然し「伴僧はしる」の附味とは比較になりません。此句は此巻で「狗脊かれて肌寒うなる」に次ぐ程のものだと思ひます。清爽なものを切迫した力の中に動かしてゐる。筆勢のやうな無形の力があつて人を打つ所がいかにも鮮かです。しかし山田さんのおつしやつたやうに、僧、駕、榎、椋鳥、といふやうな種類の具體的な事物と其關係から來るいくらか複雑な色合も、それに絡んで感じられると思ふのです。「伴僧」が此所では動かさない位を持つてゐるといふやうな事も考へられます。

豊隆 僕は附味の上でもつと無分別なものを感じてゐる。

次郎 ただ呼吸だけを抽象してゆくのはいけない、もつとブライテを持つたままに世界と世界でうけてもらひたいよ。

豊隆 それは君の御勝手だ。

義惠 これは繪にしても一つにならない事はありませんね。

孝雄 え、然し繪にしたよりも此句の方がいいですね。何といつても今迄の句の中ではいい方

でせう。

豊隆 えい、いい句ですね。

次郎 さうだ。うけ方が特にいいと思ふ。

六 (十一月二十日)

伴僧はしる駕のわき

削やうに長刀坂の冬の風

里 蕉

豊隆 小牧がお母さんの病氣で急に東京へ歸りましたので、私が代理を勤めます。——この「長刀坂」がどこにある坂なのか、私にはわからない。曲齋は「黒谷と眞如堂の山の境、眞如堂より焼場への近道なれど、嶮峽にて棺は通らぬ故に北へ廻れり」といつてゐる。湖中は「洛西大澤池大覺寺にあり。左右池にして廣澤、大澤、相澤と云」といつてゐる。『雍州府志』には「長刀坂自吉田山越中山之路也」とある。結局京都にある坂の名前であるらしいが、何所のところにあるのか、はつきりした事はわからない。もつともはつきりした事が分かつた所で、私は其所に行つた事がないのだから、この句を味はふ上に私一己としては何の影響もない譯ではあります。曲齋の説明を見ると、曲齋は其所を如何にも見て來た様に書いてゐる。さうして其所が如何にも

嶮な坂道であるやうに言つてゐる。事實はどうだか知りませんが、若し曲齋の言ふ通りだとすると、私の解釋には大變都合がいい。——長刀坂を登つてゐると向ひ風が吹きつける。それが頬の肉を削いで行きでもする様な、寒い痛い冬の風である。さういふ特別な條件の下に感じられた「冬の風」を詠んだのが此句なのだらうと思ひます。「長刀坂」だから「削やうに」と持つて來たのだと、縁語めかしく受取られ、氣にすれば氣にならないでもありませんが、長刀坂の地勢が非常に嶮しいものと想像すれば、そこに動く冬の風の辛辣さ加減も猛烈に感じられ、「削やうに」もそのままその「冬の風」の嶮しさを感覺的に描いたものであると、素直に解釋する事が出来るだらうと思ひます。前句とは、場所の關係でも付きませんが、私はむしろ此句を前句の勢だけに應ずるものとして見たい。その意味で此附方は響附といつてもいいでせう。しかも此句は前句の響きに可也しつかりと響を返してゐる、さういふ點で此附句はいい附句だと思ひます。

次郎 君のその解釋は「小僧を供に衣かひとる」の方へ附ける附方の話ではないのだね。従つて此句の作者が前句に響附をしたといふのではないわけだね。

豊隆 さうだ。僕は『續猿』の方で言つてゐるのだ。鈴木本でいふと、鈴木本の初案を芭蕉が此句の勢に應じて「伴僧はしる駕のわき」と直してしまつたと言ひたい。

次郎 それから君は坂を登つて行くやうに解釋したが、僕は何となく降りて行く時のやうな氣がするのだ。曲齋説の黒谷と眞如堂の境の坂だといふのは少し可笑しいが——あの間は丘つづきになつてゐてそんな峻しい坂なんかはないと思ふ——黒谷のうらから東山との間の田圃に出る坂なら比叡風が吹きつけてさういふ風にうけとられるがね。

豊隆 登りとも降りとも限定する必要はないが、唯僕には登り坂で風が吹き下ろすといふ様な場合が「冬の風」を「削やう」に受とるのに最も適切である様な氣がする。もつとも「長刀坂」がどこにあつて、どういふ地勢をもつてゐるといふ事が先決問題になるが。

孝雄 結局長刀坂がどこにあるにしてもここへ出したのは長刀といふ名前のためでせうね。

次郎 えい。

義惠 形から考へたのかもしれませんが。

次郎 さうだ、さうも考へられますよ。

正雄 僕は中學生の頃、房州の富山に登つて八犬傳から得た印象をめちゃめちゃにしたことがある。ここもただ「長刀坂」でいいのさ。

豊隆 此句の作者は「長刀坂」にインディギデュアティーをもたせてゐるのだらうぢやないか。

次郎 それに當人は「長刀坂」と「削ツツやう」と互に縁語にしてかけ合はせるつもりでゐたのだらう。それを嫌つて無理にひき離さうとするのは寧ろ僕等の好みから來てゐるだらうぢやないか。この洒落を出来るだけ助けてやらうとすれば、僕は景色よりもむしろ人物を思ひ出してやりたいよ、かういふことをいつてゐる人物だね。

豊隆 すると僕のうけとつてゐる感じと大分ちがふね。

次郎 君の解を少し救つてやればいいさ。

正雄 作者は反つて救つてもらひたくないかもしれないよ。

孝雄 坊さんが駕に乗つてゆき、供の男が長刀を擔いでゆくところが私には想像されます。

光知 「地圖を見て」黒谷と眞如堂との間には冬の風が削ぐやうに當る坂はないやうに思ひますが、眞如堂の北側から鹿ヶ谷の方へ下りてゆく坂なら比叡おろしが直接にぶつかつてこの句のやうな感じがしさうです。地圖の上ではここです。

次郎 僕の思つてゐたのもここです。

豊隆 一體此句の作者は里圃で、里圃は江戸の男らしいが、江戸の男が今日地圖で見てもよくわからないやうな、京都の坂をしつてゐたものだらうか。

次郎 これ位のこととは知つてゐるさ。

孝雄 長刀坂といふ所は都名所圖會に廣澤池と大澤池との間の奥の方にあるといふやうに出てゐましたが、別に必要もあるまいと思つて、本はもつて來ませぬでした。しかしやはり、もつて來たらよかつたですね。そこにある地圖にありませぬか。「やがて地圖で見つけて」ここにありませんよ。廣澤池の北遍照寺山の西を通つて北へ越える所にある坂です。多少嶮峻な坂でせう。

次郎 これなら成程山嵐ですね。

豊隆 さうですね。阿部、どうも登りとした方が好都合な様だよ。

次郎 ぢや坂は登るのでも降りるのでもいいことにしよう。ただ寒さを感じるのには坂の上になつて降りにかかる時の方がいちじるしいものだよ。

豊隆 僕も登り降りはどうでもいい、此句の特別な寒さが感じられさへすればいいんだ。——とところで元祿十五年の『宇陀法師』の中に「狐の顔の白き暖簾」といふ李由の句に「駕物ををくれて走る出家衆」と許六が付け、それに「寒の奇特のあられ降る風」と木導が付けてゐる、三吟の一節がある。もう一つ是と殆んど同じ様な附方があつたが、是は何にあつたか今一寸思ひ出せない。が、かういふ事實は、此『續猿』の此邊の附方が或種の人人に可也強い印象を與へたもの

に違ひない、といふ事を想像させるに足る材料になるものだ。

次郎 さうだね。——ところでさつき僕が訊ねたやうに前句の初案へ此句を附けたとするとどうなるか。

豊隆 さうすれば、前句の坊さんの貧寒な感じと此句に示された自然現象の寒さとがつながる事になるのではないかな。前句の人事の世界が自然に轉じ、さうして前句の中の寒さがここで一層デゼロップすると見るのだね。

次郎 さうか。僕は前句の解が君達とちがふから、前句の中に既に風が吹いてゐるのだ。

豊隆 あ、君は前句を女がかいどり姿で歩いてゐるものととつてゐたんだね。

孝雄 鈴木本の初案につけるか『續猿』の前句につけるかで此句はまるで變つたものになりますね。そこで私は問題にしたいのですが、どつちに附けるのが蕉風の附方でせう。

豊隆 此句を「小僧を供に衣かひとる」につけるか、「伴僧はしる駕のわき」につけるか、どつちへつけるのが蕉風かと仰るのですね。それはどちらにしても蕉風ぢやないでせうか。

次郎 僕は『續猿』の附方の方がすつと蕉風になつてゐると思ふ。

豊隆 どちらにしても、前の附方は古風で、後の附方は蕉風だといふ程、截然たる區別のある附

方ではないぢやありませんか。

次郎 然し蕉風から見ているのか、蕉風から見ていいのかその區別は出てくるだらう。

豊隆 はしりとか、ひびきとか、その他附方にはいろいろの相違があるのだからな。

次郎 君はどちらの附方も許されるといふけれど、山田さんはどつちの附方がより多く蕉風かと訊ねられたのだらう。

孝雄 どつちがいいかどつちがわるいかといふのではありません。蕉風はどちらかとお訊ねしたのです。單に程度の問題ではなく性質に觸れてゐるつもりです。

次郎 といふのはどちらがいいかわるいかといふ事でせう、小宮はそれを蕉風として許されるか否かにとつてゐる。

孝雄 『續猿』の句へ附けた此附方は縁語で附けたやうに見られますね。蕉風では果してこれを嫌はなかつたでせうか。もし又嫌つたとすると、なぜ縁語の問題の起らない鈴木本の初案を訂正してゐるのでせうかね。

豊隆 え、それは縁語の問題が起る可能性もありますが、その點に就ては私はさつき此句の解釋の時に申しました。

義惠 小宮さんは附方としては縁語関係を問題になさらなかった様ですが。「長刀坂」が場所の名前として「削やうに」に係るかどうかといふ點だけではなかつたのですか。

孝雄 え、少しちがひますね。私のは駕についてゐる「伴僧」と「長刀」坂の縁語ですから。

義惠 駕に長刀が縁語になりますか。

孝雄 ここは坊さんの駕で可也儀式張つたものではないかといふ疑ひを讀む者に起させると思ひます。さうするとその駕の中の僧は可然格式のあるもので供の者が長刀をもつてついて行くので此句はそれから引き出されてゐることになる。それを嫌はないでわざわざ芭蕉が初案を直したといふのが私にはわかりません。

義惠 次郎 さういふ縁語になるとは氣がつかなかつた。

孝雄 一體蕉風では縁語などを好まなかつたのではないのですか。

豊隆 必ずしもさうではなかつたらしいのです。「おくのほそ道」に「櫻より松は二木を三月越」などといふ句がある、あれなどは適例でせう。

次郎 それは立場がちがふよ。浮れてゐる時は別だらう。

孝雄 貞門・談林時代の芭蕉ならいいが蕉風をひらいてからは、縁語の如きは蕉風の眞髓ではな

いと斷じてゐたのではないのですか。

豊隆 斷じていけないと言つたかどうかは分からない、芭蕉はもう少し自由な考へ方をしてゐたやうに思はれます。縁語などについても、芭蕉はその中に外にいいものが含まつてゐれば、それが縁語だからと言つて別に問題にするといふ様な事はなかつた、のだらうと想像されます。

次郎 初案を訂正してみても、駕と長刀が縁語だつたと氣がついたとかりにしても、さういふ誤解の可能性に拘泥せず構はずほうつておくといふやうな態度は前にも例があつたやうに思ひますが。

孝雄 芭蕉は縁語は斷じていけないといつてはゐないのでですか。

豊隆 さういふ意味の芭蕉の言葉は、私にはまだ見當りません。だからわからないといふより仕方がないでせう。

次郎 山田さんの仰るやうに、事實、駕の連想から長刀が引っぱり出されてきたとしたら、芭蕉もいけないといつたかもしれないね。

孝雄 嫌疑をうけさうなのにわざわざ初案を直すのがわかりません。

次郎 然し前句との附方はすつと面白くなりますからね。

豊隆 縁語も貞門や談林ではそれだけを全生命としてつくつてゐたのでせう。

孝雄 此句自身もくつつけたと見なければいけないでせうか。

豊隆 いやもつと素直になればくつつかずに濟みさうです。それに「長刀坂」なるものがどんな坂なのかがはつきりすると、もつとくつつかずに濟みさうな氣がします。

孝雄 どうしても此句はくつつけてゐますよ。

豊隆 くつつくとしても、氣にはしてゐたがといふ位の程度のものぢやないでせうか。

正雄 前句が如何にも敏捷に、且つ無氣味に見えるから、削ぐやうにも、長刀も、冬の風も、僕にはあまり即し過ぎてゐるやうに思はれて面白くないのだが。

孝雄 ただ私は初案を訂正したわけが知りたいので、必ずしもわるいとはいはないのです。

次郎 駕と長刀とが附かなければいいでせう。芭蕉はそれが附くかどうかといふやうな疑に對しては用心深く特に誤解を避けようとは考へてゐなかつたと思ひますね。

〔健夫〕 黒谷と眞如堂との境にそんなに峻しい坂道があることは知らない。あの邊の坂なら急ではあつても一寸した坂でそれに木下道になつてゐて、實際はそんなに風當りのはげしい所ではないやうな氣がする。削ぐやうなとは長刀坂といふ名前から來てゐるので、實際の地勢などは構はずに詠んだもののやうに思はれてならない。作者の爲にもう少し親切に言へば、黒谷にある實際の長刀坂はどんな所であつても、此名前で急峻な坂がすぐに想像されればそれで可いのではなからうか。(追記)

○

削^ゾやうに長刀坂の冬の風

まふたに星のこほれかゝれる

葛里

豊隆 「かゝれる」といふ形は「かかりたり」の意味ですか。

孝雄 「かかつてゐる」でせう。

豊隆 夜、空が非常に近く感じられる様な高い所に立つてゐると、空には星がぎらぎらと光り、冬の風がその星の群を吹きまくる様にびゆうびゆう吹く。さういふ所を、例へば俯向きながらにでも歩いてゐて、ひよいと空を見上げると、まふたに星がこほれかかるやうな氣がする。――さ

ういふ利那を描いたのが此句だらうと思ひます。もつとも此句は、どこに誰がどういふ風に立つてゐるといふ様な事は描寫してない、唯いきなり「まふたに星のこぼれかゝれる」とだけ云ひ放つて了つた。私の描いた境地は無論此句が前句と添つて出てくる境地であります。風の強い冬の夜の晴れた空を短い言葉の中に如何にも鮮やかに感じさせる句として、此句は随分面白い句だと思ふ。前句とはべたに附いてゐるやうにもとれさうですが、此句は自分の眼のまはりの感じだけを截り取つて投り出してゐるので、附いてゐて附かず、附かずして附いてゐる、不即不離な附合になつてゐる様に思はれます。是は鈴木本も『續猿』と句は同じですが、作者が沾圃になつてゐる丈が相違してゐる。

次郎 君の所謂不即不離は一方から云へば即則離だね、きつぱり同じ立場に立つてきつぱりちがつたものを見てゐる——「かゝれる」は、山田さん咏嘆の意味を含めてはいけませんか。

孝雄 えゝ、名詞的な形にしてほうり出したのですな。

正雄 「かゝれる」といふ形は佛蘭西の會話の語の *que* で始まる句と同一のはたらき（本文章を略して副文章のみを言ふ）があり、然も文法的外形が更に曖昧である爲めに含蓄の深いものと思ふ。今はつきりとした記憶がないが『枕の草紙』などにはこの形を頗る善用してゐたやうに思ふ。

ふ。

孝雄 えゝ。

次郎 この附方は前句を下り坂として見てゐるね。

豊隆 けれども、君、此所は空を仰ぐのだよ。従つて登り坂の方が可い。

次郎 僕は高い處に立つてゐて見おろす感じだ。ここはなかなか讓歩しないよ。

一同 (笑)

義惠 なに、横向いて居てもいいのですよ。併し上目遣ひはして居るやうに思はれる。

豊隆 星がはらはらと眼ぶたに落ちかかる感じなんだからな。下り坂だと、君、足下に落ちる感じだよ。

次郎 そんなことがあるものか、中空に星がないのぢやあるまいし。

孝雄 坂は登るのでも降りるのでもどうでもいいでせう。

豊隆 まあ然し上り坂の方がより適切な様ですな。

次郎 下り坂の方が眼に近く感ぜられるさ。

孝雄 それからまたここで問題となるのですが、この句も前句と同じやうに縁語を用ゐてゐやし

ないでせうか。「削^{ツク}やうに」といふ言葉があるし、「長刀」があるし、この「星」は兜の星のことではないかと思ふのです。さういふのは戦記物によくあることでせう。それに作者は能役者でもあるし、かたがたさういふ意識が句作當時の頭に働らいてゐたらうと見てもいいだらうと思ひます。

次郎 山田さんのやうな物識りになると、何を御覽になつてもさういふ関係を見出されるのぢやないでせうか。山田さんは物識りにすぎますね。

一同 (笑)

豊隆 そんな関係があらうとは御説を伺ふまでは氣がつかなかつた。

孝雄 それでさうとると「まふた」は比喻の「まふた」になるのですが——まあさうではありま
すまいな。

次郎 えゝ。かりにさうだとしても此句は直接に景色から生れたのだと思ひます。

正雄 此句の表現には支那の詩から暗示をえてゐるやうな所があるね。

豊隆 うん、僕もさういふ氣がしてゐた。感じ方に大分さういふところがある。

次郎 ものいひ方もはずんでゐるしね。

正雄 此句自身は冬の夜の感じを壓縮して抽象的にしたとも言へるね。

次郎 言葉の使ひやうだが、抽象的といふより主観的といつた方が普通だらう。

正雄 主観的……象徴的……僕の意味は、狭く一物に鍾めて、力を勁くするといふのだが。——
かりに此句の感じが前句に含まれてゐるとしても、これ丈の働きがあれば差支へないと思ふ。

次郎 豊隆 うん。かまはないとも。どうにでも變へられる様なものを持つてゐるんだから。そ
れに打越しとはまるで世界がちがつて來てゐる。

孝雄 かういふ言ひまはしは何かもとがなくてはなかなか言へないでせう。かりにそのもとがな
くてかういつたのだとするとえらいものですか。

正雄 豊隆 えゝ、えらいものですか。

豊隆 「こぼれかゝれる」といふのは始終こぼれかかりこぼれかかりしてゐるやうな感じがする
ね。

次郎 始終こぼれかかるのか。

豊隆 うん、感じがね。

正雄 此句なんか徳川の平民文學から出たものとは思へないね。まるでクラシックのものやう

だな。

孝雄 ええ、それには餘り獨創的ですね。日本人が考へ出したとしたらえらいものですね、非常なものだ。

正雄 支那の古詩にはありさうですね。

次郎 然し確とした典拠が見つかるまでは何ともいへない、當人の制作とする外には仕方がないよ。——「こほれ」るのは瞬間的にさう感じたのぢやないかね。長い時間こほれてゐるのではなくて、瞬間がそのままエーキヒなのだ。

豊隆 さういつてもいい。非常にコンセントレートされた刺激が來るとそれが何日までもずつと残つてゐる感じがする、あの瞬間の感じだから。

次郎 うん、さうだ。

豊隆 ここいら邊は調子が張つて來て大變いいね。

正雄 非常にいいよ。

孝雄 ええ、ここへ來て大分よくなりましたな。

〔健夫〕 私には漢詩の表現形式の影響を考へないで此句を評することが出來ない。その爲に此句の獨創性を云云するのでないことは言ふまでもないが、さういふアインフルスなしにかういふ句が出てくるだらうか。(追記)

○

まふたに星のこほれかゝれる
引立て無里に舞するたをやかさ

蕉 寛

豊隆 「たをやかさ」といふ言葉は、山田さん、どんな言葉から來てゐますか。『言海』には「たわむ」から來たのかと云つてありますが。

孝雄 さうでせうね。

豊隆 さうすると「たをやかさ」といふ言葉の中にはグレースフルな曲線の美しさを感じて描き出す力があるわけですね。

孝雄 近代的にいへばさういふのでせうね。

次郎 異存ないね。

豊隆 それで此句は、女を誰かが無理に手をとつて引き立て舞を舞はせる、その女の様子が「たをやか」に見える、といふのでせう。此句はその女を無理に引立てゐる人間がつくつたのでもなく、無理に舞はされてゐる女がつくつたのでもない。傍觀の第三者が作つたものである。然かもその作者はその女に興味といひますか、愛情といひますか、ともかく可也な關心をもつてその女を描寫してゐるのです。さうして此句の中には、非常に柔かな美しい曲線と、それとコントラストを形づくる強い線とが入り亂れて、そこにそのどちらの一つだけの時にも見出す事の出来ない美しさが示されてゐる。言ひ換へると、作者は「たをやか」な線を一層「たをやか」に見せるために、それが「たをやか」でないものと絡みあひ纏れあつた所を描寫してゐるのだと思ひます。春信が達磨と美人とを列べて畫いてゐる。或は歌麿が山賊が花嫁を強姦する所を畫いてゐる。この句の硯ひ所は、かういふ畫の硯ひ所に通ふ所を持つてゐる様です。但しこの句にはさういふ畫に見出される様なグロテスクな味がなく、此所のブルガーな強い線は、「たをやかさ」を一層「たをやか」にするためにのみ役立つてゐる。その意味では浮世繪にはない上品な味を持つた浮世繪だといふ事も出来ると思ひます。前句との附方は、前句にある感覺的に鋭いものを少しばかり

て象徴的なものとして、それにつけてゐるのが此句である。前句の中の感覺的に鋭いものを象徴的なものとして考へると、前句には美しいきらきらするものが亂れて動いてゐる感じがある。その感じから芭蕉はかういふ特別な戀を導き出してゐる。是は芭蕉の頭の働らきの素晴らしい所を示してゐるといふ意味でも、この附方は面白いと思ひます。——一寸申添へますが、さつき此句を上品な浮世繪だといつたのは、此句の中には視覺的な要素だけではなく、觸覺的な要素も多分に這入つてゐる、然もその描寫手段は主として線描である、といふ様な點から、或意味では元祿期の、或意味ではもつと後の浮世繪を思ひ出させる所があるからであります。——それから作者は鈴木本によると里圃の句となつてゐます。然し前句の中からかういふ世界を攫み出して來る仕方、然もそれを前句へ附けてびつたり動かないものにする附方や、又一句立としての特別な美しさの表現の仕方、さういふものを考へると、此句はどうしても芭蕉でなければならぬ。里圃は全然間違ひだらうと思ひます。

次郎 山田さん、元祿時代の言葉として、「引立て」といふ言葉は、どの位の強さをもつてゐますか。さあ踊れ踊れといつて催促する位のものでせうか。

孝雄 古いところでは辨慶が昌俊を引立てるところなどにありますがね。どのくらゐの程度か一

寸いひにくいだが、ここはそんなに強くないでせう。

豊隆 「無里に」とわざわざいつてあるのだから可也強くなければいけないだらう。

次郎 僕は岩代瀧太が朝顔に「女、唄へ、唄へ」なんかといふところを考へるのはいやだ。當時この言葉をどの位の強さに用ゐたのか知りたいね。

豊隆 やはり男の力が這入つてゐるよ。

次郎 併し暴力にする必要はない。

孝雄 もとより力は考へられねばならぬ。しかし暴力とまでいはないでもいいでせう。若し是非いはねばならぬなら、暴力に對して強力とでもいふ位のところでせう。

次郎 小宮の感じてゐるのはブルガーで上品でない強さを認めてゐる點で、僕と同じものを感じてゐるやうだが、僕は小宮の考へたシチ、エー、ションなんか御免だ。僕はそれをもつと「たをやか」にしたいのだ。

豊隆 そいつはいけないよ。

次郎 春信くらゐなものにするのはいい、但し達磨などはもつてこないで結構だよ。況して強姦なんかは眞平だ。

孝雄 小宮さん、此句は芭蕉のでせうか。

豊隆 私はさう思ひます。

典嗣 何となく靜御前らしい句があるぢやないか。

次郎 うん、『評註』はさうとつてゐるやうだ。

正雄 「たをやかさ」を證明するには無論それに對抗してはたらく力を（有形的にも無形的にも）豫想しなければならぬ。「たわむ」といふ言葉から出た「たをやか」には多少「痛ましい」といふ副感がはひつてゐる。然しその副感が餘り強度になつては本來の意味を失ふ。梅蘭芳の演ずる『六月雪』、『女起解』中の女は如何にもたをやかである。それは芝居だからである。苦惱すべき筈の女がその目には媚を見せてゐる。（歌麿は或は辯護の餘地があるかも知れない、芳年に至つてはもはや全くこの範疇から脱する。）若し實際重刑を受くる女を見たらたをやかさは感じられまい。さうすると「たをやか」の言葉のうちには觀者に快感を起さしむべき第三の意味が存してゐなければならぬ。それは同じ語原から來た彈性（あえか、かよわしとはこの點で異なる）の感じである。曲つてのち伸びる性である。女にして見れば、あだつぼさ、コケトリイである。それ故に「たをやかさ」とある以上、「引立て」といひ、「無里に」と云つても、決して暴力的といふ感じ

は與へないのである。

次郎 痴話の一状景としてでもかういふ場面はあり得る。

典嗣 前句を泪と見直してゐるとしてもいいのだらう。

豊隆 さあ、泪とまではいひたくないな。

正雄 僕はただ美しいきらきらしたものが目前に在ると解したいね。

次郎 僕は村岡のやうに見てもいいと思ふ。岡崎君はどうですか。

義惠 星とするか泪とするかといへば、どちらにもとれると思ひます。泪と見るのが一般向きのやうで、さうしない方が私にはより詩的に思はれる。「たをやかさ」の問題は全然力が抜きになつてはいけないけれど、どの程度にするかといふ事になると、結局見る人人の好みに委せる外ありませんまい。

次郎 僕はひつたててゐる男もそんなに強くはないのです。むくつけき男ぢやない、寧ろそれさへも或「たをやかさ」をもつてゐるのです。

豊隆 阿部のやうにすると「引立て」る動作が死にはしないか。

次郎 心理的に強さがあればそれで澤山だ。

義惠 いたはる心を含みながら引立てて居てもいいでせう。

豊隆 此句の場合、女を支配する力は心理的には男にないのです。もしありとすると、「たをやかさ」の感じが大分ちがつてくると思ふ。

義惠 此句に現はれてゐるだけでは、引立ててゐる人の心理や動作の微細な點は到底わからないとおもひます。細かな味は結局鑑賞者が勝手につけるものでせう。

孝雄 阿部さんの「引立て」の解釋は今日の用法と大分近くなつてゐますね。ただこの頃さういふ用法があつたかどうかどうでせうね。一寸疑はしいのです。

次郎 それでは妥協しておくかな。小宮説はこの句に含まれ得る色々なシチュエーションのうち最もブルガーな一例として聞いておく。

豊隆 そんな妥協は御免だ。——此所の「たをやかさ」を十分なものにするにはどうしても「たをやかさ」ならぬ力が必要とされるのだよ。

義惠 阿部さんのは女に手をかけさせたくないのですね。

次郎 手はかけてもいいのです。然し底に了解があつて心理的な強さで女に迫つて行くのでなければいけない。つまり小宮説からスペシアルなものをとるのです。小宮のシチュエーションを必

然的なものにしないならそれでいいのだが。——さうかなあ。妥協が出来なければ分れてもいいよ。

孝雄 此句のいひまはしは私等の立場からいふとちと無理ですな。といふのは「引立て無里に舞する」のと「たをやかさ」と主格が二つに切れてゐるのです。

正雄 その非難は西洋文法が這入つて來てからの後の見方からではないでせうか。

孝雄 いや、もともとかういふいひまはしは認められなかつたのだと思ひます。芭蕉にかういふ言葉遣ひ——見方の位地が最後に轉倒するやうな例——はございますか。

豊隆 いまはつきり覚えてゐませんが、あつたやうですね。

次郎 前にいつだつたか「愚にくらく棘をつかむ螢哉 芭蕉」といふ句を、僕等の方は「棘をつかむ」で一遍切れて「螢哉」とするといふことに決したのに、小宮一人螢が主格で、棘をつかむのは螢だと主張したことがあつたね。今日はもうそんなことをいふまいけれど。

豊隆 そんなことがあつたかな。

孝雄 句形が短かいから、かういふ例は澤山ありさうですね。

次郎 豊隆 ええ。澤山出てくるでせう。

孝雄 さう、かういふ句は途中で一遍切れると見るより外仕方がない。若しさうでなく、全くつづいてゐるとすると押へやうのない句ですね。

次郎 さうして字數の關係がないものとしても「舞はさるるたをやかさ」よりは「舞はする」の方がすつとよござんすからね。

正雄 さつき一寸説が出たやうだが、僕も前句を泪と見立てるのはいやだね。

豊隆 普通はさうとるやうだ。

義惠 ええ、けれどそれはいやですね。

正雄 前句を目前の「驚」と「美」と解して芭蕉がそれに特別の場合を與へたと見たいね。さうすると前句は此句の世界のプロオグともプレリュウドともなる。

孝雄 泪ととるのは私もいやですな。(追記。しかし、これは私自身の注文といふべきで、この句からはさうとられるといふ事ならそれには私は抗議は申し込まれないと思ふ。)

次郎 僕はさうでもありません。

孝雄 この句の女主人公を靜御前のやうにとると、「たをやかさ」以外に氣の毒な感じが含まれはしませんか。

豊隆 え、私はその氣の毒な感じを受けとつてゐるのです。だから第三者が同情といふか愛情といふか、兎に角關心をもつてその舞つてゐる所を見てゐるのだといふ解釋をしました。

次郎 一寸首つたけといふところになるね。ただ靜御前だとすると感じが餘りきまりきつてしまふだらう。

豊隆 靜御前ぢや困るよ。

孝雄 前句を泪と見立てるといよいよもつてさうなりますね。

次郎 小宮、此「引立て」の附方だね、これは前句を見直す一番いい例にはとれないかしら。

豊隆 僕は此句が前句を見直したのだとは思はないよ。

次郎 併し打越についたものとしての前句の解釋から此句は出て來ないね。打越しとの關係を綺麗に拭ひおとして主觀的強調をそのまま受けるところから此句が出て來るのだね。それを見直すといへばいへるだらうぢやないか。

豊隆 だが一方からいふと前句が非常にいいからだともいへよう。

〔次郎〕 席上では氣がつかなかつたが、あとで考へて見て、僕がどうしてもコントラストとしての暴力をエンフアサイズする氣になれなかつたのは「舞はする」といふ言葉の使ひ方から來てゐる

ることを發見した。「舞するたをやかさ」と文法上無理らしい構造を用ゐることによつて、たをやかさを感じる人と、無理に舞はする人との距離が非常に接近する。假令同一人ではないにしても同一人としてもいぐらゐに接近する。だから「たをやかさ」といふ言葉が上の五七の世界を自分に同化させるぐらゐな藝術的機能を發揮するのだ。「たをやかさ」が藝術的に「無里に」を引き立ててゐるのだ。(補記)

〔正雄〕 阿部君の補記で氣が付いたが、山田さんは「舞するたをやかさ」の文法上の無理を非難されましたが、私は却つてそこに俳句の面白味を感じるのです。舞はする人とたをやかの人とは別別の存在であつて、(或は別別にはたらく力の系統であつて、)ある機縁がそこに關係をつけたといふことが、この破格の爲めに、十七字中にはつきりと分つて來ると思ひます。阿部君の説もあります。既に「無里に舞する」といふ能動の言葉があるのですから、いやでも應でもコントラスト(或は抵抗)になります。然し無理に抱くのも、無理に白状させるのでもなく、舞はせるといふ、もつと美的なことですから、暴力とはなりません。それで「引立て」といふ暴力を思はせる初五の句があり、次の「無里に」がいよいよこの不安を大きくする。所が、それは「舞はせる」ことに過ぎなかつた。かくして感情のやや弛緩した所へもつて來て豫想外の別の存在「たを

やかさ」が燦然として現はれて、自分に戀を強ゆる不逞の徒は、實は假装した貴族であつたといふ、佛蘭西十八世紀のロマンチックの小説の常套の大團圓と同じ終末が來たのです。(追記)

〔豊隆〕 阿部は「たをやか」など感じる人と「無里に舞する」人とを同一人若くは同一人に近いものにとるやうだが、僕はやつぱり前説を固持して「たをやか」など感じる人は、「無里に舞する」人とは全然別人であり、しかも「無里に舞する人」をある非難を持つて眺める人であると解釋する。さうしないと「引立て」も「無里に」も「たをやかさ」もよつほど平目なものになる。さうして感情がよほど文化文政あたりのロココになる。(追記)

〔阿部〕 もう一度竹篋がへしをするが「文化文政あたりのロココ」を小宮の方に返上する。三すくみのブルガーナコンポジションを要求する程度が後期になつてどれほど亢進するかは小説や芝居を見ても一目瞭然である。(追記)

引立て無里に舞するたをやかさ

蕉

そつと火入におとす薫

沾

豊隆 「薫」は戀ですね。是で戀が二句になる。句意は火入にそつと人にしれないやうに香を入れたといふのです。前句との附方は、打越の句がその前句に附くのと、型としては似ておます。然し此句の方が前句により多く引つばられてゐる所がある様に思はれる。従つて打越の句ほど自由には前句に附いてゐるとはいへない様です。然しこれはこれで前句まですうつと高鳴りして續けて來た氣分を押ししづめて、巻をしつとりしたものにしてゐる。その點なかなか働をしてゐる附句でもあると思ひます。もつとも此氣分は既に前句で準備されてゐたのだとも言へる。前句に現はれてゐる作者の心持がここへつながつて來てゐて、此句で火入にそつと薫を落す人は、その事によつて或種のラヴの心を現はしてゐるのです。さう言つて了ふと、此句は大したものでもない様にも聞こえますが、然し此句自身の中に既にあてやかななまめかしい感じは十分にあるのだから、此句も是で可也可い句だと言つて可いと思ひます。

正雄 この香は練つた香ですか。

豊隆 なに香木を細く薄く切つたのだらう。

孝雄 白檀などで細かくしたのなら、木を切つたのでもいいですな。

正雄 さういふのなら、落とすと焦げてしまひはしないでせうか。

義惠 「火入」は香爐ですか。

孝雄 え、香爐でせうね。

豊隆 私は手焙だと思つてゐました。香爐だと此句の姿を考へる時困りやしませんか。

次郎 當時の「火入」はそのどつちでもいいのではないか。

孝雄 さういへばこの頃はもう煙草盆も出てゐたでせう。

正雄 手焙か何かでないと「そつと」といふ字がきかなくなる。此句の命は「そつと」にあるのだから。

次郎 かういふシチュエーションを考へるとどんな人間が浮ぶかね。

豊隆 前句の「無里に舞」はされてゐる女に惚れてゐる男の様なものか浮ぶよ。

正雄 男ぢや面白くないな。前句と無理に小説的に連続させなくてもいいよ。

義惠 え、さういふ関係はあまり立入つて考へない方がいいでせう。蕉門では情をひきすぎるのを嫌ひますから。

次郎 ただ此句の氣持を捉へるためにはもう少し突きとめたいと思ひます。——ここで薫を火入に落す方に弱みがあるね。

典嗣 落す人は誰だ。

豊隆 男だよ。

次郎 男でも女でもいいとしてさ。

典嗣 舞ふ女ぢやないかね。僕は舞ふ女が舞に臨んでそつと火入に薫を落すのだと思つてゐたよ。

正雄 それは随分思はせぶりだね。表にはいやがる様子をしておきながら實は好きなのだね。

次郎 うん、それ程ひっかけなくてもいいだらう。

義惠 舞をする時香を焚くことがあるかどうでせうね。

次郎 小宮、この薫を焚く人間の心持の中にはどんなものがあると思ふ。

豊隆 腹の中にもつてゐてそれが外に出せない、さういふ意味での怨、だの恨、だのいふ様なものがある。

次郎 さうだ。此句自身の中に押へた戀の弱みがありますよ。

孝雄 今までいはれるやうに解すると、此句は前句の中に全然含まれてしまひ、一句立の價値は

なくなりはしませんか。

次郎 私等のやうにすればさうもならないでせう。

孝雄 一句立でさういふ解釋が出来ますか。

次郎 え、出ると思ひます。

孝雄 一句のたたないやうな解釋はしたくありませんね。

義惠 これは一句として戀の句と見るべきでせうか。

次郎 此程度のもを戀と見做すのは蕉門では普通でせう。

義惠 「なれぬ娘にはかくす内證 沾圃」の方がより多く戀の句として受とられさうにも思はれますね。

豊隆 さうですね。

次郎 正雄 むしろ内容から此句の方を戀としたいな。

孝雄 「娘」は戀です。連歌では、もう或る言葉が出れば、それで戀にしてしまひます。すると「娘」の句から丁度五句目に當りますね。——此句は前句を離れて、一句立としても面白いと思ひます。ここらは感じて通しておいてもらひたい。

次郎 え、感じだけでいいですね。僕は此句は好きだ。

豊隆 うん。

孝雄 前句にはいひまはしの上に無理があるし、私はこの句の方がすつといいと思ひます。

義惠 この「そつと」は、單に動作の静かさだけでなく、ひそかにする意味もありませうか。

豊隆 次郎 え、さうですね。

正雄 さうとるのが自然でせう。

○

そつと火入におとす薫

花ははや残らぬ春のたゝくれて

沾 寛

豊隆 鈴木本の初案では「花ははや残らす春の只暮て 蕉」となつてゐます。それが「残らぬ」と直してある。もし初案通りに「残らす春の」だとすると、「残らす」で一度句が切れて、さうし

て春が徒らに暮れてゆくことになります。「残らぬ春の」となると、たつた一字變つただけですが、心持がずつとなだらかになる計りでなく、徒らに暮れてゆく春のさびしさがはつきりして來ると思ひます。句意はいふまでもなく、花も名残なく散つてはや残るものもない、その春が徒らに暮れてゆく、といふので、ゆく春のさびしさがさらりと素直に描かれてゐます。その世界は、前句に含まつてゐる世界を自然の道具を使つて現はし、然もその氣分をここではいくらか濃く感じさせてゐる。前句とは素直に付き、又前句とは素直にちがつた世界を出したい句だと思ひます。——それから、鈴木本には「只暮て」とあるが『續猿』には假名で「たゞくれて」と書いてある。是がもし「たゞくれて」でなく「たゞくれて」であるならば、わびしい雨や風の爲に、花も残つてゐない行春の世界が滅茶苦茶にされて、一層佗しいものに感じられるといふのだらうと思ひます。

次郎 「たゞくれて」といふ言葉があるかね。

豊隆 あるよ。

孝雄 どうも聞いたことがありませんね。

義惠 私もしめてです。

豊隆 うちの祖母がよく使つてゐた言葉で、著物の裾がたたくれるなどといひます。滅茶苦茶になる意味です。祖母の使つてゐた言葉を今から考へ返して見ると、此時分の言葉が大分ある。それでこの言葉もそれぢやないかと思つたのです。

義惠 なる程、その意味でたたくるといふ言葉なら私の國にもありますが、物質以外には使はないうやうです。

次郎 だがここは「たゞくれて」では困るよ。

孝雄 春が滅茶滅茶になるのでは困りますな。

豊隆 あまり劇しすぎますね。

次郎 「残らぬ」と初案を直したのですつかりよくなつたね。

正雄 なぜいいのだ。

次郎 「残らす」では其處で強くなり過ぎるのだ。それを一語變へただけで、おぼろにながつた一つの世界になつていつて句意によく叶ふのだ。

正雄 うん。「残らぬ春」となると、いろいろな屬性をもつ春のうちの一つの特別な春となるのだ。すにすると、次の「春」が一般的の「春」といふ概念になつてこの句が常套的な暮春の説明

に墮してしまふ。日本語もなかなかデリカなものだね。

二四〇

孝雄 「花ははや残らぬ春に只暮て」といふのがあつたが、誰がしたのですか。

次郎 多分曲齋でせう。

正雄 いい句だが「たゞくれて」は一寸空虚だね。

次郎 うん。花も残らずなつた春がたゞ暮れて行くのだからね、空虚は空虚でいいぢやないか。

豊隆 是は空虚な心持をよんだものだからな。——「等閑に香たく春の夕かな」といふ蕪村の句がある。是は此句と此前句とから幾らかづづ取つて来て作つた句の様な気がする。蕪村は或は此所からヒントを得たのかも知れない。

花ははや残らぬ春のたゞくれて
瀬かしらのほるかけろふの水

里 寛

豊隆 此「瀬かしら」といふ言葉ははつきりしませんが、瀬に波が立つてゐる、その波の表面をさすのではないかと思ひますが、どうでせう。

次郎 浪がしらから来た言葉かね。

豊隆 さうぢやないかと思ふんだがね。

正雄 或は造語ではないか。

次郎 いや、よくある言葉ではないかしら。

孝雄 私も實はよくある言葉だとばかり思つてゐたのですが、後で氣がついて少し調べてみましたが、どうもわかりませんでしたな。

義惠 瀬の一番先といふ意味にもとれさうだが、此句の場合には一寸も面白くなくなりますね。

次郎 瀬の一番先といふと。

義惠 いくらか急湍になつてゐる所を瀬とすると、その先頭で、瀬になつてゐない部分との境目です。しかし其處から陽炎が上るといふのも變なものですな。

豊隆 それぢや「瀬かしら」はまあそれとして置いて、「のほる」といふのはどういふのでせう。これも是々でははつきりしませんが、凡そ河で「下る」といふのは河の流れてゆく方向に運動す

る事を指すのだから、そこから推すと「のほる」は河の流れに逆行する事を意味するのではないかと思ひます。最後に「かけろふの水」がわからない。鈴木本によりますと、初案が「河瀬の水をのほるかけらふ」で、訂正が「瀬の上のほる水のかけらふ」となつてゐます。それで、この鈴木本の訂正の下七を此句へ持つて来て「瀬かしらのほる水のかけらふ」とすると句の意味もわかるし且つ面白い。しかしそれを借りずに「かけろふの水」を強ひて解釋するとすれば、まあ陽炎を立ててゐる水即「水のかけろふ」と同じ意味だとするより仕方がなさうに思はれる。河瀬の水が波を立てて流れる、その水に陽炎が立つてゐる、瀬だから波が或傾斜をもつて河下に流れて行く、陽炎はその上に燃えてゐる、水は下へ流れるのに陽炎は一所にゆらゆらと揺れてゐるから、丁度それは瀬がしらを逆流して——「のほ」つて行く様に見える。さういふ光景を捕まへたものではないかと思ひます。さうとれば此句の感じ方はなかなか近代的な感じ方になる、さうして揚句としてなかなか振つた句になる。もつとも附味の方からいふと、要するに前句に漠然と歌はれた暮春の自然の中の、はつきりした一光景を此所に据ゑたに過ぎないものではあります。然もその一光景はかなり象徴的な意義を持つてゐる一光景であります。「陽炎の水」だの「のほる」だのに就いては、どうか皆さんのお説を伺ひたいと思ひます。山田さん、如何です。

孝雄 わかりませんが、「かけろふの水」といふことは。

義惠 陽炎の動いて流れる様な感じを「水」といつたのではないでせうか。

豊隆 さうですね。少し表現が新しすぎるが、さうもとれますね。

正雄 やつぱり「水の陽炎」のつもりぢやないかな。

次郎 小宮説では「瀬かしら上るかけろふ」だけでいいのだね。「水の」といふ言葉はただ十七字にするために附けたとなるのだね。

正雄 どうもまづいね。唯「瀬かしら」で持つてゐる丈だ。

義惠 「水のかけろふ」といふと、前の「瀬かしらのほる」にくつついて、水が瀬をのほる様にとられる虞れがある。

豊隆 さうですね、それだから「かけろふの水」としたのはしたが、そつちの心配はなくなつた代り、今度は言葉が不熟になつたのでせうね。

次郎 ことによると見付けどころはいいから救けてやらうと思つて芭蕉がいろいろ骨を折つたけれど駄目だつたと見たらいいかもしれないね。解釋は小宮のが一番面白さうだ。

義惠 かういふ現象は自然の中によくありますね。流を見てゐると岸が逆に動くやうに感じられ

るのが面白くて、永い時間見て居た事は度度あります。此句のやうな景も何だか一二度見た事があるやうな気がします。

次郎 僕のところでは春に氣をつけてゐればわかる筈のだが。

正雄 水の流は河下から上へと見る場合が多いね。確かに言へないが、何かさういふ衝動があるらしいよ。

豊隆 義惠 ここは河を横から見てゐるのです。

孝雄 正雄 私は下の方から見てゐましたよ。

豊隆 さうですか。私はそのつもりぢやなかつた。まあ兎に角河が横めに長めに見られる位置なら、別に何所ときめなくても可い。

孝雄 横に見たらこの陽炎が見えますまい。

次郎 いや必ずしもさうではありますまい。眞下から見てゐると陽炎はじつとしてゐるやうに見える理窟だが、少し斜に見れば眼が流れ下る水に誘はれるから自然かげるふが上るやうに見えるでせう。結局眼が始終動いてゐるので、横から見てもいいだらうと思ひます。

豊隆 もつとも河の流れで陽炎が上ると感じられるやうな位置にゐさへすればいいわけですね。

孝雄 ええ。「河瀬」の方はせいかみのほると讀まうとしたのかもしれないね。瀬かしらとせのかみとはこれで同じものでせう。

正雄 面白くない句だ。

次郎 うん。かげろふの水が窮してゐるやうだね。

豊隆 それはさうだ。

孝雄 句意としては鈴木本の初案が一番よくとれますね。

豊隆 ええ。

〔健夫〕 「瀬かしらのほる」は私も小宮説のやうに解釋した。「陽炎の水」も陽炎の立つ水の意に解したのだが、水は只餘儀なくつつけたやうなものでなく、此句の光景の焦點をなしてゐると思ふ。きらきらと目に光る水、それに陽炎が立つてゐるのである。瀬がしらといへば水の景色であることは分り切つてゐるが、ここに更に水を置いたので、水の光が鮮かになつて来る。私が此句を讀んで一番強く目に映るのはその美しい水の光である。——かういふ意味で私にも小宮と同じ様に、此句の描寫に一種近代的なものが感じられる。(附記)

〔次郎〕 會のあとで氣をつけて河瀬を見てゐる(僕の書齋からは河瀬を下斜に見てゐる)と、冬

だから陽炎は立たないが、冬の澄みきつた空気の中に、波に反映する日光が鮮かな點になつて河上にのぼつて行くやうに見えることを發見した。かげろふも同じ理窟だらうと思ふ。かういふところを見つけたところに作者の手柄を認める。併し僕は「水のかげろふ」にも「かげろふの水」にも依然として一種のひつかかりを感じる。小牧の辯護は一應尤もだが、それが自然の感じとして僕の心に流れ込んでくれないので困る。(補記)

〔正雄〕僕も皆の言ふ所を聽いてあとで考へて見ると、滿更捨てたものでもないと思ふやうになつた。かげろふを脊負つた水が鮎かなどの如く瀬を上るといふやうに、近代的の措辭法として見直すと、なかなかしやれたところがある。但し理窟から云ふと、水では逆流する筈がないことになるが、視覺の錯だと見ればそれでも済む。(追記)

ひさこ

花見

木のもとに汁も鱧も櫻かな
西日のとかによき天氣なり
旅人の風かき行春暮て
はきも習はぬ太刀の鞞ヒキハタ
月待て假の内裏の司召
靱白つくる袖かはやわさ

翁

曲珍

水碩 翁 水碩

鞍置る三歳駒に秋の來て
名はさまゝに降替る雨
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮
中にもせいの高き山伏
いふ事を唯一方え落しけり
ほそき筋より戀つのりつゝ
物おもふ身にも喰へとせつかれて
月見る顔の袖おもき露
秋風の船をこはかる波の音
雁ゆくかたや白子若松
千部讀花の盛の一身田
順禮死ぬる道のかけろふ

水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁

何よりも蝶の現そあはれなる
文書ほと力さへなき
羅に日をいとほるゝ御かたち
熊野みたきと泣給ひけり
手束弓紀の關守か頑に
酒ではけたるあたま成覽
双六の目をのそくまで暮かゝり
假の持佛にむかふ念佛
中ゝに土間に居れば蚤もなし
我名は里のなふりもの也
憎れていらぬ躍の肝を煎
月夜ゝに明渡る月

水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁

花薄あまりまねけはうら枯て
唯四方なる草庵の露
一貫の錢むつかしと返しけり
醫者のくすりは飲ぬ分別
花咲けは芳野あたりを欠廻
蛇にさゝるゝ春の山中

翁 碩 水 翁 水 碩 翁

翁 十二
珍 碩 十二
曲 水 十二

木のもとに汁も鱧も櫻かな

翁

光知 元祿二年『奥の細道』の旅から旅を續づけた芭蕉は、九月伊勢に赴き、神宮を拜し、故郷上野に歸り、つづいて奈良・京都・伊勢邊を往來してゐたが、その三年の春近江に遊び、大津の濱田珍碩が洒落堂に杖をとどめた。此『ひさご』の一卷は、芭蕉と珍碩及び近江膳所の藩士菅沼曲水がその時相會してつくつたものである。沼波瓊音氏の編纂した『芭蕉全集』によると、『芭蕉翁發句集』には「木の下は、汁も鱧も櫻かな」とあり『芭蕉句選』には「木の下に、汁も鱧も櫻かな」となつてゐるさうです。又元祿三年三月廿七日伊勢の風麥亭で催した連句會では「木のもとに汁も鱧もさくら哉」の發句に風麥が「明日來る人はくやしがる春」といふ脇を附けてゐます。テキストに就て注意すべきことはそんなことですが、句意は、風麥が解したやうに、陽春、櫻の花が今を盛りと咲いてゐる木の下で花見をすると、汁にも鱧にも花がはらはら散りかかつてくる、

その景色だともとれませう。殊に「木の下は……」とするとさうなります。又、それに對して、わざわざ花見に出かけたのではなく、咲き亂れてゐる櫻の木の下に庵があり、そこに宿つてゐると、汁や鱈を食べる時にもいつも花見をする、といふ意味にもとれるやうです。あの花山院の御歌の「木の下をすみかとするればおのづから花見る人となりにけるかな」を發句にしたやうに解するのです。ここではむしろさうとりたい。最後に汁といふ言葉は古いところでは大抵吸物に用ゐたのではないでせうか、ここなども私にはさう思はれますが。

豊隆 どぜう汁は味噌汁だし、鰻汁も味噌汁ですね。ただ汁といへば味噌汁の事なんだから、ちゆうちゆう吸つて食べるものなら、何でも汁と言つていいのぢやないでせうか。少くともここは土居君のいふやうに吸物にして置きたいと思ひます。

次郎 だが當時はどう解釋してゐたかを調べてからでない、うつかりしたことはいへないね。まあ兩方に通することはたしかだ。立入つて限定しようとする勢ひポエトリの内容に入らないとわからないな。

光知 「木のもと」はコのもとと讀むのでせうね。

義惠 コでせう。然しうつかりしたことはいへませんね。

典嗣 クラシカルな讀方はコのもとでせう。

次郎 豊隆 だがここはクラシカルなものではなく、誹諧なんだから、かへつてキのもとと讀むんぢやないかな。

義惠 キと讀むとはつきり木を意識するやうぢやありませんか。

豊隆 え、コと讀むと心持が少しアブストラクトになる。

義惠 ここは誹諧ではあるが、當時はすべてコのもとと讀んでゐたのではないかと思ひます。然しかうしたことは證據がはつきりあがらなければ駄目ですね。

典嗣 土居君が解釋に二つあるといつたが、その第一説を採らない理由は。

光知 第一説だと花見遊山の光景ですが「汁も鱈」も重箱に入れて持つて行くものではなく、どうも花見に野山へ出かけたところとは考へられないのです。寧ろ木の下に庵を結んだ「洒落堂」に逗留して、御馳走になつてをり、何かにつけすぐに花が眼に入る景だと僕は思つたのです。

次郎 すると汁を吸ひ鱈を食ふにも花見をするといふのですね。

光知 え、。「木の下に」とわざ／＼初五に置いてあるのが一層さうとらせたのでした。

次郎 土居説にはむしろ「木の下は」の方が妥當ぢやないでせうか。

豊隆 うん、さうだな。

二五四

光知 「は」とすると客観的で、外から見てゐるやうにとられはしないでせうか。にはある時間感も感ぜられます。

次郎 ええ。「は」にはたしかにさういふ感じはありますね。然し「に」にするとそんなに違ってくるでせうか。「に」とすると、一層眼前の實景といふ意味が勝つて来るだけぢやありませんか。それを木の下に庵を結んでゐて見た景色としても構ひませんが、さうすれば寧ろその庵に暫く住んでゐる間に経験した一情景と解すべきではないでせうか。

光知 ええ。櫻の咲く間ゐるやうな氣がしますね。一體此句は珍碩の庵でつくつたのではないでせうか。

豊隆 「四方より花吹入て鳩の海」の句は洒落堂で作つたものらしいが、是はどうですか。兎も角僕は此句を、芭蕉が花見をしてゐて、その花見で眼前経験してゐる所を詠んだものだと思つてゐました。だから此「木のもとに」といふ言葉にも可也インディギデュアルなギジョンがある様に思ひます。

次郎 うん、僕は「に」とあつてもやはり土居君の所謂第一説を採るね。

豊隆 「に」なら殊にさうなる。

典嗣 どうしてもここは第一説だね。この「木」は櫻の木だ、他の木の下でないのは明らかだ。なほ土居君のいふ「汗」が吸物といふ感じはどこから出てくるのです。僕はむしろみそ汁、さつまいものやうなものとする。その方が野趣があると思ふ。

義惠 それでは見たところも汚なくて少しいやです。

一同 (笑)

光知 此句はわりに軽いあつさりした句ではないでせうか。

次郎 さうですね。——土居説のやうに、この主人公が住み慣れた人の日常生活のことだと見てゐるいは、この汗や繪があまり御馳走すぎるやうに思はれるからです。僕は第一説のとほりに花見と見たいね。

豊隆 うん。つまり汗につけ繪につけ花見をするといふのが土居君の第二説で、汗にも繪にも櫻の花がはらはらと散りかかる御花見の、眼前の描寫だと見るのが僕等の説だ。

光知 僕は汗や繪が花だらけになるのを中心として味ははず、ただ花の感じがすべてにあればいいと思つたのでした。

二五五

次郎 さつき土居君は花山院の御歌を引いたが「木のもとに旅寐をすれば吉野山花のふすまをきする春風」といふ西行の歌だと落花になりますね。僕は此句を落花の景にしたい。

典嗣 園遊會のおでんやだね。

豊隆 落花狼藉なんだ。

光知 すると野天で花見してゐるのですか。

次郎 ええ。

豊隆 野天で花見をしてゐて、汗や鱈が出てゐる、それをエンデョイしながら、それ等のものの上に花が散りかかるのをアプリシエイトした句ではないかと思ふ。作者のサヴデェクティヴィティーが可也濃く出てゐる。

次郎 いい氣持になつてゐるといふのか。

豊隆 さうだ。

義惠 この花見は可也大がかりなものでせう。酒も出てゐるし、汗も出てゐるところだと思ひます。

典嗣 此繪も汁も木の下で料理しながら食つてゐるところとはとれないか。

豊隆 それでもいいよ。すると、花が散り込むのは、宴席ではなく、その宴會のための料理場だといふ事になる。

典嗣 うん。宴席がしつらはれてゐるとまでは考へられないから。

豊隆 料理場を考へてもこの句は面白い。

次郎 いや、それにも及ばないさ。

豊隆 料理人がしきりに仕事をしてゐる様子を外の人が見てゐるとするのだ。

典嗣 料理場の穢ないごたごたしたところが美化されてゐるんぢやないかね。

次郎 どちらどろしたところがか。

光知 あんまり綺麗とも思はれませんね。

義惠 此汗はつめたくなつてゐるやうに感じられますね。

次郎 料理場からつめたくなつてゐる奴は閉口ですね。

豊隆 此料理場をさう大がかりなものとししないで、宴席の小蔭か何かちよこちよこやつてゐる光景だとするのだ。さうすればいいよ。——要するに僕は、村岡の見つけ所が決してつまらない見つけ所ではないといふ事が言ひたいのだ。

次郎 何もつまらない説だといふのではないよ。

豊隆 ここは一體落花で何もかもが一緒になつてゐるのがいいのだらう。

次郎 だから料理場に限らない方がいいのさ。土居君、「木のもとに」と「木のもとは」と二つあるとさつきいはれたが、何にさう出てゐるのでしたつけ。

光知 『芭蕉翁發句集』がはで、『芭蕉句選』がにです。

次郎 どつちが先に刊行されたのでしたかね。

豊隆 『句選』の方が先だ。然し既に『ひさご』に、とあるのだし、ここはにがいい。

次郎 にだね。僕等のとらうとする立場からはね。

義惠 土居さんのお説は何かにありましたね。

光知 格別僕は見ませんでしたか。

義惠 曲齋がさうぢやなかつたでしたか。

次郎 いや、曲齋はいけないといつてゐます。

義惠 さう、曲齋がいけないと言つてゐる説に「花見に行きては汁繪の味も一入勝る」といふのがありましたね。

豊隆 さうか。みんな櫻の味になるといふ譯なんだな。

次郎 土居説がややそれに近いね。「降懸るにあらず」といふところが。

光知 私も花が散りかかるのを否定するのぢやありません。食事をする時も花見をすることを強くいつたのです。

豊隆 やはりこれはお花見の現在眼前とした方が可い。

次郎 僕もさうだ。然し脇との関係があるから土居説を聞かうぢやないか。

○

木のもとに汁も繪も櫻かな

西日のとかによき天氣なり

珍碩 翁

光知 四方はのどかに霞がたなびき、西に沈まうとする日がしづかに照らしてゐるところです。一方では櫻の花が散る下に花見をしてゐる、その二つが一つとなつてつくのでせう。又「西日の

とかに」といへば「よき天氣なり」といふことは包含されてゐて、理論的には不必要のやうですが、調子から味はうと穩かですつきりしてゐて軽いのかなところがあります。そこが前句の調子と合つてゐるやうにも思ひます。かりに此句が靜かな夕日の景で、前句が花見のさわがしい景色として、對照させると、『續猿』の「内はとさつく晩のふるまひ 里圃」に「きのふから日和かたまる月の色 沽圃」と附けた附方と或點で似てゐるところがありはしまいかと思はれます。

次郎 土居君。「西日のとかに」は沈んでゆく日が主ですか、その日をうけた空氣が主ですか。

光知 空氣が主だと思ひます。

次郎 えゝ、さうですね。だから「日和かたまる月の色」よりはもつとハアモニアスでせう。

光知 えゝ、此處には靜心なく花が散つてゐる、そして靜かに沈む日の幽遠な光りがこの花に限の雰圍氣を與へるのです。

義惠 えゝ。これは平凡なやうで侮り難い句ですね。

次郎 さう、いい句だ。

豊隆 僕は「よき天氣なり」がなかなか働らいてゐるやうに思ふ。これで作者のサヴヂェクティヴイティーがはつきり表現されるのだから。

次郎 うん。何だか此句はまるで人と人との話の中の文句みたいですね。

光知 えゝ。

典嗣 此發句と脇との附方は和歌の上の句と下の句の關係とどちらがつてゐるか。

次郎 さういへば、かういふ二句をつぎ合はせたやうな歌を太田水穂君がつくりさうだね。

義惠 村岡さんの仰るのは、附方の味はひからですか。

典嗣 えゝ。

豊隆 一體脇は、外の附句と違つて、前句に——發句に、より密接につけべきだといふ事になつてゐる。

典嗣 それは知つてゐる。

豊隆 然しその事は、脇が發句の附屬物みたいになつて、發句がなければ脇が一句として味がまともらない、といふ様であつて可い、といふ事ではない。

典嗣 つまり獨立して附いてゐるのだね。その附方だけについて見て、和歌の上下兩句の關係とどこが違ふか。

豊隆 和歌は卅一文字でまとまつた一つの世界になる筈のものだらう。發句と脇とは十七字と十

四字と各獨立して纏まる筈のものだ。もつとも和歌にも三句ぎれといふ形がある。然し三句ぎれが和歌の根本形式だとは決して言へないのだから、誹諧とはちがふよ。

典嗣 だが和歌のきれ方とどこがちがふかといへば、はつきりした區別は立てられないのだらう。義惠 それは全く程度問題ですね。

典嗣 すると附合は和歌のやうに景色で付けても連想で付けてもいいのだらう。

次郎 だが前句と後句と二つの世界が照應してこなければこまるよ。

典嗣 「心なき身にもあはれはしられけり」「鳴立つ澤の秋の夕暮」の附方ならいいだらう。

豊隆 もつといい例がある。——「久方の光のどけき春の日に」「しづ心なく花の散るらむ」と

「木のもとに汗も鱈も櫻かな」「西日のとかによき天氣なり」とを較べてみたまへ。その間の相違が和歌と誹諧との相違だ。

義惠 同じ和歌でも『新古今集』以後は可也誹諧に近いのです。

豊隆 さうだ。連歌が盛んになつて來てからの和歌は、形の上で、可也誹諧に近いものになつてもゐる。

典嗣 誹諧は和歌から出たのだらうが、果してどこまで和歌から變りえたか、それをききたい。

芭蕉の場合は如何だ。

豊隆 上の句と下の句との離れ方が、誹諧と和歌とでは可也違つてゐる。そこに重大な相違がある。

次郎 誹諧が和歌になつてはいけない、然し或種類の和歌と誹諧とが似てゐてはいけないかといふ問題になると、それは似てゐてもいいのだらう。

豊隆 かりに和歌の上の句と下の句と、連歌の前句と附句と、誹諧の前句と附句と、それぞれの離れ方を物指で量つてみると、和歌は一寸、連歌は二寸、誹諧は五寸といふやうに、それぞれ離れ方の相違がはつきり量れるに違ひない、と僕は空想してゐる。唯その物指を發明するのがむづかしい丈だ。

典嗣 それは程度の差だといへばわかるがね。ただ全く素直に比喻と見てよいやうなものを西洋の美學でいふ象徴といふものにしてしひ、それらを誹諧や和歌に求めるのはどうかと思ふのだ。

次郎 説明はむしろ西洋流にやる方がいいよ。作者自身が意識してゐてもゐなくても彼が事實上それに従つてゐた法則を突込んで理解するために西洋流の言葉を使つても構はないだらう。

豊隆 和歌を上上の句と下の句とにわかれたものとして考へる考へ方がプレドミネートするやうに

なつてからは、その二句の間の連接や照應に就いて、我我が今日漠然と考へてゐるよりは遙に具に考へる人が當時幾らもあつたに違ひないと思ふ。あの餘情とか餘韻とか幽玄とか枯びとかいふ言葉にも、一方から言へば、さういふ方面の努力が表現されてゐるとも言へると思ふ。

典嗣 だが和歌の餘情や幽玄は觀念の連合や情景の對照の間に自らに生れるところを言つたものだと思ふ。比喻や比喩的な意味のシムボルまでにはなつてゐるけれど、それ以上ではない。だから西洋、特に近代の、作者にはつきりした意識があつて作られる象徴詩などの場合とは大分違つて解しかつ味ふべきものだと思ふ。

義惠 新古今時代になると情調が觀念の附隨的産物でなく、觀念を産む内在的な力となつて來てゐると思ひます。それは近代的な象徴と認めていいのではないでせうか。

豊隆 茶の方では物の置き合せとか取り合はせとかいふものを非常に八釜しく言ふ。その取り合はせや置き合はせを見事に感じ得る人は即ちにはひやひびきを立派に感じ得る人なんだ。それと同じだよ。

典嗣 僕はさういふのはシムボルといふべきでないで對照だと思ふ。昔の人はそんなことを意識してゐないのだ。

豊隆 意識してゐなかつたかも知れないが、然し立派に感じてゐる。それでいいぢやないか。

次郎 和歌は一首としてつくるが、誹諧は二つを附ける、それはちやんとわかつてゐたと思ふ。

義惠 意識といふといけない、自覺といへばいいでせう。

次郎 さうだ、ただはつきり反省はしてゐなかつたのだ。

典嗣 僕の意識と言つたのは自覺と同じことだ。

次郎 それをわれわれは反省していつてゐるのだ。

義惠 芭蕉などになるといくらか反省もしてゐたと思ひます。

典嗣 その例がしりたい。

豊隆 芭蕉が一度作つた句を、ああ直しかう直してゐる。又一所懸命作りかけて、つまらないと氣がついてやめたといふ材料もある。さういふ例は土芳の『三冊子』などに澤山出てゐる。

次郎 さうだ、誹諧は二句の照應だから、その間の呼吸については立派に反省があつた筈だね。

豊隆 結局、芭蕉が生きてゐて、僕等のやつてゐることを見たら、うん、その通りだ、その通りだ、と賛成するに違ひないことを、僕等はやつてゐるに過ぎないんだよ。

一同 (笑)

典嗣 うん、然しまた餘計なことをいつてゐると思ふかもしれない。その餘計なことをいふまいとするのが僕等の態度だ。——その議論はここで打きりにしておかう。

西日のとかによき天氣なり

珍碩

旅人の虱かき行春暮て

曲水

光知 この句は、晩春のむづかゆいぼかぼかした暖かさを「虱」で出しただけだと思ひます。此「旅人」はどういふ人か、此句からだけではつきりさせられないやうです。「春暮て」は、晩春の意味と、日が暮れるのと、二つに解釋出來ますが、ここは晩春の方だらうと思ひます。

豊隆 さうでせう。僕も晩春の方だと思ひます。

光知 此句からは晩春の觸感が感じられるだけです。此旅人をどう解釋したらいいでせうか。

次郎 さうですね。この句から丈でははつきりさせられないが、特別に穢ない旅人でないといふことだけはわかりますね。

典嗣 ええ。此「虱」もただむづかゆい暖かさを示すのに選んだのでせう。

次郎 さうだね。

次郎 同感だ。小宮、芭蕉の虱の句は。

豊隆 『野さらし紀行』の最後に「なつ衣いまた虱をとりつくさす」といふのがある。

光知 西洋の詩歌には虱などはあまり見當りませんね。

典嗣 さうだ。西洋の詩文には珍らしいですね。曙覽の歌には「著る物の縫めくくに子をひりてしらみの神世始まりにけり」といふのがある。

豊隆 『おくのほそ道』に「蚤虱馬の尿する枕もと」といふ句がある。『猿蓑』の「夏の月」の卷に、「手のひらに虱這する花のかけ」といふ附句もある。調べてみたらまだあるかもしれない。

光知 前句とはどう附くのですか。暖かい感じで附くのですか。

次郎 さうですね。僕には此附方は面白くないのです。

豊隆 「虱かき行」といふ所には、何となく飄げたところがあつて、前句の「よき天氣なり」といふ所に、よく附く様でもある。

次郎 ただ内から附いたのだとは思はれないな。

典嗣 かういふのは僕にはよくわかる。前句の「西日のか」をうけて景色で附く。

豊隆 僕は此句を相當に買はうとするのだが、「風かき行」と「春暮て」との連接の工合が、はじめが鮮明で後がぼやけてゐるやうな氣がして、一寸面白くない。

光知 前句に感じた一つの心持を表現せんとして、わざとらしくしたやうなところがありますね。

次郎 え、わざとらしいところがある、そこが面白くないのだ。

義惠 曲水は後で「蚤」を出してゐるし、一體に此卷では變つた事をやつてゐるやうですね。

典嗣 此曲水といふ作者はどういふ人だね。

光知 次郎 近江膳所の藩主本多氏に仕へた侍で、後に奸臣を斬つて切腹した人です。

典嗣 珍碩も侍か。

豊隆 いや、これは酒堂ともいつた洒落堂の主人で、醫者だ。——此珍碩の脇は破格な留め方なんだよ。大抵韻字留といふ事になつてゐる。

典嗣 といふと、テニハで留めてあつて、名詞で終つてないといふのだね。

豊隆 さうだ。

〔典嗣〕 曙覽の風の歌、外の二首を補ふ。「綿いりの縫目に頭さしいれてちむ風よわかおもふとち」「やをら出てころものくひを匍匐ありて我に恥見する風ともなな」(追記)

〔豊隆〕 席上で一體西洋の詩歌に風を取り扱つたものがあるだらうかといふ話が出た。「ファウスト」の中でメフィストが唄ふ唄がある、あの中のは蚤だつたかな、風ぢやなかつたかな、いやあれは蚤だ、といふ様な話も出た。結局西洋の詩歌に風を取り扱つたものは、あんまり見當らない様だといふ事になつたのであるが、あとで念の爲めグリムの風といふ字の所をあげて見ると、獨逸の詩人の詩歌に現はれた風が可也澤山引用されてゐるので、驚ろいた。ゲーテがある、ケラーがある、古い所ではザックスもある、フィッシャルトもある、その他いろいろある。——ゲーテのは、*Hat doch der Walfisch seine Laus, / Musz ich auch meine haben.*「鯨に風がゐるからは、俺にゐるのに不思議はない」といふのである。フィッシャルトのは、十六世紀の皮肉屋だけあつて、大分愉快なのがある。*„Als bald im linken Ermel frei / Fand er ein ganze Companeï / Feister und schoener Laeusz aufs Best, / Vollkommen und wol ausgenaezt, / Die spacierten da auf und nieder / In allen Naechten hin und wider.”*「左の袖を返して見ると、肥つた見事な風がうちやうちやゐた、脂の乗つたはちきれさうなからだをして、縫目縫目

をあちらこちらと散歩してゐる」。——是は村岡が紹介した曙覽の虱の歌に何所か似通つた所がある様にも思はれる。もつとも曙覽ほど主觀が尖り出てはゐないけれども。(追記)

旅人の虱かき行春暮て

曲水

はきも習はぬ太刀の鞞

翁

光知 「鞞」は革に藁の脊のやうな皺文をつけたもので、かなり古い王朝時代からあつたらしいのです。ただ旅行の時、刀や脇差を鞞に包んだのは、武家時代以後のことではないかと思ふのです。『貞丈雜記』に『今時旅行する者、刀脇差にひきはだの革にて尻鞞(さやを入る袋)を作りてさやにかくるをひきはだと云ふは、ひきはだの尻鞞といふを略していふ詞なり』とありますから。伊勢貞丈といふ人は何時頃の人ですか。典嗣 天明頃に没したと思ふ。

次郎 それから『和訓栞』にはかう出てゐた。『延喜式』に皺文或は波文をよめり蝦蟇皮の義也といへり新撰字鏡に絛を條ノ屬又波文也と注せり又刀蕨をよめり。刀蕨とは土居君のさつき云つた刀の鞞覆のこととせうね。

豊隆 然し徳川時代に普通の刀の事を「太刀」といつたものかな。それに「はく」といふのも問題になる。

光知 ええ。それで時代がはつきりとわからないから困つてゐます。

義惠 普通にはいはなかつたかもしれないけれど、必ずしも絶対にいはなかつたとはいへないでせう。現に西鶴にも『夢の太刀風』といふ言葉があります。

典嗣 貞丈がいふのなら、信賴出来るだらう。「はく」といふ言葉も、ここで外にいひやうがなければ、仕方がないから、使つたかも知れないよ。

義惠 ただ此句を読んで、古い世界が浮んでくるのは事實です。

次郎 次の句はここをさう解釋してゐます。

義惠 言葉遣ひはたしかに古いといへますね。

豊隆 結局これはわからないといふより仕方がない。

義惠 かういふ時に山田さんがおられるといいのですが。

一同 さうですな。

典嗣 前句への附方も、これらの用語がはつきりわからないとわからないな。

次郎 さうだ。此句自身がはつきり古い時代を思はせるかどうかもわからないですね。だが此人があまり旅行したことはない人であること丈はわかる。又「鞆」も旅行の時に用ゐるものだとはいふこともわかる。

光知 ええ。それで武家の世とすれば、若い身分のある武士の子がまだ慣れない旅をしてゐるところだといふ風になりますね。又もつと以前の時代だとすると、地方官などが地方のさびしいところを旅してゐるやうにとられます。

次郎 又鞆は刀の掩ひの全部か一部かはつきりしないから困るが、鞆は蝦蟇肌でどこぼこざらざらなものだといふことも想像されるね。

典嗣 「鞆」は虱を連想させるよ、色が白くてうづうづしてゐるからね。

豊隆 だが此句は僕にはリアルに映つて來ない。

次郎 旅に慣れない子だといふことはわかるが。

光知 もつと古い時代ならみやびといふところでせう。

典嗣 「はきも習はぬ太刀」だから、旅行なれないことはわかる。すれば此「旅人」は必ずしも子供でなくてもいい、貴族でもいいよ。

光知 さうです。芭蕉の現はさうとしたものは、前句の旅人の感じをうけて、可也寂しい旅行にあつたのではないでせうか。そしてそこに多少ロマンチックな情趣を入れやうとしたのだらうと思ひます。

次郎 ええ。「はきも習はぬ太刀」に、古代めかしき感じがあるとするのはいい。ただ此「鞆」がアナクロニズムになるかどうかは山田さんにも訊ねないとわからないところですね。

豊隆 うん。それに大抵の註釋家はここを自明の理にしてゐる。

次郎 曲齋は鞆を鞆にしてゐる。尤も彼のは當にならないことが多いから、ここもどれだけ確かかわからない。

典嗣 この句は一體にクラシカルな感じのするものだ。それに前句の「虱」を取合せたところに誹諧があるのぢやないか。

豊隆 さういふ説を立てた人もある。『芭蕉翁附合集評註』の著者などがさうだ。——何か此句

にはもつとよく前句と附くべきものがある筈だと思ふのだが、どうもわからない。

次郎 意味はよく附くよ。「家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」の流儀に解しても附くさ。

豊隆 その歌の方がすつといい——といふより、よくわかる。

典嗣 椎の葉はナイーヴだが、この句はずつとクラシカルだ。

義惠 私は是を上品な句だとは思ひません。假に貴公子にしても俗化した感じですが。附き具合はこれでいいと思ひます。

豊隆 え、前句の感じを引いて来ると、此句は確に俗な味であるべきだといふ氣もします。

次郎 實は僕は此句を讀んだ時古代めかしい感じをうけなかつたよ。

豊隆 前句の味をひいてこの句へ来ると、此所にあるべきものは、寧ろ庶民の味だといふ豫感が動く。それなのに此所には「はく」といふ言葉が出て来る、又「太刀」といふ言葉が出て来る。

この二つの言葉が此時代どういふ風に用ゐられてゐたかによつて、そのギジヨンは色色に變りさうに思はれる。

義惠 滑稽感がありますよ。

豊隆 さういふものを僕も感じてゐるのです。

次郎 古代にしても或は近世の町人にしても、兎に角ウンゲシククトだ。ただ必ずしも俗な味でなくてもいいだらう。

豊隆 猿が冠をかぶつてゐる、さういふ所を側からデスクライプしたものぢやないか。——少くともさういつた氣味合ひの心持を僕は感じる。

次郎 僕はそんなに露骨なものにするのはいやだ。「旅人の虱かき行」く前句にしても、旅人そのものはさして重大ではなく、問題はむしろ旅にあるのだと思ふ。

豊隆 僕は何となく此句に狂言の味の様な味を感じる。さうして旅の心持よりも、旅人そのものを感じる。さうしてその旅人には或リディキュラスなものがある。

次郎 前句の作者は次の句に俗なものを豫想して詠む、それに後句がクラシカルな世界を詠むと前句の作者は嘲られたことになる——さういふ意味でリディキュラスだといふのなら一應わかる。

豊隆 いや、さういふ意味でなく、此句の中に或リディキュラスなものがある様に思はれるのだ。もつとも「はきも習はぬ」とか「太刀」とかいふ言葉は言葉自身として僕にクラシカルな時代への連想を誘ふ。それが前句から来る或俗な感じと纏れ合つて、そこに又一種不思議な不協和な感

情を惹き起す。それがリディキュラスな感じを起させる源になるのかも知れないが、どうも僕には、この句の中に既にさういふ感じが含められてゐる様に思はれる。

光知 二つの不釣り合なもの照應とすることは出来ないでせうか、ドンキホテ式なロマンチックな味とリディキュラスな感じとの並立といふ風に。

義惠 私もさう見てゐます。

豊隆 前句にさういふものを感じますか。

義惠 ええ。前句でいふと暮春の情と旅情との中へ「風」を點じたのですから、たしかにその對照感が出てゐると思ひます。

豊隆 前句では「旅人の風かき行春」といふので、先づ特別な春が點出される。さうして、さういふ春が暮れて行く、といふ事が、次に描かれる。はじめの世界はインディゴデュアルな世界で、後の世界はアルゲマインな世界である。そのため連接の上に何となく唐突な感じが起る。春が暮れるといふ事には、特別な情趣がある。旅人が風をかきかき通つて行くといふ事にも、違つた味ではあるが、兎も角も味がある。然しこの句の中ではそれがダブルになつて動くのではなく、ばらばらに動いて、融け合つて第三の特別な味を出すといふ様には、うまくまとまらないと思ひます。

す。

次郎 それではリディキュラスな感じがないではないか。

豊隆 前句は、部分的に飄軽なものと飄軽でない哀愁的なものとがあるとは思ふが、リディキュラスなものがあるとは、僕は思はない。リディキュラスになるのは「はきも習はぬ」の句の「はきも習はぬ」ところあたりから出てくるものらしい。

次郎 だが君の説明ではリディキュラスなものにならないよ。

豊隆 さうかね。此句は素直な句ぢやないと思ふがね。表現された世界の纏りはともかく、季節の推移に關する或甘い哀愁といふ様なものを、風をかきかき通つて行く旅人の姿であらばさうとするといふ前句のイデーそのものが生み出す次の句は、結局さう素直なものではあり得ない道理ぢやないか。

次郎 君のいはんとすることはわかるが、どうしてもリディキュラスはちと言ひ過ぎだと思ふ。

義惠 ええ。見方は色々あるでせうが、附方はさうわるくない、相當なものだといへませう。

豊隆 まあ然し、斷定的な事は「はく」と「太刀」の用例がはつきりした上でないと、言ふわけには行かない。

次郎 義惠 さうですね。

二七八

次郎 だが、その二つの言葉をはつきりさせても、果してクラシカルな味がどの程度までよくなるかは問題ですね。

豊隆 「鞆」なるものの感じも分からないしね。臺の膚の與へる感じが「鞆」の與へる感じと似てゐるかどうかなんて事も。

次郎 だがそれは大して違つてゐるとは思はれないね。

豊隆 芭蕉はどういふギジョンを持つてこの句をつくつたかが知りたい。たとへば「鞆」でも、「鞆」をギジュアルにリアルに受とる事が出来ないからなんとも言へないけれども、ここでは此「鞆」が何だか特別な意味をもつてゐるのぢやないかとも思はれる。

次郎 感じからいふと、臺の皮膚からうけるものと大差はない筈だと思ふね。

豊隆 然し見方によつては、此句は「鞆」にエムファシスが置いてあるとも見られる。「田にしを喰て腥きくち」で「くち」にエムファシスが置いてあるやうに。

典嗣 君は貞丈の説明で満足出来ないのかね。

豊隆 説明より、眼で見たい氣がする。

次郎 何しろリディキュラスなものにしなければ承知出来ないのだからな。

〔孝雄〕 「ひきはだ」は革の名で、その革でつくつた鞆袋をいふことは貞丈の説でわかつてゐる筈だが、その引膚なるものがいつ頃からいつ頃まで行はれたかといふ事は容易にいはれないやうに思はれる。『武家名目抄』（塙保己一編）の按文に「且太刀にかぎらず打刀にもさや袋あれど撰塵装束抄に見えたる下鞆などにて近世引膚といふ物のことく唯さやの損せざらんが爲に假初に懸置にやありけん」といつてゐるので考へると、あまり古式なものではないやうに考へられる。しかし又『戴恩記』に細川幽齋の事をいつてゐる處に「太閤御所の御代にも御内衆の形義まで古法におきて給ふ。刀にさや袋のかけたる者をば御覽じ次第しからせ給ふ」とあるが、これについて山岡俊明は「又幽齋法印は家人鞆袋しかられ候よし。されば古風にあらで飾りにせし事にや」といつてゐる。とにかく、引膚の鞆袋では公家の姿は思ひ浮べられぬやうに考へられる。しかし又、芭蕉頃の武士が引膚をかけてゐたかどうか、これも疑問である。自分は芭蕉頃に引膚がやや古風のものと思はれてゐたためにこの句が出来てゐるものでないかと考へるが、もとより確證は未だ見ない。（追記）

二七九

はきも習はぬ太刀の鞘

月待て假の内裏の司召

傾翁

光知 テキストに就てですが、『婆心録』には「月またで」となつてゐます。然し是は勝手に直したのでせうね。

次郎 え、別に根據はないやうです。當人は原書の濁點を見誤つてさうなつたのだらうとわざわざいつてゐるけれど、是はあてにならない。

典嗣 それに「またで」と讀んだのなら特に濁點を打つたらうからね。

豊隆 曲齋は司召が八月十一日なる故に「月またでと作りたり」といつてゐるが、八月十一日といふのにも根據はなささうだ。わざわざ十一日に限つたわけがわからない。ここは「まちて」と讀むべきところでせうね。

光知 司召は八月にあります。京都の所司を任ずる儀式ださうです。それで此句の「月」は、七月八月の月でなく、名月の月だらうと思ひます。句意は、火事の後か何かでとのはぬ内裏で、月見の頃を待つて司召を行つた、といふのでせう。そこに「假の内裏」に整はぬわびしい感じがあり、又一方には月を見る風流な王朝的な感じが出てゐやしないかと思ひます。而してその點に前句と相通するところがあるのではないでせうか。——ここは月の座ですか。

豊隆 え。

次郎 司召は相當な儀式かね。

典嗣 重要な年中行事の一つだらう。

次郎 月のいい晩にでもやるといふやうな例はないのか。

典嗣 特にそんなことはあるまいが、夜するものださうだから。——僕は取込んでたごたした感じと、司召された人がそはそはしてゐる感じとが一緒になつてゐるやうに受取れる。

次郎 曲齋が八月十一日としたのは、月を待たないでするために、わざわざ設けたのではないかしら。

義惠 此句を曲齋はどうとつてゐますか。

次郎 「舊都より今の都へゆく様にて、自宅も未だ引移らざるうちに、此撰に會ひ侍るは君の御覺えよき有様也」としてゐます。

義惠 あゝさうですか。或る個人が召されてゆく有様にするのですね。

豊隆 一體司召はどんなものか。大勢やつてくるのか。

典嗣 その時にもよらうが相應ににぎやかなものらしい。

義惠 縣召は『枕草子』に描いてあります、非常な名文ですね。司召の方は二三見たけれど、悉しく描寫したものが見つかりませんでした。

次郎 『枕草子』の縣召は賑やかに書いてあるのでしたかね。

義惠 敘任の様子を書いたところよりも、任官を待つ家の騒ぎ、選に洩れてしよげてゐる有様を書いたところが鋭くて面白いのです。

光知 縣召は春ですね。

次郎 さうですか。ところで「月待て」はどうとりますか。月夜に司召をするのが面白いといふのではないかな。

義惠 『平家物語』や『太平記』にも除目の記事はありますが月の問題はどうもわかりませんね。

次郎 月がいいと御馳走をしたとでもいふやうなことはないのですか。

義惠 さあ、それはわからない。

次郎 「假の内裏」といふのは吉野の奥か何かの急造の小屋で、司召を月見をかねながらやつたとしたらどうだらう。

典嗣 僕もさうとつた。「假の内裏」は火事に焼けた跡のものではなく、新造の朝廷の意味にしたがね。前句とはせはしないところで附くのだらう。

義惠 吉野でもいいが、福原にしてもいいですね。

次郎 ええ。かういふ昔の儀式は半ば遊びだから、ここもそんなものぢやないかと思ふのだが。

光知 さうですね。呑氣でもあり寂しくもあるといふやうな気分かもしれないですね。

義惠 むしろ村岡さんのお説のやうにごたつてゐるのぢやないでせうか。

一同 さういふ気分はたしかにありますね。

豊隆 ごたつく方をベトーネンしようとするむしろ「月またで」の方がよささうにも思はれる。

——山田さんがゐないと困るな。

一同 さうだ。

義惠 「月待て」は一寸こしらへたやうなところを感じさせますね。

次郎 ええ。だが事によるとかういふ事がよくあつたのかもしれないね。

典嗣 さうだ。曲齋も探してみたのかもしれないよ。

次郎 僕は此句はわるくないと思ふ。「月待て」を遊びの意味にとつてだ。

典嗣 うん、さういふ例が存外あつたかもしれないね。

義惠 遊ぶべき時でもないのに遊んでゐたのかもしれないね。

次郎 「假の内裏」で宮人達はよろこんでゐたかもしれないね。

一同 それはちとおかしい。

次郎 子供などは焼出されて新しい家に這入ると喜ぶものだらう。その類ではないか。

典嗣 然し随分凝つて考へたものだね。

義惠 だが前句が凝つた句のやうにも考へられますね。

光知 前句との關係はどう見ますか。

豊隆 前句がはつきりしないので、僕にはよくわかりません。

光知 ええ、だが考へることは出来ますね。

次郎 さうだ。「假の内裏」にゐる人と「旅」にゐる人とで附けるさ。

〔典嗣〕 司召でなく縣召だが、福原除目のこと『源平盛衰記』にいづ。(追記)

〔孝雄〕 司召といふのは、委しくは京官(中央政府の官)除目といふので、外官(地方官)除目をば縣召といふのに對して、いふ名目である。この京官除目といふのは大臣以下の在京官(大臣は特に節會を設けて任命せられる。之を任大臣節會といふ)の任命を執行せられるのであるが、古くは二月三日以前に行はれたものであるけれど、後には三月となり、又かはつて秋から暮の間に行はれたものである。さうなつてから縣召が正月に行はれるのに對して、これを秋の除目といひて、縣召を春の除目といふ事になつたのである。そこでこの司召は秋の除目とはいふが、實例を見ても、公事の書を見ても、確定した月日はない筈である。曲齋か誰かが八月十一日であるといつたのは如何いふ典據があるか知らないが、直ぐに信用は出来ない。大體この頃には公事の事は『公事根源』を第一の據としてゐたやうであるが、それにも三月の條にこれを記して、「今は秋の除目ともいふめる、冬にもおよぶなり」といつてゐる。この除目は南北朝時代にはまだ行はれたやうであるが、後花園天皇以後は申絶したとある。その月日は實例を見ても月も日もまちまちで決して一定してはゐないのみならず、『拾芥抄』にはその京官除目を二月の末の「撰吉日事」

の條に收めてゐるのでも、古來臨時に日を選んだ事がわかる。さて又、これら任大臣節會はもとより、縣召でも司召でも必ず夜行はれたもので、その式後に宴會が行はれたのである。それであるから「月待て」といふことはその日をば月のよき頃にあたるやうに選んだといふ方の意味にもなり、又その月を待つ事がその除目の夜行はれるといふ事に關係してゐるから、「月まちて」であつて、「月またで」ではないといふ事が明かに斷言し得られると思ふ。(追記)

○

月待て假の内裏の司召

靱白 つくる 杣かはやわさ

水 碩

光知 これもわからない句です。靱白とは、靱磨白で、普通のやうに木をくり抜いて造る白ではなく、大抵は籠で、中に土を入れてつくるものです。杣はそんなものを本職にしてはゐますまい。ですから此句は、杣が仕事を變へて靱白をつくり出した、それがこれ段段慣れて來て上手に出来るやうになつた、といふ意味にしか僕にはわかりません。

次郎 靱白を竹でつくといふには何か典據がありますか。

豊隆 光知 大抵の本にはさう出てゐるのです。

光知 それで僕のやうに解釋すると、前句とは因果關係で附く。「はやわさ」は慣れない仕事に慣れて仕事の手際よく出来るやうになつたのです。

次郎 「靱白つくる」は。

光知 竹を編んで土を入れて靱白をつくる仕事でせう。どうでせう。

豊隆 僕もこれははつきりしないのです。然し木の靱白はないものかしら。さう空想して見ると、普通の白は大分つくるのに時間がかかるが、木の靱白はもつと簡単に出來て、盛に數多く造れる、さういふところを詠んだのではないかとも思はれる。然し是は全くの假説です。「はやわさ」といふのは見てゐるうちにどんどん出來てゆく様子を驚嘆して表現した言葉なんだらう。

次郎 早業だからね。

義惠 然しまだ間に合はせ仕事だとも解釋出來ますね。私はむしろその方で粗製濫造の意味にとりました。全體はごたつてゐる感じですよ。

典嗣 僕もさうとつたね。

豊隆 すると袖が、本職ではないが、頼まれて一寸やつたといふ事になるね。すると土居君の説と妥協が出来る。

次郎 だがそれだけではちともの足りないよ。

義惠 ですが假の内裏ではさういふことがありさうです。

光知 糺白をつくるのが内裏に必要でせうか。

義惠 軍記物などの世界にある假の内裏とすれば、山奥や片田舎にあるとみられるのです。たださういふ風に言つてゆくといつか因果關係に陥りますね。

豊隆 ええ。

次郎 曲齋は年貢を納めるものと見てゐるね。

光知 あれは極端な因果關係で附けるのですね。

豊隆 曲齋ははげしいからな。

次郎 結局袖が糺白を早業でつくつてゐるといふだけだね。さういふことはざらにあることかしら。

義惠 豊隆 ざらにあるかどうか分からないが、ただ本職ではありませんね。

次郎 ことによると自然に本業のやうに考へられてゐたかもしれないよ。けれどもはつきりわからないね。こればかりは山田さんでも一寸困るだらう。

豊隆 次の句は全く山家の出来事だね。

次郎 仕方がない、袖がせつせと糺白をつくつてゐるといふことにしておかう。

典嗣 「はやわさ」は熟練か、早いのか。

豊隆 それは早い方さ。

典嗣 ただ轉用の時は別の意味も出てくるからね。

次郎 ここは早い方だらうな。

典嗣 すると前句も早業と見られるか。

豊隆 月の頃に敏腕の大臣がさつさと任免を片づけて行くことにするか。

一同 (笑)

次郎 結局此句はわからない、わかつても面白くないやうだ。

豊隆 うん、さういふことにしておかう。

八 (一月二十三日)

靱白つくる柚かはやわさ

鞍置る三歳駒に秋の來て

水 翁

正雄 今日村岡君の當番ですが、卅年來の友人が訪ねて來たさうでまだ見えませんから、僕が代つて發聲を勤めることになりました。——此句は秋ですが、前句もその前句も秋だから、秋が是で三句になるわけです。——「三歳駒」といふのは青年になつた馬だらうね。

豊隆 馬の一歳は人間の四歳位に當るさうだ。卅幾歳といふ馬もあるらしいが、「三歳駒」はまあ青春期にある馬だらうな。

次郎 馬の一歳が人間の四歳に當れば、「三歳駒」は人間の十二歳頃ぢやないかね。それで青春期かね。

豊隆 さうはつきりと人間の何期といふ譯にも行くまいが、「三歳駒」になると齒も出揃ふらしいし、ほぼ人間の青春期に當ると見ても可いだらうぢやないか。——馬のことを詳しく調べてくれればよかつたな。

正雄 要するにアドレッサンス頃の馬を指すととりたいたね。「秋」と出したのも、馬が壯く勇ましいのと相應じて天高く晴朗な秋の一方面を取合はせたものだらう。それで此句はさまざまな連想を誘ふが、たとへば源氏とか平氏とかいふまだ天下を取る前の郷士の家の若い人人のところへ「三歳駒」が引かれて來たとしてもよし、又土佐とか南部とかいふ馬の産地の附近で、馬の生活と親しみのある百姓家の光景だとしてもいいと思ふ。僕には此句の味はそれ位のものだとしかたれないよ。

次郎 「鞍置る」の「鞍」は。

正雄 乗鞍にも荷鞍にもどつちにも解釋出來るだらう。僕が武家の家の様子としたのは乗鞍にとつたので、百姓家の光景としたのは荷鞍にとつたのだ。

次郎 うん、ここではどちらにもとれるね。「秋」は季節の秋か、それとも此「駒」に特別な意義をもたせるためのものか。

正雄 僕は勇むわか駒の背景として爽快な秋を考へるのだが。——「駒」はコウマだらうな。

「馬二歳を駒と曰ふ」さうだが、支那のクかんの音から出たのぢやあるまい。年若い小馬から轉じて、後に馬一般を意味するやうになつたのだらう。

次郎 ここは「三歳コマ」でコマだらうね。——僕は此句の「鞍」を荷鞍ととると「秋」も農家の忙がしい時を實際指すやうにした方がいいと思ふ。

豊隆 然し農家で主として馬を使ふのは關東のことで、關西殊に九州の方は主として牛を使ふ様だから、阿部のいふやうな説は必ずしも一般的ではないかも知れない。九州の僕の方の例をとると、秋が来て特に急がしくなるのは牛で、馬はそのすけをする、馬の急がしいのは米俵をステイシヨンに運ぶ——冬位のものだね。

次郎 米を運ぶのなら、牛の方が力が強いから牛を使ひさうなものだが、それは妙だね。

豊隆 米俵のときは大抵馬力で運ぶんだから。

次郎 土居君、土佐ではどつちを使ひますか。牛ですか。

光知 田畑を鋤いたりするには牛を使ひますが、收穫の時刈つた稻を運んだり、米俵を運んだりするには馬を多く用ゐるやうです。

正雄 一體馬の産地はどこが一番名高いかな。南部は有名だが外にはどこかな。

豊隆 信州とか常州とかも有名なんだらう。

次郎 それで話をさつきの話に戻すが、馬を使ふところでは、秋が忙がしいのだと思ふ。

豊隆 そりやさうだらう。

次郎 そこで僕は此「駒」が荷馬で、荷鞍をおいて、若過ぎるのをも秋になつて使はうとしてゐると解釋するのだ。勿論太田の言ふやうに「秋」の中には天高く氣晴れてあめうか自ら勇む氣持も出てはゐるけれどね。

豊隆 「秋」は問題になるね。

次郎 單に天高きの意にとると此「秋」が一寸ふやけやしないか。

光知 「三歳駒」といふ言葉は音調からいふと爽かな感じを與へますね。

次郎 ええ。——しかも人間にするとまだ小僧ですね。

豊隆 小僧ぢやなささうだ。

次郎 だつて君の言ふやうに、人間の二歳が馬の四歳に當れば、十二歳ぢやないか。——然しかういふことは馬の生活を知らないとしんみりした背景がわからないね。

豊隆 わからないのは「秋」だけでなく「鞍置る」もよくわからない。

次郎 うん、僕はそれを鞍の置初めとして、外の馬はみんな遊んでゐるのに、此馬だけは働らかなければならぬと取るのだ。

正雄 同情して馬を見てゐるのだね。

次郎 うん。——だが詳しいことは馬の生活がわからないからはずきりしたことが言へないけれど、さうぢやないかと思ふのだ。

光知 僕は赤城山や戸隠で夏を過したことがあります、夏の間山の牧場に遊ばして置いた馬を秋になると連れてゆきます。此句も今迄は牧場で遊んでゐたのに、「秋」になつたので働かなければならなくなつたといふやうな、境遇の變化をも暗示してはゐますまいか。

正雄 生活の變化に對する同情はあるかもしれないね。そしてその馬と交渉を保つ人間に就ても臆ろげに同じことが考へられるね。

豊隆 君等の言ふ様だと此「秋」は麥秋の秋と同じ様な意味になる譯だね。

次郎 うん、此「秋」は季を入れるために附けたやうで、一寸とつてつけたやうだが、實はもつと感の籠つた意味があるのだらうと思ふ。

豊隆 此句は駒迎（若くは駒牽）の駒の句ぢやないだらうかといふ氣もする。駒牽は秋だから、

此所の「秋」はそれを指してゐるのではないかと思ふ。駒牽には地方の牧場から、選み出した馬を曳いて、京都へ献上にゆく。此所はその駒牽の出發の準備が出来上がつて、いざ立たうといふ間際か何かではないのだらうか。

次郎 すると打越の句の世界と似てくるね。

豊隆 多少觀音開きになる傾向があるかも知れない。——駒牽用の馬を選むためには役人が牧場に出張して、それを二歳駒の中から選んで、選んだのはぺたぺた判を押すのださうだ。それがその年の秋連れて行かれるものか、それともその翌年の秋連れて行かれるものか、調べなかつたから分からないが、もしその翌年の秋の事だとすると、「三歳駒」といふのが利いて来る。すると「鞍置る」は丁度人間の羽織袴といふ様な、ちゃんとした身仕度が出来たといふ意味になりさうだ。

次郎 さういはれると去年の夏九州の島原で馬市を見た時仔馬が親馬と一緒にひきだされて、親についてぐるぐる廻るのを思ひ出すね。——味はひ方からいふと、太田の説と小宮の説では大分ちがつてくるね。

豊隆 ただ駒牽だとすると、多少前へ戻る氣味がある。まあ太田の百姓家の景だとする説に賛成

して置くかな。

次郎 岡崎君は。

義惠 私もさうです。

次郎 まあ是位にしておかう。——かういふ時に山田さんがゐられるといいのだが。

義惠 「鞍置く」といふ表現法は前から鞍を置いて待構へてゐるやうなところがありますね。

次郎 え、言葉の用法からいふとさうとれますね。然しさういふ意味でせうか。

豊隆 さうだ、岡崎君のいふやうに此表現には「秋」の來るのを待構へてゐたやうなところがある。

正雄 始めて鞍を置くやうになつたと解釋出來ないかね。それから僕のは源氏の御曹子といふ聯想が出たのだ。鞍なども新しく、晴やかに、美美しく。

次郎 うん、さうもとれるよ。——小宮や岡崎君のいふやうに待つてゐましたととるのは、言葉の方からは差支ないだらうけれど、全體の意味からはどうかね。

正雄 うん。——何しろ此「三歳駒」には特殊な意味が含まれてゐるのだらうから、それがわからないと、一寸何ともいへないね。

次郎 さうだ、馬を識つてゐる人には大いに意味がこもつてゐるのだらうね。

正雄 「三歳駒」といふ言葉は何か軍記物などに出て來やしないか。

豊隆 うん、あるかもしれない。山田さんにでも訊ねたらいくらも例があるかも知れない。『古事類苑』には何かありませんでしたか。

義惠 別に何歳駒がどうだといふやうなことは書いてありませんでしたと思ひます。

豊隆 『古今要覽稿』で馬の事を讀んだ様な氣がするが、見てくればよかつた。

正雄 かういふ時此所は不便だね。僕は火事で焼いたから、ゆうべ仙臺中の古本屋を漁つたが、馬學の本は一冊もなかつたからな。

次郎 さうだね。仕方がない、結局あとで書入れることにしやう。特に山田さんにお願ひしたいね。

〔義惠〕 『古事類苑』を精細に見ると、矢張り参考になる様な記事が無いでもない。〔牛馬定目留書〕寛政十一己未歲十一月、上杉様衆より牧馬取扱方問合、箇條書江依御沙汰御答書附札書上帳といふ條に見える次の項などは其著しいものである。

一、貳歲之夏、是も牧江放置候哉、母馬江は出生々何月位附置候事ニ候哉

附札

貳歳之夏共ニ牧江放置候、母馬江者貳歳之土用後迄付置、秋ニ至、野取之貳歳牽放候

一、乘馬仕候事は、心懸各別之事ニも有之哉、一才末秋ハ既ニ繫置候、三歳ハ乘立可申と存候
附札 乘馬ニ仕候は、貳歳之節、摠馬之内撰候而用候迄、當才ニ才迄、別段之仕込と申も無之、合同

ニ致置候、貳歳末秋ハ、厩江繫置、三才ハ乗り立候（追記）

〔孝雄〕 三歳駒といつたのは譯のある事であらう。獸醫學士加藤雄千代氏の『新撰馬學』によると、「馬の年齢は其の價値に大なる關係を有する」ことをいつてゐ、又「馬は人に於ける如く乳齒と壯齒の二種を有す」といひ、「馬の乳齒は其の年齢の第三年より第五年の間に於て壯齒と交換せらる。即ち五年迄は之を幼馬と稱し、五年以上之を壯馬と云ふ」といつてゐる。それで三歳を駒といふ理由もわかるやうに思ふ。しかし身長は頂點に達するものと見えて、元和八年の『相馬書』といふものによると、「駒一期の尺とは丈けを知る事也」といひ、「此規矩は三歳の時にとりて見る也」といつてゐる。さうして三歳になれば、もはや役に立つものとも見え、又教育の仕時と見えて、これを市場に出した事はいろいろのものに見えてゐる。『武藏國名所圖會』に藪の内といふ所の條に「毎年十二月中ばの頃南部駒三才立なるをここに出して賣買す」といひ、『塵塚談』に淺草觀音境内にあつた藪の馬場といふ所について「昔より毎冬南部より御用御買上馬乘立所に

して馬員數不定百疋百十疋も牽來る。皆ニ才三才の駒也」といつてゐる。又『明治十七年畜産諮問會記事』に木曾半夏馬市について述べてある中に「此所より産出する馬の壯三才に至れば、年半年夏に及て山村氏の廳下に牽來るを例とす」といつてゐるし、又『岩手縣産馬誌』に引いてある南部馬に關する舊記といふものの中にも「右之通被ニ仰出候に付盛岡市中馬喰共三歳駒四五月より銘銘持馬乘馬仕込例年八月二十二日より櫻馬場に於いて……」といつてゐる。先づ、右の例どもで大體三歳になると牧場から市場に出したものと見える。そこで三歳駒を牽出すことはいつ頃からある事かと考へるに、『曾丹集』に「八月中」の歌に「みとせ生の駒を手毎になつてつ引きくる秋のけさのせき風」といふのが見える。このせき風は逢阪の關の風でこの歌は駒迎の歌であることは疑はれない。そこで、三歳になると牧場から牽出して朝廷に獻り、市場にも出した事は平安朝時代にも既にあつた事と考へられる。それではこれが駒迎の事かと見るに、さうすれば打越と觀音開になる。さやうな事を芭蕉が通しさうに考へられぬから、これは駒迎ではあるまいと考へる。ここに鞍置るとあるのは、乘馬仕込の爲と考へられるから、矢張江戸表なり、又城下なりの馬市に出て乘馬に賣らうとする爲の用意であるまいかと考へられる。（附記）

鞍置る三歳駒に秋の來て
名はさまく〜に降替る雨

碩翁

○
正雄 此句は句振りはなかなかいいが、さして蘊蓄が深いとも考へられない。要するに前句から連想して、既なり市場なりに秋の雨が降るといふのに過ぎない。「名はさまく〜に降替る」で、秋雨、時雨その他何々とさまざまに名の違ふにつけて、とりどりの風情がある、それ丈のことを歌つたのだと思ふ。またこの句は前句をさして助けてもゐない。
次郎 句解はそれでいい。然し前句をそんなに悪く承けてもゐないと思ふ。雨の生活を描いたところなかなかいいよ。
正雄 うん、「雨の生活」といふ名文句の御蔭で原句が見直されるね。
次郎 僕はむしろ此うけ方は面白いと思ふ。

正雄 まあ、負けて置いてもいいな。
光知 此句は季がないのですか。
豊隆 ええ、雑です。秋が三句つづいたから、ここは雑でいいのです。
光知 すると、此句では雨のさまざまな變化が考へられて、特殊な雨はとり出されてゐないのですね。
次郎 ええ、僕もさうだと思ふ。
豊隆 いや、作者は一つの特特殊な雨に對してゐるのだ。さうした方がいいと思ふ。
次郎 といふと、一つの特特殊な雨に對して、雨の全體を考へてゐるといふのだね。成程その方がいいやうだ。
豊隆 うん、しかもその考へは何となく寂しいしづかな感じの方へ落ちてゆくのだ。
次郎 しづかな、しめやかな感じは確かにあるね。
豊隆 それは無常といふ様なものを感じるところまで行く心持だ。
次郎 無常といふより、ただコンテムプラチヴな心持ではないか。
豊隆 僕は何かかう作者から訴へられてゐるやうな感じを受ける。

次郎 何を訴へられるのだ。——僕はそれ程飛び出したセンチメントは感じないね。

豊隆 作者の感じは勿論そんなに飛び出してはゐない。然し——さうだな、何と云つていいかな此感じは。

正雄 此「名」は五月雨とか時雨とか既に成語になつた雨の名に取らなくても、偶然な、「草に降る雨」「鬱陶しい雨」といつたやうにこの場限りの名だと考へてもいいと思ふね。

次郎 太田のいふのは、季節中の一つ丈けの名前を取らさうといふのだね。

正雄 うん。雨の總論でなく、或る特殊な雨と見たいね。

次郎 さうかね。僕は春雨とか五月雨とか時雨とか一般の名前でいいのだ。さういふ一般の名前にも日本文學の傳統からはいろいろな趣が十分にこめられてゐるからね。太田のやうにとらうとするのは此句面からだけで味はふと少し無理だよ。

正雄 無理かも知れないが、人人の好みだね。

次郎 太田のやうにとらないでも面白味は出るよ。例へば冬の時雨に對して、春雨の趣を心に思ひおこして、味はつてもいいのだからね。——小宮は訴へられるのだよ。

一同 (笑)

豊隆 君にはさういふものが感じられないかね。僕には此句には人に訴へてゐる様な、若くは人を口説いてゐる様な、妙にひたひたと寄り添ふ様な感じがある様に思ふ。

次郎 古今集に「袖浸ちて結びし水の凍れるを春立つ今日の風や解くらん」といふ歌があるね。あの歌も、夏と冬と春の水を一首の中に歌つてあるだらう、さういふ風に一年中の雨を歌つたとしてもいいさ。

正雄 文學にさう云ふ一方面もある。クラシックといふのだらうね。

豊隆 此句を人に訴へて來るものがあると感じると同じ様に、前句にも人に訴へて來る様な趣が感じられる。前句にも特別な哀れがある。

次郎 そりや哀れはあるよ。然し訴へるのは、三歳駒か、作者か、どつちだ。

豊隆 さういふ風な言葉に直ほすと、僕の言つてゐる感じとは、もう違つたものになる。

次郎 でも、かりに畫家が林檎を描いて、そこに哀れを出すとなれば、作者の哀れは勿論出てゐるが、それは林檎の中に出てゐるので林檎が訴へてゐるのではなからう。——小宮は一體訴へられる事が好きなのだ。

豊隆 話をパーソナルにしちやあいけないよ。

次郎 土居君は太田の嫌ひなアルゲマインな雨に對するのですか。

光知 え、アルゲマインで、時雨か何かを見てゐるのが中心になつてゐるのです。

正雄 うん、そんならしい。

豊隆 それでいいな。

光知 小宮さんのは *Il pleure dans mon cœur / Comme il pleut sur la ville. / Quelle est cette langueur / Qui pénètre mon cœur?* といふやうな調子で訴へられると云はれるのですか。

次郎 もろともに影をならぶる人もあれやの調子で訴へるのか。

豊隆 さうだな。特定の雨に對して、その雨の特定な感じをうけとりながら、コンテムプラチヴな氣持で、一年中の様様な名のついた雨を見渡した時、何とも言へない寂しさに撃たれる。その寂しさが此句にいかにも寂しさうに出てゐる所が、何となく訴へられて感じる、といふのだ。

光知 そんならいいですね。

正雄 なぜ訴へられるのだ。

豊隆 無常を感じて寂しくなるからさ。

正雄 雨を人に見立てて見ると無常の趣があるね。小野の小町もあれば卒都婆小町もある。通小町もあれば横町の小町もある。有爲轉變、その時その時に名がかはる。

次郎 「折ふしの移りかはるこそ」だ。——ただ無常を訴へるといふ言葉が呑み込めないな。

義惠 自身に訴へてゐるならいいでせう。

豊隆 相手に直接に言はなくても、又誰といふ具體の相手を目標にしなくても、訴へるといふ事はあり得る。

次郎 それはアインフルンクだ。それを訴へるといふかな。

豊隆 何も特別に飛び出して來るものがなくても、訴へられて感じる事はいくらもあるよ。

次郎 要するに訴へるといふ言葉を取消せばいいのだ。

豊隆 取消す必要もなさうだ。蟲の鳴聲を人間が聽いて、訴へられて感じるのだつて、おんなじ様なものだ。

次郎 ぢやアッピールといふ英語を使へばいいぢやないか。だがそれを訴へると譯すのはここでは當らない。それに蟲の聲には「訴へる」といふ感情移入を誘ふものがあるが、この句にはそれがない。それはあはれとしてアッピールするだけだ。

正雄 デネラシオンの變るさみしさだらう。君はそれを餘計に感じるのぢやないか。——すると前句に、わかい馬をいまいましてさうに目詰める年寄つた人が髣髴として出てくるな。

次郎 小宮の訴へるといふのには求める意味が這入つてゐるか。

豊隆 狭義の求める意味は這入つてゐない。然し突き詰めると、自分と同じやうに人も感じて呉れるに違ひないといふ豫想は這入つてゐる。

次郎 岡崎君のは。

義惠 感慨を催すといふ程度のもです。

豊隆 僕のも感慨でいいのです。ただ感慨の色が濃くなると、訴へる感じが出て來るのです。

次郎 さうか。求めるといふ意味がはひつて來なければ別に異存がない。パーソナルなことはこの位におかうね。

○

名はさま〜に降替る雨

傾

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮

水

豊隆 「入込」は、君、イリゴミと讀むのか。

正雄 さうだらうと思ふ。

次郎 義惠 私等はさう讀んでゐました。

豊隆 イレゴミぢやないか。

正雄 僕の方はみなイリゴミといふのだが。

豊隆 さうか。

義惠 芝居でもありますね。

正雄 「諏訪の涌湯」はどんなところかな、鄙びたところかしら。

次郎 上諏訪なら可也繁華なところだよ、尤も繁華といつたつて信州の男が大勢這入りしてくるのだからね。

正雄 さうか。此句は、夕飯前に人人ががやがや言ひながら温泉で雑沓してゐる、外には雨がしとしと降つていかにもわびしい、その寫實に過ぎまいと思ふ。

次郎 君は湯の中に雨らしいものを感じるか。

正雄 どうも大雨ぢや困るが。それに夕間暮は逢魔が時で、人がごたごたしてゐても、妙に寂しいものだ。

次郎 「入込」には人がこんでゐるのだね。

正雄 さうだ。一部にはさう云ふ人生があるが、天地の夕方はそれを薄くらい空氣の底へ押し付けてしまつて、遠くから見ると、ただぼんやりとした明るさがある丈なのだ。

豊隆 これは野天の湯ぢやないかね。

正雄 野天でも屋根があつてもいいよ。ごたごたした人生を思はせるものがあればいいのだ。

次郎 ただ諏訪の湯は野天とは一寸考へられないよ。一體寒い國だらう、別府のやうな海岸とはわけが違ふからね。——夕暮の空をあいだ欄間から見えてゐるところかな。

豊隆 湯に這入つてゐる奴がかう考へてゐるのは困るよ。

次郎 だがごたごたしたものの中に這入つてゐながら、心でそれを離れてみることは出来るからね。

正雄 だけど同時に地平線も見えるやうな遠景にしたいよ。

次郎 地理的に遠景にすると、この句を景色に描いて見るのがむづかしい。遠景なら野天にせねばいけない。

正雄 何、強ひて西洋風の遠近法を用ゐなくても可い。平安朝の繪卷物の屋根のない欄間から青壘を見る透視法もある。

豊隆 修善寺の河原の湯は、今でもこんな景色でやつてゐる。

次郎 「諏訪の涌湯の夕ま暮」と一氣に押して行つてゐるので「夕ま暮」が感じの上で重きをなしてゐる。夕暮の山氣が雜沓したものを包んでしまつてゐる。

正雄 それで「入込」が極一部分に限局せられてしまふ。

次郎 句としてもそんなにまづくないと思ふよ。

豊隆 うん。——諏訪は平地だつたかな。

光知 後ろには山がありますが、想つたよりはうち開けてゐて湖水につらなつてゐる所です。

次郎 ええ。下諏訪なら後ろですね、上諏訪ならまはりが一面に丘です。兎に角夕暮は寂しいところだよ。だが山の上と思つて豫想して行くと案外開けた感じなのに驚くね。

正雄 此句に就ては問題はあまりあるまい。

〔豊隆〕 岩波に訊いて見ると、諏訪にはつひ近比まで野天の湯が幾所か残つてゐて、農夫が野ら仕事をすますと、多勢一緒にどぶどぶと其所に浸かつてから、それぞれうちに歸つて行つたものださうである。もつともつひ近比までさういふものがあつたからと言つて、元祿時代の「諏訪の涌湯」を必ず野天にしてはなければならぬ理窟もないけれども、此所の「夕ま暮」を最も有効に働かせる爲には、此「諏訪の涌湯」はどうも野天（若くは野天同様のもの）であるとした方が可い様に思はれる。「入込」でざわついてゐる「諏訪の涌湯」のざわめきなんかには少しもお構なしに、大きな周囲の自然は、徐ろに音もなく暮れて行くのである。（追記）

○
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮
中にもせいの高き山伏

水 翁

正雄 此句は前句のごたごたした生活の中から特殊な山伏といふ人間を掴み出して来て、それを

具體的にすると同時に前句を幾分滑稽且つグロテスクな味へと導いたのだと思ふ。此丈の高い山伏がのさばりながらあたりを睥睨するところがはつきりと感じられる。

次郎 岩波みたいな奴だな。

一同 （笑）

正雄 『松の葉』には「山伏姿に様をかへ」などといふ文句もあるから、いきな山伏もあつたかも知れないが、ここは「無性ぶじやうほう髭無人相」の大山伏だらう。——修験者を信濃に結びつけたのは、どこか彼等の根據地があつた邊にあるかね。

豊隆 戸隠がさうぢやないか。

次郎 諏訪は古い社だから此處にもお参りに大勢寄つたかも知れない。——それにしても此二つを結びつけたところに或る軽い味は出てゐると思ふ。

正雄 うん、それに、ここでは山伏にエトランジェーといふ性質も感じられるよ。

次郎 曲齋は『三冊子』の著者が此句を評して「前句にはまり其中の事を目に立て、言ひし句」と云つたのを「一斑也、……直指門人にもかゝる浮説あり」と嘲つてゐるが、ここはやはり太田のやうに、従つて『三冊子』のやうにとるべきだ。

豊隆 さうだ。

正雄 たださう味の深い句ではないね。

次郎 うん、うけ方は浅い。

正雄 此句などはわれわれの手腕のもので、必ずしも芭蕉を待たないね。

豊隆 さうは行かないよ。「中にもせいの高き山伏」など我我の力ぢやなかなか見つけ出せるものぢやない。——それに、君も言つたが、ここで世界がぐいと變つてくる。

正雄 山伏は僕等の子供の時分にもよく見うけたものだ。まして此頃は珍らしいものぢやなかつたらうから、この光景を詠み出すなど何でもなかつたらうぢやないか。

次郎 コロンブスの卵みたいなのだらう。出されたものを見ると何でもないので、いざやつてみようとするとなかなか出来ないのかもしれない。

正雄 コロンブスの卵とは非常な讃辭だね。——僕が一つ感心してゐるのは、「せいの高き」といふ割合に單純な特性だけを擱へて來て、この山伏を生かしてゐることだ。

次郎 うん、それとともに周圍にゐる澤山の人間を描いてゐる。

豊隆 此句には『炭俵』あたりの味があるやうだ。一體此卷には『冬の日』、『猿蓑』、『炭俵』な

ど、いろんな味のものが輻湊してゐる様なところがある。岡崎君、さうは思ひませんか。

義惠 さうですね、さういつてもいいでせう。

次郎 これからさういふところを小宮に注意してやつてもらいたいね。

正雄 僕にはしやれた地口行燈にしか取れないね。地口行燈でも初代廣重なら今では立派に表装されるといふものだ。阿部君の讃辭もそのたぐひではないか。

豊隆 太田は實は感心してゐるのぢやないか。

正雄 自分にもはつきりわからないのだよ。

次郎 その次には皮肉が出るのだらう。

正雄 だがかういふ句は句會の席ではやんやといはせるものだらうね。

次郎 それはうけ方がいいからだらう。

豊隆 能の『道成寺』で亂拍子を小鼓と懸け合ひで踏む、あの時雙方の呼吸が旨く合はないと、

亂拍子は決して踏めないのださうだ。さういふ氣合が此句にもあるよ。

正雄 しつくり合ふことは必ずしも内容の價値に關係しない。加賀太夫と宮古太夫とはしつくり合ふが、辻のでろれん左衛門とその女房の三味線とも時としてはしつくり合ふ。

豊隆 無論さうだよ。然し呼吸が合はなければ、かういふ種類の藝術は、藝術として成立たない。正雄 何か山伏の文學上の位置を調べたものはないかね。佛教の上のものでなく世相に現はれた山伏だね、面白い問題だと思ふ。佛蘭西の十八世紀末の戯曲に『山^レ伏^{マボク}（一名日本僧侶）』といふ

のがある。昔はよほど目立つた生活だつたらうと思はれるね。

豊隆 ケンペルあたりから傳はつたものかな。

正雄 ジェスイトの坊さんなんぞが傳へたのだらうね。

次郎 山伏の本場は羽黒山かしら。

正雄 吉野の方ぢやないか。

豊隆 あそこは山伏が修業をする所ぢやないかな。それに根據地も一つだけでなく方方あるんぢやないかな、彦山だの大山だの。——此句は「諏訪の涌湯」と「山伏」とのとり合せが面白い。

○

中にもせいの高き山伏

翁

いふ事を唯一方え落しけり

碩

正雄 此句は、人のいふ事をきかず、我を張つて自分に都合のいいやうに言ひぬける。山伏みた

いな男の性格を説明したのだと思ふ。

次郎 人に對して争ふ意味を入れる必要はあるかしら。

正雄 ディスキュッションと解するのが一番よくないか。他宗の事は聴かず、自分の宗旨だけを

説教する。

次郎 説教とする必要はあるまい。

正雄 むかうのいふことを「唯一方え落しけり」の意味だらうな。

次郎 君のいふのはさういふ意味なのか。ぢやディスキュッションでなくてもいいわけだね。

豊隆 ディスキュッションはその一例なのだらう。

正雄 然し相對する人を假定することが出来るからディスキュッションといつてもいいだらう。

次郎 此句は太田のやうな場合だけでなく、人のいふ事を何でもみんな自説に賛成してゐるもの

豊隆 事實は、ひとりで落ちてゆくのだともとれる。

次郎 すると我を張るのが落ちるよ。

豊隆 必ずしも我を張るとしなくても可いだらう、エゴツェントリッシュなら。

正雄 山伏から出た聯想で、世俗的の宗教家を考へるやうな傾向になる。

次郎 そんなに宗教家に牽制されなくてもいいよ。——「いふ事」は別に人がいふ事と限る必要はないね。

豊隆 「落しけり」は自分のいふ事を凡て一つのものへコンセントレイトさせることともとれるね。

次郎 うん、そつちへ引張つてゆくのだ。

豊隆 他人のいふ事を自分の勝手な方へ引張つてくるともとれる。

次郎 他人のいふことだけでなくてもいいよ。

豊隆 もつとも僕は一人きりでなく相手が這入つてゐるものとしたい。

次郎 此句の面白いのは、別に人と向き合つてゐる景色を描いたのではない、或一種の性格をユ—モラスに見たところにあるのだ。

豊隆 然しさういふ性格がはつきりしてくるのは對人關係の時だらう。

次郎 さうしてもいい。僕の意味にそれはみんなこもるからな。——土居君は。

光知 格別説もありますが、何でもかんでも話をみんな「一方え落す」のだと思ひます。

正雄 この句はどこが面白いのか。メンシエンケンネルのあり觸れた一觀察だけのことだ。

次郎 僕もそれだけだと思ふ。前句の山伏から出たのだらう。

豊隆 然も少少その山伏に引張られ過ぎてゐる。

次郎 此句を珍碩が附けた時、一座の人人はさぞ笑つたらうね。

正雄 作つた當時のことを思ふと面白いね。

次郎 これは人間識りが氣輕に話してゐるところだ。而して此句から次の句を引張つてくるのもメンシエンケンナーだな。

豊隆 岡崎君、何か説はありませんか。

義惠 別にありません。

正雄 あまり明白だからね。東京から千葉へ行くやうな道だ。

豊隆 どうも今日のところはどんどん進行しすぎるな。

正雄 今日のところは別に文學的な問題はないよ。まあ南方熊楠・大谷光瑞・幸田露伴・柳田國男などといふ人に出て貰ふとまだ面白いことが澤山隠れてゐるだらう。

○

いふ事を唯一方え落しけり
ほそき筋より戀つものりつゝ

水 碩

正雄 「細き筋」といふ言葉がいいので、いろいろ探してみたが、わからなかつた。

豊隆 當時の俗謡か何かでありさうな言葉だ。芭蕉の書いた『曠野』の序にもありやしなかつたかな。——いや『許六離別詞』だつたか。「その細き一筋をたどりうしなふ事なかれ」といふのがある。もつとも是は元祿六年の事だから、此『ひさご』時代よりはすつと後になる。

正雄 どういふ意味かね。「細き筋」といふのは。ただかりそめの事からといふ意味かね。それとも女心のかよはいといふやうな感じから來たのかね。

次郎 さあ。

豊隆 さうではなく、糸すちのやうなあるかなきかの脈絡をいふのぢやないか。

正雄 はじめは形も確かでなかつたのが段段と太つてくるのだね。

豊隆 さうだらう。『曠野』の序に「いといふのいとかすかなる心のはしの有かなきかにたどりて」といふ所がありましたね。

義恵 あれは問題になるところでせう。

〔典詞來る〕

豊隆 ここはひとつ村岡に頼まう。

典嗣 いや今日は思ひきつて全部やつて貰はう、此次のところを僕が引きうける。

正雄 さうか。——此句は、字の解釋にはわからないところもあるが、ビルドリッヒにはわかるよ。あるかなきかの細き思を自分でも知らずにゐたが、はつと氣がつくと人を慕ふ心になつてゐたといふので、いひまはしも音調も非常にいい。前句の一般的な心理から調子をこまかくしたところなどはなかなかの秀逸だと思ふ。殊に「つものりつゝ」と現在分詞で止めたところは泉の水などのやうに後から後からと續ける感じを與へていい。

次郎 此調子の揚げ方は清元だね。

豊隆 「いふ事を……」から「細き筋より……」へ繋がる曲折の工合からいふと、寧ろ新内ぢやないか。

次郎 新内にして貰つては困るよ。

豊隆 いや移り工合をいつてゐるのだ。

正雄 また懸け合ひかな。

次郎 小宮、此句は何集の俳を示してゐるのか。

豊隆 是はまあ『猿蓑』だらうね。

義惠 もう少し前の『春の日』『曠野』ではないでせうか。

豊隆 さう言つた方が可いかも知れませんが。

典嗣 「細き筋」といふのはどういふ意味なのだね。

義惠 ぼんやりしてゐるところが面白いのでせう。

正雄 プログラム・ムジイクぢやない、メロディイを主としたものだね。

次郎 句意は、あるかなきかの思を述べて眼が醒めてみると人を思つてゐる、といふのだね。――

――それで前句との懸り合ひの仕方は。

正雄 前句のバスのメロディイを、ここはソプラノで繰り返したのに過ぎまい。

豊隆 メロディイは違ふだらう。

正雄 さう、然しモチーフは同じだらう。

次郎 了簡の狭さか。

正雄 同じ求心點に向ふベルスベクテイヴだね。

次郎 小宮のいふメロディイが違ふといふのは。

豊隆 前句の言葉のもつ感じと、此句の言葉のもつ感じとは随分違ふよ、それを言ふのだ。

次郎 太田はそれをバスとソプラノで説明するのだ。

正雄 むくつけきフィロゾフィがあえかなロマンスに變つたのだね。

豊隆 それでモチーフは同じだが、メロディイは變るといふのだね。そんならわかる。――是は、

一方は「落」すのだし、一方は「つ」のる」のだから、上つたり下つたりだな。

一同 (笑)

典嗣 「細き筋」といふのは何かにないか、一寸思ひ出せないが。

豊隆 俊成や定家などの幽玄體の歌人の歌論にはありませんか。

義惠 無いやうに思ひます。「細き」といふ言葉だけなら、何か俊成の歌合の判詞に一つ二つあつたかと思ひます。「源氏物語」の註釋に『細流抄』といふのがありますね。あれも「細き」に何か關係があるかと思ひますが。

豊隆 さうでせうね。——此メロディは美しいね。

正雄 うん、音の配合も美しい。

典嗣 かういふ類のメロディは澤山あるか。

豊隆 「見て通る紀三井は花の咲かゝり 芭蕉」などは一寸是に似てゐるよ。

正雄 その方がずつと調子が高く、そして響が金屬的だね。然し見たまへ、兩方共イ音が多いだらう。

典嗣 内容はわからないが、さういふわけのわからないところに面白味があるといふやうなものもあるかね。

次郎 可もあるよ。今一一覚えてゐないけれど。

正雄 此の方はサシスセソの音が目立つね。

次郎 うん。——僕は此句は嫌ひぢやないが、あまり賞美もしない。といふのは甘いのだ。

豊隆 ここは甘くていい、或は甘いから可い。前句のメロディへ此メロディを附けたのが面白いよ。

正雄 素直だな。阿部さんは甘いのが好きだらうに。

次郎 嫌ひぢやないよ、一寸『食後の唄』といふところがある。

豊隆 是は土居君の母音子音説の詩形論で何とか説明がつきませんか。

光知 (笑)

義惠 此句は私もそれ程好きません。「古今集」の和歌位のところです。

正雄 いろいろなものに同情してやるのもいいでせう。

義惠 それに雅を装つた俗といふところもあります。町娘が婚禮の衣裳をつけたやうなところがあります。

正雄 でもどこでことはしてゐませんな。

豊隆 世話な所はある。——村岡、何か説はないか。

典嗣 別にない。

九 (二月十九日)

ほそき筋より戀つものりつ、
物おもふ身にも喰へとせつかれて
翁 水

典嗣 此句意は明瞭だと思ひます。戀の句で、物思ひに沈んで食物も旨くないのに、はたから、それでは身體にさはるからなどと言つてしきりに物喰へとせつかれる。その親切がかへつて心なく思はれるといふので、かかる想は物語などにも多くあるかと思ひます。現に『源氏物語』の總角の巻にも病める大姫君について此句のやうな趣が描かれてゐたと思ふ。ところで俳諧としての面白味は、さういふいはば古典的な趣向へ「もの喰くと」「せつかれて」等の世話の言葉を附けたところにあるのだと思ひます。全體としては、アリレイションがたくみに効果を擧げて、美しい句になつてゐるといつていい。——やるせない戀の情がひたひたと迫つてくるといふやうな女主人公の状態を描いた前句とは、兩方の餘韻で附いてゐる、ととりたいたい。それをにほひ或はひび

きの附といひうるのなら、さう呼んでもよい。ただその附き方は、前句に何かいはうとするイデーが獨立して存し、後句にも又いはうとするイデーが獨立して存し、兩者がそのイデーに於て互にひびき合ふといふのではなく、兩句それぞれに句全體のうちからひびき出る餘韻が交響するのだと思ふ。殊に「せつかれて」といふやうな表現法は、頗る餘韻的效果を豫想してゐると思ひます。——最後に此句に全體として評點を下すと、さすがに上手といへると思ひます。

次郎 村岡のいふアリレイションはどういふ風にいいのか。

典嗣 調子がいいといふ意味でだね。

次郎 アリレイションといつても、同じ言葉を繰り返したからいいと解するだけでは困る。此調子からいつてもその繰り返しに何か特別な企てがなくては困りやしないか。

典嗣 ここは調子がいいといふ外に説明しやうがないね。何故いいかといはれると一寸困る。
次郎 僕のいふのは、調子以外に何かありさうだ、それを明らかにしたいといふのだ。——山田さん、かういふ風に「物」といふ言葉を用ゐるのを文法ではどういふ名で呼びますか。「不定……」とでもいふのでせうか。

孝雄 それはつけようと思へば何とかつけられませうが、私は別に名をつけません。「物」は一

般にひろく事物を指す類の言葉です。

豊隆 かういふ風に「物」が重なつて、アリレイションみたいなものになると、内容全體が軽く感じられるとは思はないか。

次郎 取り様では洒落にひびくといふんだね。

豊隆 うん。言ふことが軽くなる。

孝雄 浮つ調子になりやすいことは事實ですな。

次郎 洒落ととれば、芭蕉はさういふ意味で此句をつくつたのだらうか、それが問題になるね。

豊隆 一體に僕は此句にクラシカルな味よりは世話の味の方を餘計に認める。「せつかれて」といふ言葉なども特にその感じを深くするもの様に思はれる。

典嗣 だがさういふクラシカルなものを世話にするのが誹諧ではないか。

次郎 うん。併しここで小宮のやうに軽くとるだけでいいかどうかは確かに問題だ。

豊隆 僕の言ひたい點は、此句のイデーは言はば、せつばつまつた、せつない心持の表現といふ事にある、然るにその表現はさういふ心持を寧ろ軽くする傾向を持つてゐる。そこに一種の矛盾がある。僕にはこの句はそんなに可い句だとは思へない。

次郎 僕は此句を助けたい。だから君のやうに軽くとらないで、外の解釋法をとらうと思ふ。

豊隆 助けたいのは山山だが、うまく助かるかな。僕はこの句のイデーだけに賛成なのだ。

次郎 「物」を二つ重ねたのでうるさいとは思はないか。

豊隆 うるさいとはどうも感じられない様だ。——もつともこの「物」が重なるといふ事を、それ程氣にかけないで、すうつと読み下すと、さつき言つたアリレイションから來る軽い感じは別に際立つて感じないで済むやうにも思はれる。助けるとすれば、寧ろさういふ點で助けたい。

次郎 いや、もつと積極的に助けたいよ。この「物」は作者が考へずに重ねたのではあるまいと思ふ。

典嗣 僕のいふやうなアリレイション以外の意味にか。單に調子のいいといふねらひ所の外に技巧があるといふのだね。

次郎 さうだ。君の所謂アリレイション以上のものを認めるね。

典嗣 さうかね。僕には認められないな。——小宮君に訊くが、表現の世話的な味は誹諧の通有性なのではないか。この句にはさういふ世話なところもあるが、主なのはもつと古典的な味はひではないか。どうだらう。

豊隆 さあ、僕には此句に古典的な味はそんなに感じられないんだがね。何しろ結びが「せつかれて」なんだからな。例へばもつと先きの方の「雁ゆくかたや白子若松」などと比べて、此句の味は大分違ふぢやないか。

次郎 だが村岡のいふやうにクラシックの世界を世話に砕いたと見てやつてはいけないか。

孝雄 然し「物おもふ身」にクラシック特有な何かがありませうか。

次郎 歌のやうな味がある、そこでクラシック風だといつてもいいと思ひます。

孝雄 然しそれは精精「物おもふ身」までで、その下は大分感じが違ふでせう。

典嗣 僕は總角の巻の丁度かういふ感じのする場面があるのを聯想したので、すつかりそつちの方へひつばつて味はつたかもしれない。しかし「物おもふ身に」といふ初頭の言ひ出しはどうしてもクラシカルだと思ふ。

次郎 僕は此句自身の姿に可也前句に似たクラシックの味があると思ふ。

孝雄 豊隆 もつと碎けてゐますよ。

次郎 岡崎君はどうです。

義惠 (笑)

次郎 小牧は。

健夫 僕もアリレイションで調子がいいといふ様な感じはちつともしないで、「物」を重ねたのが氣になつて此句は好きになれない。

次郎 うるさい氣味が現はれてゐるとはとれないか。

健夫 それよりも洒落の方がより多く感じられるのだ。

豊隆 芭蕉も洒落にするつもりで重ねたのではなかつたらうが、どうもさうとられる危険が随分あるね。——山田さんはいかがです。

孝雄 意味からいふと小宮さんのお説に近いのです。だが感じからみると阿部さんのお説にも近くなります。

次郎 どうもさうとるのが一番普通だと思ひますがね。岡崎君は。

義惠 さうもとれます。

孝雄 この句に「物」といふ語が二あるが、上の「物」と下の「もの」とはさす所が違つてゐます。

次郎 だがその「不定……」の用法では資格は同じでせう。

孝雄 え、だから非常な危険を冒してゐるのですね。

次郎 此句が問題になつたのはそこが重な點でした。——前句からの出方は平凡で大したことも
あるまい。

典嗣 「せつかれ」といふのはいい言葉だね。利いてゐるよ。

次郎 うん。

豊隆 僕の田舎では今も使つてゐる。——それから僕の田舎にはせつないといふ言葉がある。是
はう、さいといふ意味を持つてゐる。ことによるとこのせつないはせつくないのくがとれて出来
た言葉ぢやないかと思ふ。

孝雄 さういふ用法はあまり聞いたことがありませんね。

次郎 「せつくない」か。そいつはちつと洒落すぎらあ。

豊隆 「せつく」からさういふ風に轉化して行く様な例は外にありませんかな。

孝雄 さあ、それは一寸無理ではないかと思ひます。

豊隆 さうですか。——此附方は僕もさういい附だとは思つてゐない。

典嗣 つまり芭蕉の附方にも平凡なのや本質的でないのがあるといふのだね。

次郎 いかにも芭蕉だつてさう凝つた句ばかりは附けないさ。

○

物おもふ身にも喰へとせつかれて

月見る顔の袖おもき露

碩翁

典嗣 此句は中中むづかしい。ここに持ち出された道具は月・顔・袖・露で、『新古今和歌集』あ
たりによく見られるものだと思ひます。家隆朝臣の「野邊の露浦わの浪をかこちても行くへも知
らぬ袖の月かけ」などは、浪が加はつてゐるが（この場合にも後の句に波が出てくるが）その最
もよい一例と思ひます。一わたり見て、句意はよくわからないが、新古今流の常用の道具立を使
つて、別に一貫した意味を言はうとするのではなく、その道具立の取りまぜられたところに何と
なく一寸趣が出る、丁度印象派の作品のやうに見ても味はへる、これも一つの解釋の仕方せう。
しかし私は元來『新古今集』のわかりにくい歌なども本歌を明らかにし、又凝つた修辭の關係を

よみほどくと、やはり大抵は作者に言はんとした想即ち一貫する意味が認められると思ふところから考へて、此句にも作者の言はうとした一貫したものがあつたと思ふ、その立場から解釋してみた。此句のよつた本歌があつたかどうかはわからなかつたが、修辭の方からいふと「袖おもき露」は「露おもき袖」で、袖を重からしめる露だと思ひます。それと「月見る顔」とのかかり結びはどうとつたらいいか。私は少し無理かもしれないが、此句の主人公は女人で、月見る時に顔を半分袖で掩うてゐる、その袖には露がしつとり降りてゐる、露は同時にまた泪でもある、ととる。此句はさういふ婦人の姿態を描いたものとして、そこから生ずる情趣を味はふべきなので、すなはち前句との附き方も、物おもふ婦人の姿態で相應する、と思ひます。

次郎 僕も仕方なしに君のやうに考へてゐた。——ここでは「の」が曲者だよ。月を見る時袖を顔に當ててゐるといふ解釋を成立させるやうな、何かはつきりした文獻があるかね。

典嗣 舞とか俗謡にあるかと思ふが、何か心あたりはないか。

次郎 小宮、お能などはないか。

豊隆 しらないな。——第一そんな村岡のやうに袖を翳させなくつても、この句のビルドは出来ると思ふ。「顔」と「袖」とは空間的にはもつと離れてゐて可いんだ。此句は特殊な女の「顔」

を描いたのだらう。

健夫 僕もさうとつた。

豊隆 これは女の「顔」の描寫で、その女は「袖おもき露」で特殊化されてゐる。——つまり泣いてゐるのだな。

次郎 すると或る感じをもつてつなぎ合はせたのだと見るのか。

豊隆 うん。此「の」は微妙な用法の「の」なんだ。「顔」をポセシヴ・ケースにする「の」ぢやないと思ふ。ここで一番エムフ・シスを置かれてゐるのは「顔」だよ。

次郎 小牧もさうとるのか。「の」にさういふ用法があるかね。

健夫 え、「の」で切れるのだ。「顔」と「袖」とを直接につけてはいけないのだ。

次郎 だがさうすると句が割れて面白くないよ。

典嗣 どうもそれは無理な用法だな。

豊隆 うん、無理な用法をしてゐるのだ。

孝雄 私は此「の」には無理がさせられません。「顔」の「露」といふ風に、「顔」をすぐ、「袖」へ附けないで、「露」に連絡させるのです。

次郎　するとやつぱり印象は割れますね。

孝雄　「月見ればちどに物こそ悲しけれ」のやうな歌を詠む人で、この顔は悲しい顔です。「露」は泪の露です。

次郎　岡崎君、これは正徹あたりの歌から解釋できませんか。

義惠　さうですね。

豊隆　さうだ、山田さんの説の様にすると、「の」を「顔」のポセシヴ・ケースを現はす手爾波としても可い譯だな。さうして、かういふ構成は獨逸語には可也ある。

次郎　だが顔と露をかう結ぶやうな「の」があるかね。例はどんなものだ。

豊隆　例は即座には出て来ないがね。——君、何か適例はないか。

健夫　さうさな。——

次郎　小宮達のやうにとると印象が割れないか。

豊隆　「の」でパウゼを置けばいいさ。

健夫　僕はさう印象も割れないと思ふよ。「顔」を焦點としてひとりの姿を表現してゐるのだからね。

典嗣　かういふ句は修辭に凝つてあつても結局『新古今集』邊の弊風を承けてゐるので、さう有難がらないでいいと思ふ。

豊隆　然し七・七の短句でこれだけの事を言はうとしたところは買つてもいいと思ふ。

孝雄　私は一句としての解釋はつくと思ひますが、句としてはあまり買ひませんね。

次郎　此句からギジョンを描かうとすると、村岡のやうにとるより仕方がないやうだ。

豊隆　然し月を見ながら顔のところに袖を翳すといふのは、意味をなさんぢやないか。

典嗣　いや、さういふことはありさうだよ。もつとも今はつきりした證據をもつてゐないがね。

豊隆　第一おかしいぢやないか。

次郎　岡崎君の説を聞かうぢやありませんか。

義惠　私は此句の印象が割れてゐるといふ説には一應賛成しますが、もともと此様な句は鮮明な印象よりも朧な空氣を主にしてゐる、さう焦點をはつきりした一局部に置いてゐるものではないと思ひます。「の」で一才切れて其間に「さういふ顔の人があつて其人には次のやうな事が起つてゐる」といふ風な餘意が含まれてゐるのではないでせうか。つまりかういふ「の」はそれ以下語句の全部へかかる氣持を含んでゐる。それでこれはその人を顔からも袖からもその周圍からも

描いてゐます。袖が露のために重く感じられるといふやうな内面からの描寫もある。いろんな方面から重ねて行つて、その間にその人の内外の佛を浮び出させようとしたのでせう。無論「顔の袖」「顔の露」といふ風に結びつける事も出来ませうが、さうしてみた所で、結局此句が茫漠としたものしか持つてゐないといふ事は言へると思ひます。

次郎 さうとつた方が自然だとも思へるね。

典嗣 『新古今集』などはさうとつていいものの方が多いいのではないかと疑はれるね。さういふところから誹諧に新境地が開かれたとしたら面白いことになるね。

次郎 うん。さういふ意味でも『ひさご』は大分あまいよ。

豊隆 あまいところもある。——「月見る顔の」で一寸パウゼを置くことは、短句が七・七といふ形式から出来上がつてゐるといふ事から考へても、一番自然な事ぢやないか。

次郎 さういふ解釋が出来ないこともないさ。

豊隆 君達のやうにその七・七をくつつける方が寧ろ無理だと言つても可いかも知れない。韻文的なものを散文的にしようとする事なんだから。

次郎 さうでもないさ。「中にもせいの高き山伏」などは切れないぢやないか。

豊隆 そりや例外もある。然しあれだつて読む時はやつぱり「中にもせいの・高き山伏」とデリケートに二息に讀むぜ。

次郎 ことも「顔の袖」とつて悪くないよ。

豊隆 それは寧ろ不自然なとり方だよ。

次郎 中心をもつたイメージをもたうとすると僕のやうになるよ。——山田さん、どうです。

孝雄 どつちにもとれませうが、私は此句に就ては小宮さんのお説に賛成です。ただ賛成だといふのはいい句だといふ意味ではありません。

次郎 こつちもそれでいけないといふのではなく、まだ十分に他の解釋の可能性を入れる餘地があるといふのです。

孝雄 顔を袖で掩ふて月を見るといふのはどうですか、あまり聞いたことがありませんね。

次郎 源氏繪卷などを見たら案外さういふことがあつたことも發見されるかもしれませぬ。

孝雄 兎に角此句はこしらへものですよ。

典嗣 さうだ、いろんな道具をもつて来てこしらへ上げた句ですな。

孝雄 珍碩といふ人はかういふ句をつくつた人ですか。この一巻だけでみても妙な句をつくつて

おますね。

豊隆 この男がこの『ひさご』を撰んだことになつておますが、芭蕉の晩年には『深川集』を撰んでもおます。『深川集』では大分作風が違つてゐるやうです。

次郎 師匠の風につれて流行したのだらう。

豊隆 さうかもしれない。——この戀三句は發展がなくてどうも面白くないな。同じ様な氣分のもものがつづき過ぎてゐる。

孝雄 え、三枚つづきといつたところですね。

次郎 さうですね。

典嗣 かういふのは僕にはわかりやすいよ。

孝雄 三句の移りから考へると、あまり上手な附方とはいへない。大分輪廻りんねじみておますね、もう少し突放さなくてはいけないと思ひます。前の二句はまああれでもいいが、ここは三句目だから、もう少し變つてもいい所だ。

次郎 然し身に覺えがあるが、僕等がやると大抵かうなりますね。

孝雄 兎に角自分でやるのと批評とは大分違ひますよ。

豊隆 女の泣顔に月がさしてゐる、若くは月を見ながら女が泣いてゐる、さういふ女の涙にぬれた「顔」を描かうとしたのが此句なんだらうと思ふのだが——もつと違つた描寫のしかただと、それがもつと面白く出さうに思はれるのだが。

孝雄 さういふ意味で描いたのでせうか。すると村岡さんや阿部さんのお説に大分近くなりますね。

〔義惠〕 この「の」から自分が感じてゐるものを文法書の中に探してみると、まづ次の様な場合に近いと思はれる。

空蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬもののかれぬべらなり（古今集、十四）

なつかしくやはらかなるものいとめづらに面白し（宇都保、俊蔭）

これは山田さんの『日本文法講義』に出て居るもので、「前後の二事實の同時に存し行はるる由をいへるもの」といふ説明が加へられてゐる。三矢氏の『高等日本文法』には「主格名詞を同格的に重ねる時に、ナガラ ニテ ナルガ等の意に通ひて一種の接辭の如くなる」場合を次の如き例で示してある。

爲朝は六尺ばかりなる男の、目かどふたつ切れたるが云々（保元）

いとむげにちごならぬ齡の、まだはかくしう人のおもむけをも知り給はず（若紫）
これがもつと詩的に自由な用法になつたものが、新古今から誹諧へ迄の修辭にあるのではないか。その立場から今かりに、通俗の方法で此句を散文化するならば、

——其人は月見る顔の（ナルガ、ニテの意）袖重き露にそぼちて——
と云ふ事になる。かうすると、此顔は月見貌をしてゐるので、心は月にないのかも知れないといふ意味が加はるやうである。誹諧ではもつと自由に使はれた「の」があるやうに思ふ。それに就ては次の句に追記する。（追記）

○

月見る顔の袖おもき露

秋風の船をこはかる波の音

水 碩

典嗣 「秋風の船」といふ言葉は一寸新らしいやうだが、新古今以後和歌にも「秋風の宿」とか

「秋風の身」とかいふ類似の用法が相應に求められる。それをここは「船」にした丈であらう。句意は秋風の吹いてゐる船路に波の音が高くなつて來たので船旅をこはがるといふのでせう。此句も前句と同じ様に「秋風の」の次にポーズを置くことも出来るやうですが、私は「秋風の船」とつづけて見たい。——前句とのつづきは、前句を旅の途中で月を見る女の有様とし、ここは女の心持に發展してゐる、と思ふ。それだけです。

豊隆 僕は「秋風の」の次にパウゼを置く。「秋風の・船をこはかる波の音」だな。

典嗣 といふと第一節と第二、第三節との二つが相重なつて一つの情趣を生むのだと見るのか。

豊隆 といふより、秋風は天下を吹いてゐる、「船をこはかる波の音」はある一地點での出來事なんだ。

次郎 「秋風の船」と續けてもさうなるにはなるよ。

豊隆 だがさうつづけると、少し不自然に感じられる。

典嗣 「秋風の庭」とか「秋風の宿」とかいふのはよくある用法だ。

豊隆 下七に使ふのなら、それでも可いかも知れないが、然し此場合は「の」の次にパウゼを置く方が自然だと思ふ。さつきの七・七の場合と同じ様に、長句は五・七・五で成立つてゐるんだ

からな。

次郎 山田さん、この「の」は小宮の説のやうにとれますか。實は僕も「の」の次に休息を置いて読んでゐたのですが。

孝雄 ここではむしろ村岡さんのお説の方に賛成です。

豊隆 この「の」の様な用例は發句の方にはいくらもあるやうに思ふ。つまり「や」と同義の「の」なんだ、然し「や」では強すぎ又切れすぎるので、ぐつと柔かな、切れるとも切れないとつかない「の」を使つて「秋風の」としたのだ、と僕は思ふ。

次郎 うん、ここは發句ではなく平句だからね。

豊隆 それで、もし三つによむとすれば「秋風の・船をこはかる・波の音」といふ風に切つて讀むのだ。

次郎 此句の世界は面白いよ。——連歌にはかういふ隠された主格のぐるぐる變る表現を許しませんか。

孝雄 あんまり見うけませんな。——此句も前句も『新古今』風の歌の感じですね。

豊隆 村岡、君はこの作者は、若くはこの句の主人公は、どこに立つてゐるとするのか。

典嗣 主人公は船の中にあるのだ。

豊隆 さうか。僕は必ずしも船の中になくてもいいと思ふ。岸に立つて怖がつてゐてもいい。

次郎 句中の主人公は船にのりかけるところで、作者はまあ怖いわと縫られてもいいのだらう。

豊隆 念の入つたことをいふね。——僕には寧ろ「船」といふ言葉があるので、船の中にあるのではなく、船の外に——船を離れて立つてゐるものやうに感じられる。

典嗣 僕はさう思はないよ。

次郎 僕は小宮に賛成だ。片足船に入れかけてゐることにして置かうぢやないか。

豊隆 阿部のはこの句を解釋してゐるのだから小説をかいてゐるのだからわからない。——岡崎君はどうです。

義惠 どつちにもとれます。船宿にしてもいいだらうと思ひます。波の音をきいてゐるうちに次第にはなくなつて來たといふ様にもとれます。

次郎 船に乗込む時にしてもいいね。

豊隆 どつちにとつた方が面白いか。

次郎 それは君の方がすつといいさ。

豊隆 小牧はどうだ。

健夫 僕をはじめ船の中のもりであつたが、君等の説を段段聞いてみると、どうも岸の方がよささうだね。舟宿か何かにある場合として、船を少し離して見た方がいい。それに「波の音」も岸の方が一層よく利いて来るやうだ。

義惠 船に乗つてゐたら、波の音よりは外のものがかへつて恐怖をひきおこしやしないかとも考へられますね。——それにしても此船はどれ程の大きさで、乗つてゐるとしたら船室にあるか船上にゐるかといふやうな疑も起つて来る。——船に乗つて遊んでゐるところだといふ註釋者もありましたね。

豊隆 曲齋でせう。

義惠 さうでしたかね。——これから五句が非常にすぐれてゐますね。『ひさご』がよいといふのもつまりこの五句のためではないでせうか。

豊隆 次郎 さうだな。

典嗣 この「こはかる」は生きてゐるよ。

豊隆 うん。この句には人間も出てゐるし、自然も出てゐる。——曲水は中中働らいてゐるな。

孝雄 膳所の人だからかういふ句も出来たのですね。此句も比叡おろしか何かですな。

典嗣 比叡おろしなら湖上は可也荒れるね。

次郎 うん、確か宮本武藏が難船したのもあそこだつたと思ふ。

孝雄 『物類稱呼』に「近江國湖水にて風の定まらぬ事を論議といふ」とありますが、……そのふんぎといふ奴は湖上に乗出す人にとつては迷惑なものでせう。——さうなると小宮説の方がよくなりますかな。船に乗るのをこはがるところとつた方がいいやうですね。

次郎 小宮はすつかり味方が出来ちやつたね。

義惠 どつちにとつても面白いと思ひます。私などは學生時代に室戸岬の沖を廻つて毎年秋出て来たものですから、船をこはがるといふ心持はわかり過ぎる程わかるのです。

典嗣 うん、體驗で解くより外に仕方がありませんね。——湖水は場合によると割に荒れるものだ。諏訪などもさうらしい。

孝雄 えい。私は初め琵琶湖を考へなかつたものだからどうも此句がよくわかりませんでした。

豊隆 さうですか。私は後の句のためでもありませんが、宮と桑名の渡しを考へてゐました。

孝雄 私もあるそこかと思つて一寸調べてみました。あそこはそれ程「こはい」渡しでもないや

うですね。

豊隆 いや別に險所でなくても、秋風が吹いてゐるために「こはい」のでせう。

孝雄 え、それでもいいわけですね。ただ私はさういふ経験がないのでよくわかりませんでした。

豊隆 此句を讀むと、何だか風の吹き方や波頭の白いところまでがありありと見えるやうだ。つかまへ方がうまいからでせうね。

〔義惠〕 此句の「の」が如何なる詩的機能を持つて居るかといふ事は、今の所私にはまだ研究中だ、と言ふ外はないが、思ふ所の一端を記して他の研究を促して置く事は必要だと思ふ。本來「の」「に」等の助辭は二表象の關聯を表はす事を主なる機能とするものであるが、誹諧では、連句の附合、發句の配合が持つ氣息の通ひの微妙さに影響されて、悟性の範疇で片附けられない様な、特殊の性質を帯びて來たのではないかと思はれる。『俳書大系』によると、

名月の花かと見えて綿島〔續猿蓑・泊船集〕

名月や花かと見えて綿ばたけ〔有磯海〕

かういふ異同がある。この「の」と「や」とは其詩的機能の根柢に於て畢竟同じものを有するの

ではないか。兩者共相當に確かな書物に出てゐる以上、一が正しく、一が誤と言つて了へないもので、當時の俳人には「や」も「の」もつまり大差なきものとして受取られたのではないかといふ事が考へられる。尙例を擧げると、

三日月や地は朧なる蕎麥島〔三日月日記〕

三日月の地はおぼろ也蕎麥島〔泊船集・芭蕉句選〕

三日月に地はおぼろなり蕎麥島〔畫兄弟〕

此異同は「や」「の」「に」と變るに従つて文法的關係も違つて來、詩的效果にも無論或程度の相違を生じては居るが、併しその少少の變化を超えて、最も本質的な此句の美は、結局さう動く事はないと思ふのである。三日月の光、朧なる地、ほの白き蕎麥島の三表象群の、奥深き、自然の祕密を互に擔ひ合ふ如き結合こそ、此句の詩的本質であつて、それを支へる爲に用ゐる言葉は、當時の俳人には「や」でも「の」でも「に」でも差支はなかつたのではないかと思はれる。一層嚴密に言へば、實はかやうな助辭では完全に傳へられさうにもない、言葉で表はせないやうな認識以前の關係とでもいふ様な、純なる感情、純なる意識それ自體を表現せんとして、假りにかやうな言葉を探つたのではないか。

閑さや岩にしみ入蟬の聲〔奥細道・陸奥衛〕

淋しさの岩にしみ込せみの聲〔木がらし〕

象潟や雨に西施がねぶの花〔奥細道〕

蛙潟の雨や西施が合歡の花〔陸奥衛・泊船集〕

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間〔小文庫・泊船集〕

柚の花やむかししのばん料理の間〔嵯峨日記〕

此等を以て見ると誹諧に於ける「や」「の」「に」は互にその機能を分ち合ひ、いづれも幾分他の面影を帯び、或場合には殆ど何れも同じ様なものになつてゐるのではないかと考へられる。無論古典的文法で何の障害もなく解せられる場合がむしろ多いであらうが、併し文法關係が一讀明瞭と行かない場合には、誹諧と其流をひく多くの詞人等が一般に持つらしく思はれる特殊の語感を考慮に入れる必要はあると思ふのである。(追記)

秋風の船をこはかる波の音

雁ゆくかたや白子若松

水 翁

典嗣 「雁ゆく」は歌の用法では秋來る雁にも春歸る雁にも共に用ゐるやうです。兎に角飛んでゆく雁ならいと思ふ。作者の位置はその雁の手前です。白子・若松は四日市の近傍で、白子は白孤とも書いたことがあるらしい。若松はその北に當る海岸で萬葉集に所謂「吾乃松原」がそれです。此二個處からうける感じは白砂青松の明媚な風景でせう。さて句意は、飛んでゆく雁の行方を見て、あれは綺麗な白子若松の海邊へ向ふのだなと思ふのであらう。前句とのつづきは、鳥羽の方から四日市に向ふ船と見立てて、かういふ景色を出して續けたのでせう。

次郎 氣持のいい句だね。

豊隆 僕も此句は大好きだ。

孝雄 技巧も凝してゐないし、いいですな。

豊隆 村岡、此「雁」は秋だよ。

典嗣 さうかね。

次郎 「雁ゆくかた」で秋になるのでせう。

孝雄 ええ。

次郎 ここは秋三句つづくからどうしても秋でないで困る。

孝雄 春では後が都合が悪くなりますね。

豊隆 ええ。——此句の作者は白子若松よりもつと北の方の位置にゐて、雁が南を指して飛んでゆくのを見たのだらう。

孝雄 秋ですからさうなりますね。

次郎 山田さん、白子の観音は名高いものですか。

孝雄 ええ、不斷櫻があつて有名なものですね。たしか宗祇にその紀行文があつたと思ひます。——白子から若松をつづけて来たところなどは中中うまいものですね。地圖で見てもつづいてゐます。

典嗣 聖武帝の「妹爾戀。吾乃松原。見渡者。潮干乃潟爾。多渡鳴渡。」といふのはここをよんだのでせうね。

孝雄 聖武帝はたしかここらをお通りになつたことがある筈です。——連歌でもいいのになると

かういふのですな。此句などは宗祇と置名しても通るでせう。

義惠 此「や」は疑問ですか。

次郎 僕はさうとりました。

孝雄 はつきりさせてはゐませんね。

次郎 行方を想像してゐるのですね。

孝雄 そこに面白味があるのでせう。

次郎 ええ、はるかに願望する感じが出てゐますね。

豊隆 うん、此「や」は實によくきいてゐる。

孝雄 かうなると連歌のよいのと、誹諧のよいのとは同じになりますね。

豊隆 此味は和歌の味の非常によいのから出てゐるものではありませんか。

孝雄 ええ、さうもいへますね。必ずしも連歌とか誹諧とかいはなくてもいいわけですね。

典嗣 景色があざやかだね。

豊隆 景色が好いには違ひないが、それよりもつとふうはりした空気がいいよ。

孝雄 いや、どの點からいつてもいいですな。

次郎 異存はありません。

豊隆 前句の中のセンチメントとこの句の中のセンチメントとは可也似てゐるが、然しこつちはそれをずつとりファイインしてゐる。

次郎 女ばなれがしてゐるのだ。

豊隆 女ばなれはしてゐる、しかし色氣はある。

典嗣 色氣はないよ。

豊隆 色氣といふと變かも知れないが、ある特別な情趣があるだらう。

次郎 うん、赤いものはなくなつたね。

豊隆 いや、ほのかに赤いものはある。

次郎 あれば朝焼か夕焼の赤さだね。

豊隆 うん、それなんだよ。

雁 ゆくかたや白子若松

千部讀花の盛の一身田

碩翁

典嗣 一身田はイシンデンと振假名をつけた本もあるやうですが、本來はイツシンデンだらうと思ひます。

健夫 武内義雄君はあの地方の人だが、イツシンデンともイシンデンともいふさうだが、イシンデンが普通だといつてゐた。

孝雄 私も關から宇治山田へかけてあるいて行つたことがありましたが、その時土地の人はイシンデンといつてゐましたね。

豊隆 參謀本部の新しい地圖にはイシンデンと出てゐます。

孝雄 そんなら此句の詠み方とも一致するわけで結構ですね。

典嗣 「千部讀」とある佛會は彼岸會の時のことかと想はれる。とにかく春の櫻の今を盛りと咲きほこつてゐる時、一身田の専修寺で供養が催され諸國から信徒が群集するといふ、美しくも又賑やかな景色が描かれてゐます。前句とは、白子若松とは土地つづきだから、その連想から生れ

て、附いたのでせう。作者は前句を歸雁と見做して附けたのだと思ひます。

次郎 此二句は春、秋で雙幅と見てもいいよ。

典嗣 うん、さう見てもいい、だが僕は何となく續けたかつたのだ。

豊隆 一身田は白子若松よりもすつと南に當るやうだね。

孝雄 一身田を元にするよ、白子若松はその北東に當ります。それで前句を歸る雁と見做したといふ説もいへないことはありませんね。

典嗣 「千部讀」といふのはどんな儀式です。

孝雄 いづれ此地方は門徒でせうから、淨土三部經の中の一部か全部かは分らないが、それらの經文を千回讀んで華華しく行ふのではないでせうか。

典嗣 あまり辭書などにも見えないやうですね。何か説いたものがありませうか。

孝雄 どうも辭書には淨土宗以後のものはあまり載つてゐませんね。大般若經六百卷翻讀の眞做をして千部讀むのだらうと思ひます。

豊隆 『大鏡』には「寛正年中、下野高田より一身田に移して本山とす。子年上十日丑中十日寅下十日の間、三部經を一部として毎年三月僧百人にて轉讀す。上十日を本千部中を中千部下を末

千部と號け支廻に行ふ。此十日の外繼千部あり」と書いてある。

孝雄 さうですか。尙私の知人に訊ねて見ませう。

次郎 僕は前句を見直す必要はないと思ふ。

典嗣 雙幅にしてみようといふだね。——然し作者の連想が「白子若松」から「一身田」と來るのはきはめて自然だね。

次郎 うん、土地についてはさうとつてもいい。ここでは、山田さん、「一身田」は何か花盛りが特別な感じを持つやうなところですか。

孝雄 いづれ此花は櫻でせうが、季節は彼岸すぎでせう。あの寺は大變大きな寺であつたと思ひます。

健夫 武内君の話では春秋の彼岸には千部讀が行はれる、境内には櫻が多いとかいふことでした。

典嗣 たしか名所圖會にも境内に櫻がかいてあつたと思ふ。——かういふ佛會を見たことのある人にはさだめし此句の感じもよくわかるだらうね。

次郎 うん。それに前句とならべると、うつりがいいよ。

孝雄 一身田は參宮街道にあたつてゐるので、伊勢詣りをした人はよく此町を通つたこととせう。

珍碩もことによつたら來たかもしれませぬ。

健夫 一身田といふ地名の起原が祖徠の隨筆か何かに書いてあるさうですね。

典嗣 え、『三代實錄』にあるのを祖徠が引用したのでせう。同書には「爲一身田」とある。朝廷から荒廢した田を賜つて一世に限るといふ意味らしい。

次郎 すると一世田だね。

典嗣 意味からはさうだらう。——これはわかりのいい句だ。

豊隆 それにいい句だよ。

孝雄 かういふのは何附けといひますか。

豊隆 さあ、何といひますかな、ひびきでもなく、にほひでもなしと……

次郎 曲齋は何といつてゐるのだ。

豊隆 □印がついてゐる。

次郎 「起情曲節也」

豊隆 さうか、するとまあ移りですか。

次郎 うん、名はどうでもいいよ。

〔孝雄〕 本居宣長の『菅笠日記』を見ると長谷寺で千部經に出あつた事を記してゐる。「猶そのわたりたゝすみありく程に、御堂のかたに今やうならぬみやびたる物の音聞ゆる、かれはなにそのわざするにかと、しるべするをのこにとへば、此寺はじめ給ひし上人の御忌月にて、このごろ千部のときやうの侍る、日ごとのおこなひのはじめに侍るがくの聲也といふに、いとをかましくいそぎまゐるを、まだいきつかぬ程に、はやく聲やみぬることあかずくちをしけれ」といふ文がそれである。これは明和九年三月吉野の花見に赴きし道すがら七日に大和長谷の觀音に詣でた折の記事であるが、この時、長谷寺では「此山の花大かたのさかりはやゝ過にたれど、なほさかりなるもところへにおほかりけり」といつてゐる如く櫻の花見時を期して千部經會を修したと思はれる。勿論長谷寺は眞言宗、専修寺は淨土眞宗で、宗旨が違ひ、讀む經も違ふと思はれるが、春の花時に千部經會を行った事は同じ心持であらう。さうしてこの『菅笠日記』でみてもこの法會は幾日もつづき、又音樂などあつて花やかなものであつたらうと考へられる。(追記)

千部讀花の盛の一身田
順禮死ぬる道のかけるふ

水 碩

典嗣 句意は明らかでせう。順禮はこの頃は盛に行はれて信仰と遊山とを兼ねて、否むしろ遊山が重で、名所名所を見物するために廻國する習慣となつてゐたけれども、ここのはさういふ遊山本位のものではなく眞に信仰の動機からの順禮者で、むしろ女人と考へられます。その汚ない姿をした順禮が途中で死ぬ、その途に陽炎が燃えてゐる、といふのが此句の意味で、句の取柄は一種悲惨な状態を美化したところにあるのでせう。前前句以來の土地が伊勢參宮街道にあたり順禮のゆききする道であるところから自然前句とも附くと思ふ。『順禮細見記』を見ると「白子よりうへのへ」の次に「上野より津へ」とあつてそこに「なかせ村並松過ぎて左りに高田御堂へ行立石あり」とある。高田御堂はいふまでもなく一身田の専修寺です。前句は櫻花爛漫たるにぎやかな佛會の様子、後句はあはれな順禮の死ぬ場面、しかもそこに陽炎を配して後句の悲惨を美しく包んでゐる趣がある。

豊隆 此順禮は汚ないのか。

典嗣 汚ないといふと困るが、信仰のための順禮者だから、さだめて身なりなどもさうさうきらびやかなものではあるまい。

豊隆 だが汚なくては困るよ。僕は是が、若い美しい女であるといひ位にも思つてゐる。

次郎 此句を繪にすれば畫かきは順禮の服を汚なくはしまひね。

豊隆 名所見物を目當の順禮でもいいと思ふ。

典嗣 いや信仰心を主とした女にしたい。

豊隆 だからといつて汚ない著物を著せる必要はあるまい。

次郎 眞面目な信心の巡禮で、理詰にして行けば衣物はきたないだらうが、陽炎の立つところに死ぬのだからな。そんなに汚なくしないでいいさ。死を美化すればいい。きたないところなどはあつさり畫いておくれ。——かういふ附方も面白い。

豊隆 ここいらは非常な變化だね。

典嗣 一身田のお寺には女の順禮が特に行くといふやうなことはありませんか。

孝雄 さあさうときまつてはゐますまい。——ここは順禮の死ぬのを見てゐるのですか。

豊隆 死につつあるのを見てゐるのではありませんか。

次郎 死ぬのを見るか否かはどうでもいいさ、人生の一事件としてかういふ事もあるといふのだ。すべては陽炎につつまれてゐる。

典嗣 それと同時に途上で起つた一事件だらう。

次郎 うん、それでもいい。——物を見るのに、かういふ立場もあるぢやないか。

豊隆 うん。實は順禮は死ななくてもいいのだね。特殊のギジョンになりさへすればいい。

典嗣 小宮君、この「の」も切れるか。

豊隆 是は別に切れなくても可いだらう。——綺麗な順禮の死につつあるシチュエーション、それを包んで陽炎が立ちつつある感じ、それだけだが、それでこの句は實にいいね。

次郎 うん、別にむづかしいこともないが、いい句だね。

豊隆 此句のファンタジーは『冬の日』あたりから脈を引いてゐるもの様ぢやないですか。

義惠 え、ただファンタジーといふ點から見るとですね。然しそれを支へてゐる精神はやはり『春の日』あたりに近いと思ひます。

豊隆 え、大分角がとれて来てゐますからね。

典嗣 ここの附合は芭蕉の一番いいところか、それともこれから發展しようとしてゐる邊か。

豊隆 此四五句の所は随分可いと思ふ。然し概して言ふと此時分のもは、一番いいところから一つ手前だといふ様な位置にあると思ふ。

典嗣 するとまだ甘いところがあるわけだね。

次郎 僕はどうもまだ甘いところを感じる。

豊隆 ここいらでもさういふ氣がするかい。

次郎 いや此邊は結構だ。多少の甘味はあるがね。

豊隆 然しあまくはないだらう。——これで前句が「雁ゆくかた」とこの「順禮死ぬる」の間にはさまつてゐるので、一寸落ちるやうだが、それで又中中いい。

孝雄 え。

豊隆 前句は、此句や前前句とはゆき方がまるでちがふやうでゐて、然もちゃんと獨立した立派な味の世界を纏めてゐる。

孝雄 かういふ句は外にありますか。私など此句は非常にいいと思ひますが。

豊隆 『冬の日』時代には大分ありますね。

次郎 ファンタジーから云へば「佛喰たる魚解きけり」とか「影法のあかつきさむく火を焼て」

とか「野菊までたつぬる蝶の羽おれて」とか大分ありますね。ただあつちの方では意氣込が生のまままで出てゐる、そこが違ふところですね。

孝雄 かういふやり方は『猿蓑』以後段段と消えてゆくのですか、それとも發展するのですか。

豊隆 もつとりアリスチックなものへ向つて行つてゐる様に思ひます。

次郎 この邊が『ひさご』の特色の一番よく出てゐる部分だね。

豊隆 うん。

典嗣 ここいらを芭蕉の精髓と認める人もあるかね。

豊隆 さういふ人もあるやうだ。然しそれは全く味ふ人の趣味の問題だね。

次郎 此卷はたしか『ほそ道』の頃だね。

豊隆 『ほそ道』の翌年になる。

次郎 すると芭蕉が四十幾つかしら。

豊隆 四十六七だらう。

次郎 ぢや僕らと同じ位だね。中申若いところがある、僕らも此位は若くてもいいね。

豊隆 どうも若さが少し違ふやうだ。

義惠 此句は芭蕉ではありませんよ。

次郎 いや僕のいふのは一帯に此邊の句を指してゐるのです。

豊隆 かういふのは西洋の詩にもありさうだな。

次郎 うん、ファンタジーはありさうだ、姿はこつちのものだね。

義惠 陽炎は西洋の詩にも澤山出て來ますか。

健夫 無いではないと思ひますが、今一寸思ひ出せません。さう澤山は出て來ないでせう。

豊隆 ゲーテの詩にはなかつたかな。

次郎 あるかもしれない、『ガニメード』邊になかつたかしら。

健夫 『ガニメード』には此言葉は出てゐないやうに思ふが――

義惠 「かげろふ」の語原は。

孝雄 日かげのかげから出てゐるやうです。

義惠 かぎろひとは同じものですか。

孝雄 ええ。

次郎 「ひむかしの。ぬにかぎろひの。たつみえて。かへりみすれば。つきかたぶきぬ」といふ

人麿の名歌がありますね。

典嗣 あの「かぎろひ」は日の出のけしきをいふのでしたね。

孝雄 あの歌の詠み方も眞淵が詠み出したのです。

典嗣 一體日本語のかけは光と關係あるので陰影とは關係がないのでせう。

孝雄 ええ。今の言葉でいつたら光線とでもいふのでせう。

典嗣 今日の句はみなよかつたね。いい氣持だつた。

次郎 ものをいはずとも見てゐただけでいい氣持になるね。

一〇 (三月十一日)

順禮死ぬる道のかけるふ

何よりも蝶の現そあはれなる

水翁

次郎 此句は蝶が春光の中を飛んでゐるのを見ての觀想と思ひます。此句を讀むと、私等の眼前には、芭蕉の觀想を誘ひ出した蝶の姿が、芭蕉の主觀を通してその奥に浮んで來て、おのづから一種の繪が現はれます。——はかない、みじかい命をもつて春の光の中を生き物が飛んでゐる、それを見て無常を觀するところが實によく出てゐる。——「順禮死ぬる道のかけるふ」といふ前に附くのは、景色からも、空氣からも、感じからも、同じ地盤の上に立つてゐるからなので、(表現上)違つた立場から描いてゐるに過ぎないのです。附方は、前句の中のものから強ひて取出して附けたのではなく、さうかといつて又無理に離れてゐる様子も見えません。ふはり、と附けてゐる、そこが中面白いで、「浮世の果は皆小町なり」と附けた『猿蓑』の句よりは、はるか

に藝術的にすぐれてゐると思ひます。

正雄 これは前句に對して坊さんが偈を唱へてゐるところだらう。

次郎 それほど説教的ではないよ。

正雄 立場が違ふだけで前句と結局同じことを言つてゐるのさ。言ひ廻しは流石にうまいが、附味としては少しくどいね。

次郎 だが蝶を出して來たので一種の新らしさを開いてゐるよ。

正雄 蝶はさまざまな連想を誘ふから一概にも言へないが、今の我我が考へると思想陳腐の嫌がある。

次郎 一寸さういふ非難も出來さうだが、「浮世の果は」の句なら説教的と言つてもいいけれど、此句にはそんな句を感じないよ。太田の言ふやうな偈が出ないのは、影に蝶の姿がちらついているためではないかと思ふのだ。

正雄 觀想と君が言つたけれど、敘述がビルドリヒであるから氣持が好い。「何よりも」といふ初五は、一見蛇足のやうで實は中中生きてゐる。

次郎 うむ。——小宮は。

豊隆 別に異議なし。

正雄 此句を読んで感心するのは、芭蕉には少しもぎごちないところがないことだ。

孝雄 實は私も「何よりも」に一寸ひつかかりましたが、どうもしやうがありませんね。

次郎 あの初五が中中いいですよ。

孝雄 慾を言へば「何よりも」がなくて、是だけのことが言へたら、さぞいいせうと思ひました。

次郎 ところで此初五は道具立となるやうな文句を入れてはいけないところですね。

孝雄 え、それで問題にするのです。

正雄 だからこそ「何よりも」となつたのでせう。

豊隆 然し「何よりも」がなければ、「蝶の現」といふ言葉が可也アブストラクトなものになります。

孝雄 それをアブストラクトにさせないで「何よりも」を使はなければもつとよかつたと思ふのです。

次郎 姿としては蝶だけをぼつりと一つ光らして置いて、前後でこれを包んでゐるのがいいこと

ろでせう。

正雄 「何よりも」自身には何等の要求も提案もなく、而も能く空氣のやうなミリウを作り出してゐる。——何といつても結局賞讃になつたね。

義惠 私ははじめから賞讃してゐるのですから、いくらでもいい所を出して戴きたいのです。

孝雄 やつぱりいいですね。「何よりも」が一寸氣にかかるけれど、何とも外に仕様がなない。

正雄 今日は満場一致だね。——ところで「現」の意味は。

次郎 我我のうつつの生活ではないかと思ふのだ。うつつみといつたやうなものだね。

豊隆 現象の悲哀ぢやないか。

次郎 現象といふと本體を考へるのか。

豊隆 さうだ。本體へのあこがれを胸に持つて眺めると、蝶とか人間とかいふ様な現象そのものが「あはれ」に感じられる。さういふ悲哀が此所にあるのぢやないか。

孝雄 といふより、莊子の蝶の方でせう。

正雄 どうもさういふ氣がしますね。

次郎 といふと。

孝雄 此順禮が蝶か、蝶が順禮かわからないのです。此句ではそれが「現」に蝶になつてゐますね。そこに面白い意味が這入つてくるのぢやありませんか。

次郎 前世後世は知らずと言つてゐるのですね。順禮とかけなくても、そのうつつにあはれを感ずればいいのでせう。

正雄 ペルスペクチヴの廣いところが好い。

豊隆 君のはどういふ意味でペルスペクチヴが廣いと言ふのか。

正雄 形象的、觀念的、古典的等のいろいろな連想群を有してゐて、それが皆一つの焦點に集まつてゆくことだ。

次郎 前後に無限の時間をひつばつてゐるからパースペクティヴが廣いのだらう。尤も空間的にも春の空氣の瀰漫が感ぜられる。

孝雄 お断りしておきますが、私の解釋は莊子の胡蝶それ自身を言つてゐるのではありません。それと同じやうな見方がここに出てゐると言つてゐるのです。念のために申しておきます。

○

何よりも蝶の現そあはれなる

文書ほとこの力さへなき

碩翁

次郎 此句は従来二様に解してゐるやうです。その第一解といふのは、戀のためか何かですつかり弱り込み、氣力も衰へて、ぼんやりして、手紙を書く力もない、ととるのです。第二解は、戀がすがれて捨てられて了つた、男心を取りとめるために文を書かうと思ふ力も抜けて、心の失望落膽する様子だ、とするのです。力なくなつてゐる原因はどちらにもとれますが、ここは原因を考へないでもいい。單に心に力のなくなつたことを言ふのが作者の本旨でせう。前句にはふはりとした、太田の所謂バースペクティヴの擴がりがある。その中から、中に這入つてゐる一つのものを取つて来て附け加へたのが此句で、蝶を人間に譯しただけでは別に手柄にもならないと思ひます。前句にはなよなよとしたところがある、此句にもそれはある。然し附方から言ふと、がた おち です。——説明が抜けたからここに加へますが「文書ほとこの力さへなき」といふ句の姿から考へると、これは傍人が此「力さへなき」人を描寫したのではなく、主人公自身が彼の心を打出したといふ意味で自稱の句として解すべきだと思ふ。

孝雄 此句は戀ですか。戀にすると、「ほそき筋より戀つものりつ」とか「物おもふ身にも喰へとせつかれて」とかいふ句がちき前にあるから、近過ぎるといふ非難がありませんか。

次郎 戀は何句でもよかつたのではないのでせうか。連歌では何句去りですか。

孝雄 七句去りにしてゐます。

次郎 『三冊子』には連歌の七句去りを誹諧では五句去りにするやうに出てゐるやうでした。

孝雄 すると此句は「月見る顔の袖おもき露」から丁度五句目ですから、我慢は出来ますね。

次郎 それに誹諧では文字の戀でなくても心の戀でもいいさうです。

孝雄 それに此句の趣向は「物おもふ身にも喰へとせつかれて」に大分似てゐます。

次郎 ええ。

正雄 箸もつほどでなく文書ほどといふやうな心理的方面へ趣向を向けたところがまあはたらきでせう。——ただ困るのは三つも悲觀が揃つてゐることです。

次郎 その點働きがないね。

孝雄 ここは前二句が春ではあるが風がはりの句だから、後句は附けにくいですな。

正雄 それにしても作者に空想の力が足りないね。蕉門に於ける珍碩の位地は。

豊隆 蕉門では一方の旗頭——とまでは行かないが、まあ割に可い位地にゐる。然し此巻で見ると、「名はさまざまに降替る雨」だの「いふ事を唯一方え落しけり」だの、句の世界はそんなに廣い方ぢやない——寧ろ狭いね。

正雄 さうだね。誘はれて出る程度のもだね。

豊隆 進んで自分から新しい世界を切り開いて行く力はあまりない様に見える。

次郎 もつともこの巻では最後を除けばみな芭蕉の後をうけるのだから、いつも一番苦しい立場にあるわけだね。

豊隆 つまりかういふのが修業になつたのかもしれない。この男は後に『深川』や『市の庵』の様な、割に良い集を出してゐる。『深川』は元禄五年の末に芭蕉庵に逗留してゐたときの歌仙をまとめたものだし、『市の庵』は元禄六年夏大阪に居を構へて後芭蕉から貰つた「贈酒堂 湖水の磯を這出たる田螺一疋蘆間の蟹のはさみをおそれよ牛にも馬にも踏るゝ事なかれ 難波津や田螺の蓋も冬ごもり」といふ句を巻頭にして元禄七年の夏に出したものだ。

次郎 すると弱弱しい男か。

豊隆 いや僕の想像では、人の好い——愚直な所のあつた男ぢやなかつたかと思ふ。芭蕉から大

分可愛がられたやうだが、或は芭蕉にも珍碩（酒堂）のさういふ所が好かつたのぢやなかつたかとも考へられる。ともかくぎろりとしたところはこの人にはなかつたらしい。

（典嗣來）

典嗣 此句は平凡だね。取立てて評する程のこともないやうだ。

○

文書ほとんどの力さへなき

羅に目をいとほるゝ御かたち

碩 水

次郎 この句は勿論やんごとなき上臈の姿を描いたものだと思ひます。うすものといふ織物に就てはその道の人にやつていただきませう。時は夏だから羅を著てゐる、その袖をかざして目を除けてゐる「御かたち」です。さういふ上臈のポオズを描いたのが此句で、前句が主觀的に感じを打出したのを受けて、形で描いてみせてゐます。その形もなよやかな、所謂あえかに艶な姿です

ね。

典嗣 此「羅」はかつぎぢやないかしら。

豊隆 僕もさうぢやないかと思つてゐる。

次郎 するとヱイルを被つてゐるのか。僕の解釋は「羅」を着てゐる姿なのだ。しかもそのポオズが此句で描かれてゐるとするのだ。

孝雄 かつぎは手にもつものです。「羅」は著物につくるものと思ひますが、羅のかつぎといふのは果してあつたものでせうか。

次郎 併し『辰橋』では女が羅みたいなものを被つて出て來ますよ。

孝雄 それはありますが、ただあれを「羅」といへませうか。

次郎 さうですかね。「羅」といふ特別な織物はありませんでしたらうか。

孝雄 羅といふものは恐らく日本にはなかつてせうね。うすものといふのは支那の羅といふ字の譯で、今の絹なども羅の一種だといふ事です。

豊隆 昔笠のまはりに附けたひらひらしたものがありませんね。ああいふのもうすものではないでせうか。

孝雄 あれは虫の垂衣といつてもつと厚いものである筈です。若し被るとすれば此處では矢張りかつぎの方でせう。しかし、前に申した通り羅のかつぎがあつたかどうかはわからない。

次郎 ポオズとしては袖をかざしてゐる様にした方がいいのだが。

孝雄 本來此「羅云云」の出處は『朗詠』でせう。あの有名な「羅綺の重衣たるなさけ無きことを機婦に妬む」といふ句がありますね。その源は恐らく『文選』とか『白氏文集』などから出てゐるものでせうが、「日をいとほる」といふのがわかりません。——それで外出用のかつぎとすると、身分の極いい人は徒歩で外出する事が殆んどないから、そんなものを滅多に著ませんし、どうもよくわかりませぬね。

豊隆 この句の中の人物の身分が兎に角やんごとなき上臈である事だけは動かせない。

孝雄 ことによると庭に出たところかもしれない。

次郎 僕のはどこにゐてもいいのです。日がさし込むところなら家の中でも構ひません。例へば

西日のさし込む机の前など。

豊隆 然しもう一つ、此所の場所が戸外である事も動かさない様な氣がする。

孝雄 私には此句の焦點がはつきりしないので困ります。

次郎 僕は別に『朗詠』のことを考へないでも此句だけの姿を考へて見る事が出来るのです。

孝雄 すると阿部さんのお説と、小宮さん達のお説と、二説出るわけになりましたね。

豊隆 阿部は季を夏にしたが、此「日」は別に夏の日にしなくつてもいいだらう。

次郎 僕の解釋では理窟上夏としないと困る。然し句全體の本旨は單に或上臈の格構を描いたに止るので、さう時節は問題にならないのだ。

豊隆 さうか。——それにしても大していい句ぢやないな。

正雄 それに實感がないな。

豊隆 だが調和はしてゐるね、前句と。前句がまづいからかうなつたともいへるかも知れない。

孝雄 調子も弱過ぎるといへますね。——『源氏物語』にかういふ個處がありませんか。女三の

宮が柏木に見つけられるところは確かかういふ景色ではなかつたですかね。

典嗣 さあ、どうでしたかね。夕映にてらされる場面をかいたところはおぼえてゐますが。

正雄 つまり此句はまづいといふことになるね。

次郎 僕は、然し、特別にまづいとは思はないよ。平凡だといひたい。此句が何かの佛を出してゐるのなら、其源を發見出來ると、自然此句の面白味もわかるのだが。

孝雄 私にはどうも腑に落ちかねるところがあります。誰かが私の無識をひらいてくだされば有難いけれど。

次郎 然し笠を被るなり目をよけるなりで繪にはなりますよ。

正雄 うん、繪にはなるけれど、それも院體や土佐繪の粉本を弟子共が模寫したといふやうな所だな。

○

羅に日をいとほる、御かたち

熊野みたきと泣給ひけり

水 翁

次郎 前句はわからない。前句に何かの佛を認めて附けたのだらうと思ひますが、何丸の『大鏡』に「是は増鏡に出たる久仁親王御年十一、熊野へしきりに參るべき由仰せらる、されば泣き給ひけるの詞にも叶へり」と出てゐるので、『増鏡』を開けてみました。すると話は違つてゐたが、

「烟のすゑく」の巻の終に、後嵯峨院が熊野へ御幸なされた折女院が一人で御見送り遊ばされたといふことが書いてあつて、辨、内侍その他の面白さうな歌が出てゐました。もし何丸などのいふ佛を持つて来て附けていいのなら、前句に院の御幸を送る女院の佛を見たのではないかと思ひます。後嵯峨院には前にわき腹の子がおありになつて、女院の御腹からは後深草天皇がお生れになつてゐるから、その間の關係から或エピソードが考へられる。あとで間もなく院と女院とは御同列で熊野にお出になつてゐるから、その前にかういふシーンがあつたことはポツンプルだ。ここは女院が熊野を見たいといつて泣かれるのです。

典嗣 『平家物語』にはかういふシーンはありませんか。

孝雄 さあ、見えないやうですね。

次郎 さて、前言つたやうな佛が出せるのなら、僕は芭蕉に感心する。といふのは、芭蕉が『増鏡』を讀んでゐたかどうかその事實はわからない。然し此所にかういふ佛を出したところから見ると、凡そ書物を見るときに可能的なシチュエーションを考へながら、或シーンを心に描きながら、人間の心を探りながら、讀んでゐたのだらうと思ふ。ゲーテが年代記を讀む時人物や事件を芝居に翻譯しながら悦んで見てゐたといふけれど、恐らく芭蕉もさういふ事をしてゐた人ではあ

るまいか。それで芭蕉の讀書はいろいろ連句の材料になつてゐたのだらうと思ふ。まあそんなことを僕は此句から引出したのだ。

孝雄 實は私も『増鏡』は讀んでみましたが、阿部さんのやうには考へませんでした。又外には別に熊野に關係のある様な話も聞きませんな。

典嗣 「熊野みたき」といふのはよくありさうなことだね。それ以上立入つて詮索する必要はあ
るまい。

豊隆 僕もさう詮索する気にはならなかつた。

次郎 『増鏡』をもつてくるにしてもこないにしても、さういふシチュエーションを考へるのだらう。

孝雄 固有名詞さへとればそれに賛成いたします。

次郎 それでいいのです。

正雄 熊野へ詣るといふことが當時の人にはどういふ空想を與へたかね。

豊隆 要するに信仰が主なんだらう。

典嗣 それに景色もなかなかいいのだ。

孝雄 え、信仰を主にしてかねて景色も加はつてゐるでせう。相應は、でな旅です。旅それ自身に一種の楽しみもありますが、参詣することが又最高の功德にもなりました。何しろ神様は観音の権化で、場所は日本の最南端で補陀洛と信ぜられてゐたのですからね。維盛が熊野で入水したのもさういふ思想が裏にあつたのです。

典嗣 維盛の奥方にも擬せられさうですね。

孝雄 え、奥方は高野まで行かれたのですな。——事によると芭蕉は此句をつくる一週間ばかりといつてはあまりだが、とに角少し前に『増鏡』を読んで、それを此所に利用したのかも知れませんよ。

正雄 さういふことはありません。日を限るのは少し變ですが。

孝雄 え、芭蕉のやうな人なら日数を考へないでもいいが、まあ我のやうな凡人なら一週間か十日前に何か讀むと早速それを連歌の中に應用するといふのはよくやることですよ。

次郎 さうですね。——ただ元祿頃に『増鏡』はもう板本になつてゐたらうか。

典嗣 刊行されてはゐた『水鏡』も一緒に。しかし一體當時はさう行はれたものではあるまい。

豊隆 いや、それはどうともいへないよ。芭蕉はなかなか本を讀んでゐたらしいから、さう一概

には言へない。

孝雄 それに季吟の御弟子ですからね。

豊隆 その上芭蕉は又なかなか記憶のよかつた人の様にも想像される節がある、随分昔に一度つかつた材料を、違つた時に違つて、すつと後に又使つてゐる様な例もちよいちよ見うける。

正雄 「みたき」といふ用法は、これでかまひませんか。

孝雄 文法的にいつても差支ないと思ひます。これで餘情をこめて終止する用法になるのですから。

豊隆 さうだ、この「みたき」が此所はなかなか活らいてゐる。これで感情が特にエムフアサイズされる。

孝雄 私はわからないくせに此句はいいと思つてゐた。うまく附けたものだと思ひました。事によると『平家物語』邊から系統を引いてゐるかも知れません。

典嗣 或は存外謡曲の『熊野』あたりからふとして連想されたかも知れないね。

豊隆 『熊野』の感じは然しもつとやんごとなくないものだよ。

孝雄 え、身分が違ふからね。

義惠 私は別に説もありませんが、先刻からのお話では、此句の主人公が女にきまつたやうですね。然し私は別に女に限る必要はないと思ふのです。

豊隆 え、それは私も言はうと思つてゐた所でした。是は必ずしも女に限る必要はない。子供でも可い。

次郎 僕は女にしたいね。それも何か佛が出ないと附かないのだ。

豊隆 前句にひつつければ、女にしたくもする所があるけれどもね。

義惠 子供とすると、御年十一の後深草天皇が熊野を見たいとお泣きになつたといふやうな事になりはしませんか。

孝雄 さういふ事實はないのでせう。

次郎 あれは何丸がいい加減の事を書いたのです。一寸前に後深草天皇のことが書いてあるが、熊野御幸は院なのです。

豊隆 お父さんが行つたといつて子供が泣くとしても可いちやないか。

義惠 さういふ佛があるともいへるでせう。

次郎 ただそれでは佛にする根拠が薄いね。

豊隆 いや、だからさつき僕は佛をそんなに問題にしなくても可いと言つたんだ。第一此句の

「熊野」はさういふパティキュラなものではなく、むしろアルゲマインな感じを與へる様に思ふ。

義惠 え、此所はむしろ子供らしい感じではないかと思ひます。

典嗣 どうしても此句は女だね。

豊隆 それは全く前句の承け方できまるのだから、何とも言へないよ。

次郎 此所は何としても女だね。もう少しアルゲマインで、固有名詞がないと、子供にしてもいけれど。

豊隆 此句のロマンスは必ずしも女を持つて來なくても十分成立するよ。「熊野」はむしろ前句から引出されたのだらう、薦たげなものが出さへすればそれで差支ないと思ふ。

次郎 子供ではいけないとは言はない、前句とのかかりから言つても自然にとると女だといふのだ。

孝雄 子供でないとも言へませんね。

豊隆 え、それですよ。どつちにもとれるのだ。そのとり方は人の好みに任せるといふことに

して置けば可いぢやないか。

孝雄 ただ何丸が擧げた『増鏡』の説に述べてある事は全然根據がないことだけは言っておかなければなりません。久仁親王などといふのは全くの間違ひです。

○

熊野みたきと泣給ひけり

手束弓紀の關守か頑に

翁 頑

次郎 「手束弓」は『萬葉集』の卷十九に「たつかゆみ、てにとりもちて、あさがりに、きみはたたしぬ、たなくらののに」といふ歌があるので、『古義』を見たら、手束弓は手で「つかねて持つもの」だからと註してありました。『和訓栞』には『袖中抄』を引いて手束はとつかで十束云云と出ておりました。詳しいことはその道の人に説明して戴くことにしませう。何丸や曲齋は、手束弓を紀の枕詞のやうにいつておますが、あれは嘘でせう。

孝雄 え、そんなことはありませんね。

次郎 『今鏡』に「あさもよひきの關守が手束弓ゆるす時なくまづゑめる君」といふ歌があるが、「まづゑめる君」がわからない。鹿持は前に云つた卷の十九の歌の註釋に「あがもへる君」として引用してゐる。さうすると意味はわかるが、さう讀む典據が何所にあるかはわからない。一體手束弓と紀の關守とはどんな關係があるのでせうか。事實上の關係は兎に角として、これは單に「紀の關守」の姿の描寫に役立てたのではないかと思ふ。「手束弓」とつて突立ち上つてゐる「紀の關守」の頑固な様子が眼に見える。前句とは「熊野みたき」で附いてゐるので、前句は熊野を見たいのに行けないで泣くところなのだから、中に自らゲーゲンマハトが含まれてゐる。そのゲーゲンマハトを此句が「紀の關守」の姿で出したのだらうと思ひます。それ以外には付きやうもないやうです。

典嗣 その反對勢力といふのは、熊野を守る關守なのか。阿部君のいふやうな附け方では僕等のやうに意味で附けてみると結局相違がないことになるね。一體さういふ附方も許されるのぢやないかしら。

豊隆 たださうすると「薄月夜に梅の花の匂へる」やうな附方とはいへなくなる丈なんだ。